



TITLE:

フランス勤工儉學運動小史(下)

AUTHOR(S):

森, 時彦

CITATION:

森, 時彦. フランス勤工儉學運動小史(下). 東方學報 1979, 51: 321-460

ISSUE DATE:

1979-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/66562>

RIGHT:

フランス勤工儉學運動小史(下)

森 時 彦

はじめに

第一章 フランスへの道

一、留佛儉學會

二、勤工儉學會と中佛教育會

三、参戰華工の到來

第二章 救國思想を求めて

一、留佛勤工儉學會

二、勞工神聖

三、五四運動の衝擊(以上前號)

第三章 分裂と再生(以下本號)

一、勤工儉學生活

二、二八闘争

三、リヨン進軍

第四章 共產主義運動

一、理論闘争の深化

二、中國共產黨旅歐總支部

三、反帝反封建闘争

むすび

付録

第三章 分裂と再生

一、勤工儉學生活

勤工儉學生のフランスへの航海は、それ自體が発見と學習の旅であつた。上海でフランス郵船の「四等船室」にのりこんだ青年たちは、親しい人々のさかなな見送りをうけて、揚子江から太平洋へ船出した。大抵の場合、フランス船は香港に寄航し

フランス勤工儉學運動小史(下)

て、中佛教育會廣東支部の派遣する勤工儉學生を收容した後、いよいよ軍閥戦争にあけくれる中國の土に別れを告げ、一路南下していった。ハイフォンをへてサイゴンに着く頃には、海の色も一變した。「汽船はまもなく西貢^{サイゴン}に着こうとしていた。と、海峡にたくさん⁽¹⁾の群をなし、隊を組んだ大きな象が浮んで、木材をはこんでいるのがみえた。列をなして、木材を引っ張りながら泳いでいるのだ」。もちろん、象だけではない。やしの木の下に、木葉で屋根をふいただけの粗末な小屋、水牛をおって三期作の稲作にはげんでいる農民、黒く光澤のある絹で身をまとった女性、激しく照りつける太陽と、毎日のように襲ってくるスコール、すべて北方の人間には鮮やかすぎる南國の風物であった。

青年たちは、せっせと筆をとっては見聞記をものし、國內の友人や家族のもとに送った。それはまた、世界を見聞することがまれてあつた中國國內の人々にとって、恰好の讀み物となつた。『國民』『新潮』『少年中國』などの進歩的雜誌も、おくられてくる航海記を競って掲載し、青年たちの視野を世界に開く材料を提供した。中でも、フランスの植民地ベトナムの實體は、特に貴重な教材となつた。もとより、勤工儉學生は、提唱者たちほど熱烈ではないにしても、フランス文明になおある種⁽²⁾のあこがれをもっていたのではあるが、その植民地の慘狀、とりわけそこでベトナム人以上の差別をうけている同胞の實狀に接したとき、あこがれは怒りにかわっていった。

サイゴンはもとよりフランスの屬地です。中國人と安南人には、ともに異常に苛刻な待遇です。サイゴンに住んでいる中國人と安南人は、一人一年に、中國人は十八元、安南人は五元だけを納税しなければなりません。と同時に、「身納紙」を書いて、そのうえに中國人は五本の指全部、安南人は親指一本だけ捺印して、四六時中身につけていなければなりません。というのも、フランス人がしょっちゅう尋問し、忘れてこようものなら、必ず捕えられ罰せられるからです。

サイゴンをでた船は、バンコク、シンガポールと寄航した。東南アジアでは、どの港でも多數の華僑たちが、學生たちを温

かくもてなしてくれた。船が港につくと、「國旗をうち振り、まるで身内のものを歓迎するかのように」、出迎え、動物園、植物園、ゴム園などを案内し、夜には家に招いてご馳走をふるまってくれた。シンガポールでは、辛亥革命以前から、同盟會支部を結成して孫文の革命活動を援助していた林義順が、二十臺もの車をさし向けて招宴し、祖國の富強を實現するためにりっぱな人材となるよう、勤工儉學學生を激勵する一幕もあった。⁽³⁾ 甚しきは、勤工儉學運動の趣旨に感動し、教員の職をなげだして運動に参加する華僑まであらわれたほどであった。「かれらの祖國を愛する心情、および祖國にたいする懐かしさと期待とが、われわれこの祖國の青年の一團をもてなすことに、集中的に發露していた」と何長工が回憶しているのも、決して誇張ではない。シンガポールまでは、十日あまりの航程であった。

マレイ半島を離れると、インド洋がはてしなく廣がり、五日ほどでコロンボに到着する。さらに、西にひた走ること一週間あまりで、船はアフリカ東岸、紅海の入口に位置するジブティの港にはいった。この二週間近くの間は、學生たちにとって、もつとも堪えがたい期間であった。船底の四等船室は、むし風呂のように熱く、少ししけると、たちまち嘔吐狼藉の有様。最初の試練であった。しかし、學生たちは、乗船するときには普通、「自治團」を組織して、船旅を快適にするとともにフランスでの生活に向け準備をおこたらなかった。それは、「同舟共濟會」とか「自治會」とか、さまざまによべれたが、實質は同じで、總幹事、娛樂幹事、參觀幹事、研究幹事、衛生幹事、書記などを互選し、その指導のもとに、給仕、清掃などの輪番制をして、規律を正した。⁽⁴⁾ わが何長工などは、「涉外係」に任じられ、船長のところに出向いていては、フランス語の實習にはげんでいた。

ジブティでは、一木一草だにはえぬ赤土の山と、かがんでようやく入れるような低い白壁の家、そしてまっ黒なはだをした、ある學生にいわせれば、『聊齋志異』にえがかれている鬼のような原住民、この單純な色のコントラストが眼を射た。ここから紅海に入り、四日ほどでスエズ運河の南口に着く。「全長一百六十八公里、幅八十から一百三十五公尺、水深十一、二公尺」の大運河を通過すると、そこはもう地中海であった。運河の北口ポートサイドで、數日間碇泊している間に、パリの中佛教育

會に打電し、マルセイユへの出迎えを依頼するのがしきたりであった。地中海にはいると、氣候はしだいにはだ寒くなり衣更えに忙がしかつた。「夜中にイタリヤを通過した。有名な、あのベスピアス火山がちょうど爆發噴火して、まるで赤旗が海のなかではためいているかのように、火焰が湧きかえる波浪に映り輝いていた」⁽⁸⁾。その「赤旗」は、四十日以上に及ぶ長い航海の終りをも意味していた。翌朝、船はマルセイユの港に入り、半日以上も通關手續にてまどつたあげく、ようやく上陸ということになった。

パリの中佛教育會は、到着した勤工儉學生の人數に應じて、一々四人の係員を派遣し、不慣れた學生を援助した。普通、マルセイユの町を半日ばかり見學した後、學生たちは夜行列車でパリに向つた。マルセイユ、パリ間は、當時十八時間の長旅であつた。ほとんどの勤工儉學生は、いったんはパリに出て、一週間から十日間、市内見物をして旅のつかれをいやし、その間にフランスでの身のふり方を決定した。

一概に勤工儉學といつても、何長工によれば、ほぼ三つのケースがあつたという。第一は「半工半讀」、すなわち昼間勉強して夜働らく。第二は「先工後讀」で、最初三ヶ月働らいて金をためてから勉強に専念する。そして第三は「先讀後工」で、まず手持ちの金で勉強し、なくなつてから働らく。⁽⁹⁾さらに莊啓によると、最初からまったくの勞働者となり、工場で技術を修得することに専念するケースもあつた⁽¹⁰⁾という。また、アルバイト學生でも、一日單位で勉強と勞働を並行させるのではなく、春休みとか夏休みに集中的に勞働するケースもあつた。

いずれにしても、どの形態をとるかは、所持金の多寡に左右されることが多く、省などの補助金をうけることができた者は、大體第三の方法を選んだ。概していえば、一九一九年から二〇年前半までに來佛した學生は、金錢的準備がかなりよかつたので、先讀後工する者が多く、二〇年後半になると、先工後讀、半工半讀型が多きを占めるに至る。パリ滞在中に、勤工儉學生の希望に應じて、中佛教育會が適當な學校あるいは工場の落着き先を決め、送りこむのが手順であつた。こうして、いよいよフランスでの勤工儉學生生活がはじまつた。

ところで、受入れ側の準備状況はといえば、中國國內での中佛教育會と、留佛儉學會及び留佛勤工儉學會との関係と同様、フランスでもこの關係は、非常に曖昧であつた。一九一九年五月、勤工儉學生の第一陣が到着したとき、中佛教育會パリ本部には、數ヶ月前に中國から派遣された李煜瀛と蕭瑜（子昇）が常駐しているだけであつた。以後、毎月平均百人に及ぶ勤工儉學生の來佛が見込まれていたので、中佛教育會は、特別に「學生事務部」を設け、常勤の職員をおいてその處理に當ることにした。主任という名目で採用されたのは、四川出身で農學を學んだ劉厚（大悲）である。學生事務部の仕事は、適當な學校を探すこと（覓校）、工場への就職を世話すること（覓工）、および各省の補助金の取次と教育會獨自の獎學金の貸與と返還など、きわめて煩雜であつた。後には中佛教育會全體で中國人二人、フランス人二人の計四人の常勤職員をおき、中國人の二人は學生事務部に配屬され、先の劉厚が會計、同じ四川出身の向堯璜（季堅）が渉外係を擔當した。さらに多忙の時には、以前から在佛している吳琢之、彭襄、樊澤培、李鶴林、周元圭、吳樹閣、羅世安、蕭瑜、李璜などが應援のアルバイトにかりだされた。⁽¹⁾

この年八月には、在佛の中國人が、約五萬フランを投じて、パリの西郊コロンブに家屋を購入し、中國人のセンターを建設した。「華僑協社」と命名されたこのセンターでは、八月三十一日に、講和會議代表陸徵祥及び駐佛公使胡惟德の各代理、パリ總領事廖世功などの列席のもとに、盛大な開館式典を舉行した。講演室、圖書室、商品陳列室などの設備がそなえられるとともに、在佛の各中國人團體もほとんどがここに事務所を移し、名實ともに互助組織の中心となつた。⁽²⁾中佛教育會も、早速この一角に事務所をもらい、學生事務部を移した。以後、來佛した勤工儉學生は、一度はここを訪れることになる。

學生事務部の仕事では、覓工がもっとも重要かつ困難であつた。第一陣到着前後に、學生事務部は、約二百の工場に雇用依頼狀を送付したが、その中八割は「しばし見送り」の返事であつたという。理由は第一に、第一次世界大戰後の不景氣であり、第二に、勤工儉學生の勤務能力に對する疑問であつた。⁽³⁾それでも、一九二〇年の中頃までは、ほぼ希望人數に見合うだけの就職先を確保することができた。就職先の主なところでは、パリ近郊ビヤンクール（Billancourt）のルノー自動車工場、クルーゾー兵器工場、リヨンの自動車工場、リヨン東南に位置する三つの工場地帯、サンシャモン（Saint Chamond）、サンテティ

エヌヌ (Saint Etienne) 、フィルミニイ (Firminy) の鐵工、機械工場、ビスケー灣に面するラロッシェル (La Rochelle) の造船、化學工場などがあった。一九二〇年の春休みまでに、これらを含め、三十三の工場、商店に、約百四十人の學生が就職した。⁽¹⁴⁾ 遠くイタリア國境近くのグルノーブル (Grenoble) の「總商會」は、特に中國人學生受入れに熱心で、八十近くの工場を紹介してきた。また、サンテティエヌヌの一工場は、即日三百四十二名に及ぶ見習工の受入れを承諾するということがあつて、覓工はほぼ要望をみたすに至つた。さらには、一九二〇年春休みだけのアルバイトでも、サンテティエヌヌ七十、サンシャモン五十、フィルミニイ二十、ハーフルー (Harfleur) 三十など、二百人近くの求人があり、⁽¹⁵⁾ どのタイプの勤工儉學生にも満足を与えることができた。

覓校の方も、問題がなかったわけではない。先讀後工、先工後讀あるいは半工半讀いずれにしても、勤工儉學生は、あまり長い間一つの學校にとどまっていることができなかったのに對し、學年あるいは學期單位のカリキュラムを組んでいたフランスの學校は、學費も學年學期單位で徴収していたからである。⁽¹⁶⁾ もちろん勤工儉學生にとって、正式の卒業證書を手にすることはなく、フランス語と初歩的な技術を速成的に修得し、一日も早く工場に赴き、實踐の中で技術を學ぶことが目的であつた。そのためには、速成科を設けてもらい、三ヶ月から半年で課程の修了するような形式が望ましかつた。パリにのこつた中佛教育會本部は、この要望をみたすため、フランス人職員を派遣して、各學校との交渉にあたさせた。

その結果、留佛儉學會以來馴染みの深いモンタルジ (Montargis) をはじめ、バンドーム (Vendôme) 、ムラン (Melun) 、フォンテンヌブロー (Fontainebleau) など十一校の中學校 (collège de l'Etat) が入學を認め、一部は中國人學生の速成科も設けた。一九二〇年の中佛教育會による統計では、五九九人が各種の學校に入學していたが、そのうち中學校は五二二人 (八七パーセント) と壓倒的に多く、工業實習學校二七人、無線學校二一人がこれに次ぎ、以下、高等農業學校、農業實習學校、パリ大學、電氣學校、飛行機學校、製紙學校、醫學學校等に、十人未満の入學者がいた。⁽¹⁷⁾

覓工と覓校という主要な仕事のほかに、學生事務部は、いわば福祉事業ともいふべき仕事も開始した。不慣れた土地で重勞

働に従事する先工後讀の學生には、特に病人、負傷者が續出し、その日暮しの生活から治療費を捻出することも困難であつたため、「救済互助會」という保險組織がつくられた。實施後一年間に、重病患者二十五人が、この組織から治療費を支給され、十一人は治癒、八人は入院中、そして六人が死亡（三人は肺病）という數字が記録されているが、「もし組織がなければ、この數十人は必ず貧病の厄するところとなつていただろう」と結論が下されている。一年間の収入が二萬五千フラン餘りに對し、支出は一千フラン餘り超過したが、貧困による無用の犠牲を最小限にとどめた功績があつた。

また、フランス語および工業實習が十分でないままに來佛した學生のために、二つの講習會が毎週、華僑協社で催された。佛文補習には、李璜、向廸璜などがあつた。工業實習では、參戰華工が千元以上の鐵工工具を寄附してくれたうえに、毎週出向いて、實習指導をしたといふ⁽¹⁹⁾。このほか、順調な時期には、講演會、遊覽旅行なども定期的に催され、勤工儉學生に歡迎された。

こうして、學生事務部は、勤工儉學生がフランスの生活をはじめに當り、種々の便宜を與えたのであるが、その一方で、各省からの補助金の取次や奨學金の貸與など、金錢問題を一手に處理していた關係や、往々にして勤工儉學生に獨善的な態度をとつた職員の體質から、勤工儉學生との間になにかと摩擦をひきおこしがちであつた。例えば、一九一九年十二月に來佛した二百四人の勤工儉學生から、換金の際、一元八フラン五十サンチームの比價であるにもかかわらず、職員が五十サンチームも手數料としてまきあげてしまった、という不平の聲があつたこともある。これに對して、李煜瀛は、「機關中の人が『官僚風をふかせる』とか『仕事ができない』⁽²⁰⁾というのは、極めて不公平の言」であるとして、極力、劉厚らの辯護にまわつた。ともあれ、外因に助けられた初期には、中佛教育會と勤工儉學生との關係は、比較的スムーズであつたとみておくべきであろう。

それでは、中佛教育會の斡旋により、各地の學校、工場に分散していつた勤工儉學生の生活はどうだつただろう。本來それは一元的に把握されるべきものであるが、便宜上、以下には學校生活と工場生活を分けて敘述する。

最も多くの中國人學生が學んでいたモンタルジ中學では、一九二〇年から二一年にかけて百四十人餘り、最盛時には二百人以上いたといわれ、フォンテンヌブローでも一九二〇年前半に六、七十人の中國人學生がいた。特にモンタルジが好まれたのは、以前からの因縁もあるが、農村地帯にあって、學費も生活費も安く、兩方で一ヶ月百五、六十フランもあればすんだからである。⁽²¹⁾フォンテンヌブロー、バンドーム、ムランにしても事情は同じであろう。特別の速成科が設けられた中學校では、中國人學生たちは自治會を組織した。モンタルジでも、校長が比較的理解ある態度を示し、中國人學生の自治活動を奨励した。一九一九年八月三日、モンタルジ中學の六十餘人からなる校友會は、ムラン中學の三十人餘りの校友會と合同で、「留佛勤工儉學學生會」という自治組織を發足させた。これより先、七月二十四日に章程通過大會、七月二十九日に章程にもとづく職員選舉をへて、この日、モンタルジ中學で成立大會が開催された。來賓には汪兆銘をはじめ、モンタルジ中學副校長、勞働者代表梅鈞などが招かれ、周無を議長として會は進められた。議長の基調報告によると、學生會には工作部、書報部、講演部、消費部、會務部の五部を設け、會長、幹事、理事などの役員はおかず、職員の分擔合議制で、會務を處理することになっていた。書報部は、各會員がやがて學校を離れて工場に分散していく時にそなえ、毎月一回「會務報告」を發行して相互の連絡をたもつこと、講演部は、隨時著名人を招いて講演會を催すこと、消費部は、フランスの消費組合にならって共同購入をすすめる、書籍、新聞、雑誌の共有制を實現することをつかさどった。さらに將來、全員が働らくようになるときには、儲蓄組織をつくることも計畫されていた。⁽²²⁾別の記録によれば、踢球部^{フットボール}といったスポーツクラブもでき、「雄辯會」をつくって、「知識と道德はいづれが重要か」、「世界主義と國家主義」、「資本家と勞働者」などのテーマで、辯論大會がしばしば開かれていた⁽²³⁾という。フランス人との相互理解の面にも、勤工儉學學生の活動はおよんでいた。フォンテンヌブローで學んでいた學生は、一九二〇年三月二十一日、中佛文化交流を銘うって、「游藝會」を開き、フランス人五百人、在佛中國人二百人を招待した。この地方の各新聞には前日、廣告が掲載されフランス人の興味をひいたという。開會の辭につづいて、音樂合奏、「わが國固有の文明を表現する」三十數人の徒手技擊、滑稽新劇を上演。このあと、曹強、呂其昌の二人が、フランス語の掛合いで日頃の成果を

披露し、喝采をあびた。もつとも、その内容は反日を訴える政治的題材であつた。「夫れ、德意志の國を蹂躪すること至れり盡せり。幸いに、佛、^{フランス}以てこれに勝つあり。いま、わが國もまた、まさに極東德意志の患えあり。佛人もまたこれを知るか。かの日本軍閥のわが滿州山東を奪うこと、また羅蘭、^{オランダ}亞爾薩斯^{アルザス}の故事と、なんぞ異らん。然して佛人は苦心孤詣して、竟に二州の珠還を得たり。吾輩は、深く佛人の精神を羨み、遂にまた自勉を知れり」⁽²⁴⁾。

次いで、モンタルジから招かれた湖南女子勤工儉學生の蔡暢、向警予、范新順、范新瓊、李自新、熊叔斌、熊季夫、蕭敏、舒之銳らが、「春鐸」の舞いを披露し、プログラムは、器械技撃、京調唱戲、中樂獨奏と續き、最後に中佛教育會の劉厚が閉會の辭を述べて、三時間にわたる游藝會の幕をとじた。『留佛勤工儉學的歴史』の著者は、この游藝會を以て勤工儉學全盛時期の表徴とみなし、「學生は教育會とまつたく隔閡なく、人人高興し、ついに一種太和の氣象を表現する」⁽²⁵⁾とまで言っている。この日の模様は、翌日の各新聞に詳しく報道されたという。

中等技術學校に編入された何長工は、先の統計からいえば、少數の例であるが、比較的めぐまれた學校生活をおくつた。これはノルマンディー半島に近い地方都市、サンセルヴァン（Saint Servan-sur-Mer）で、共產黨員の校長をはじめ、フランス人のあたたかい世話をうけて、勉學にはげんだことを回憶に記している。ここでも、まもなく一群の中國人學生が新たにやってきたので、學校は中國人クラスを特設し、ゆつくりしたカリキュラムを組んでくれた。何長工によれば、「學校では、實物教育と形象教育〔模型、繪圖などをつかつてする教育か〕を重んじた。われわれは機械を學んでいたので、どこでも機械からはなれず、つねに防護演習をやった。ときには、突然、非常召集があり、動作が機敏かどうかためされた。學校では、だいたいの、課外活動のほうが正規の授業よりおおく、およそ三分の一が正規の授業、三分の二が課外活動で、いつも見學とか旅行などの方法がもちいられた」。また、機械の勉強ばかりでなく、退役傷痍軍人の副校長から義足をみせられ、「わたしのこの足は、ブルジョアどもに奪われたのだ。奴らは金儲けのために戦争をやる。だが、自分では戦いにいかない。戦争をなくそうと思つたら、まずブルジョアをなくさなくてはならぬのだ！」⁽²⁶⁾と、資本主義社會に對する觀點も教えられた。

モンタルジ等の自由な、めぐまれた雰圍氣とは逆に、フランスの學生管理の嚴しさを味わった學生もいた。ローヌ河畔にあるバンドーム中學校で學んだ盛成という勤工儉學生は、「校長と監學は、中國の學生をフランスの學生とまったく同等に視て、管理はいたつてきびしく、自由に出入もできなかった。フランスの學生はたしかに自治能力が乏しく、……フランスの中學は、もし監學がいなければ、學生は造反するであらう」と特筆している。そのほか、中國とフランスとの教育制度の大きな相違、とりわけ「自由の國」フランスにおけるミリタリー教育に對する違和感など、とまどいの材料にはことかかなかった。しかし、概していえば、學校で學べることは、勤工儉學生にとって、幸福な期間といえ、したがって、そこではあまり深刻な問題はおこらなかったのである。

その期間はつかの間であつた。大部分の學生は、三ヶ月から半年もたつと、たずさえてきたお金を使いはたし、ことばも技術も十分でないままに、學校を後にして働らきに出なければならなかった。餘程の技術をもっていないかぎり、正規工として雇われることはまずなく、運よく働らき口を見つけても、だいたいは臨時工(*homme de peine*)であつた。それすらないときは、建築現場での雑役、市場での掃除、運搬、驛や波止場での荷役作業などの雑工(*馬老五 manouvre*)、さらにはごみ集め、ジャガイモの皮むき、靴みがき、造花づくりなど、ありとあらゆる雑労働で、露命をつないでいかなければならなかった。

バンドーム中學にいた盛成も、金を使いはたしてパリに出たが、技術はいらず力さえあればよい仕事にしかつかなかった。木工工場の雑工がその職であつた。

木を運び、木を支え、木をかつぐのに、技術はいらない。頑丈な肩さえあればよい。りっぱなおつむをすりへらすこともない。一日目は六時間やってかえつてくると、ベッドの上にひっくりかえつて、ごはんも食べに行きたくないし、大小便もたつてしにいくのが億劫だ。一刻でもじっとしているのが一番だ。……翌朝五時半、あの無情な目ざましがリンリン鳴つてたたきおこす。「起きろ。服を着ろ。工場へ行け」といつているみたいだ。

ぼくは思いをめぐらし、行くのがよいか行かないのがよいか考えた。まずテント、次に地下藏、そして生活費のことを思った。えいとばかり起き上る。

冷水、パン、ココア、たて續けに數口でかきこむ。北風よ吹け。ぼくは勸えない。

冷めたい作業服を着ろ。

職長がくるぞ、早くしろ。

經理がくるぞ、早くしろ。

工場主がくるぞ、早くしろ。⁽²⁸⁾

テントや地下藏というのは、職にあぶれた勤工儉學生が、華僑協社の地下藏や前庭のテントに收容され、雨露をしのいでいたことを指している。要するに、食うにこまって、中佛教育會の屈辱的な世話になることをいつている。他人の世話になるくらいなら、どんなにつらい仕事でも、自分の力で食べていく方がよほどよいというわけである。そして、その意地を支えたのは、「一日餘計に仕事をやれば、それだけ餘計に勉強もできる」という勵みだけであつた。多くの勤工儉學生は、盛成と同じように、學費をかせぐために、辛い肉體勞働にたえている状態であつた。

もちろん、うまく大工場に採用される者もいたが、大抵は見習工（學徒）という名の雜工にすぎず、フランス人普通勞働者の半分にみたない賃金で、重勞働に従事していた。多くの事例をあげる餘裕はないので、ここではラロシエルの化學工場と、サンシャモンの鐵鋼工場についてふれておく。

ラロシエルは、ビスケー灣に臨むフランス東部の工業地帯で、造船、化學工業などがさかんであつた。湖南省出身の徐特立が一九二〇年はじめにこの工場を參觀にきた時、勤工儉學生五十三人が「苦工（臨時工）」として働らいていた。かれらは長い者で七ヶ月、短かい者で四ヶ月、すでにここにおり、賃金は、一日最高二十一フランで、少ない者でも十フランになつた。

これは他に比べると破格によい賃金といえる。しかし、「かれらは化學工場で働いているとはいっても、學問、技術とは無關係で、やっていることは、無味の苦工にすぎない」。

職種は次のようであつた。硫酸鹽をやく仕事、六人、八時間労働、賃金十四フラン。磷酸鹽をやく仕事、六人、八時間十一フラン。ボイラー係、二人、十二時間二十一フラン。亞酸管理の仕事、二人、十二時間十八フラン。残り三十數人は、だいたひ工場内の運搬といった雑工で、八時間十フラン。徐特立は、長時間のしかも骨のおれる仕事を、かれらが七ヶ月も續けられたのは、「遠大なる希望」があるからだと言明している。そのことば通り、かれらは、餘暇にはフランス語の勉學にはげみ、質素な生活を送って學費をたくわえることに専心していた。働らきはじめてときには、疲勞困憊してしまつて勉強どころではなかつたが、いまではもう慣れて、一日三時間位は勉強できるようになつた。そこでかれらは、一月三十フランずつ出しあつて、フランス語の教師をやとい、「魯濱孫^{ロビンソン}の景況」よろしく、自分たちで黑板や椅子を作つて、毎日會話の勉強をした。住いは、一人一日〇・五フランで工場の破屋を借り、机、ベッドなどはやはり自作であつた。食事は、一日二フランずつ出しあい、仲間のうち二人が日給十フランで食事係になつた。作業服も、三十フランはしたが、大事に着て二ヶ月もたせたという。このように質素な生活であつたから、一月の生活費は百フランを上回ることがなく、最高で二千フラン、平均でも五、六百フランの貯えができ、將來の學費にしようとしていた。この工場についていえば、李煜瀛のとなえた「一年工作、一年讀書」も決して不可能なことではないようであるが、要するに學費のための労働であつた。

學費のためだけではなく、労働の中で技術を修得できた幸運な例も、ごく少數ではあるが、なかつたわけではない。サンシヤモンの鐵鋼工場で働らいた王若飛などは、その例になるであらう。後にフランスにおける共產主義運動の指導者となつた王若飛は、その勤工儉學生活を詳細に日記に書きのこしている。

一九二〇年四月十四日、サンシヤモンの鐵鋼工場から二十五人の見習工募集の知らせをうけた中佛教育會は、即刻、王若飛らに赴くよう命じた。十六日、サンシヤモンの驛頭におりたつた王は、「見わたすかぎり、黃塵が地に滿ち、黑煙が四方に起

り、天色は愁暗、河水は汚濁」した街の風景と、ボロボロの服を着た労働者の群れに不快を覚えるが、すぐに「労働の精神が戦勝」して、『粗野』な労働者こそ、人類の正當な生活をおくっている人で、文明の製造者である」と、思いなおした。ほかの勤工儉學生は、鑄型工がいかに大變な仕事を聞かされ、やすり工に希望をかえたが、王若飛ら六人だけは敢えて困難にこだわった。二十日、午前五時には支度をおえ、六時半にはじめて工場にでたとき、職工長は六人をそれぞれ熟練労働者の見習に配分した。王のついた労働者は、「李鴻章が參觀にきたのも見ている」この道五十年のベテランであった。

口で説明すれば簡単な鑄型作業も、實際にやるとなると容易ではなかった。「型作りの軟硬は、關係が大きく、もしゆるいと木型をとりだしたあと、必ずつぶれてしまい、もしきついと鐵の中に含まれている氣體が發散できず、爆發してしまう」⁽³⁰⁾。鑄型作りばかりではない。熔鐵も、まずその熱氣にたえることから覚えなければならず、鑄型に流しこむコツも容易なことでは體得できなかった。最初、見習いからはじまった作業も、時間がたつにつれて、自分で實際にやらなければならぬ。うまくいった時の喜びと、失敗したときの落膽を、王は克明に記している。同時に、劣惡な労働環境も苦痛のたねであった。

四月二十九日 連日大變熱く、工場の中は特に乾燥し、どこもかも泥砂。大風が吹きぬけると、砂がまいあがり、顔について汗でかたまってしまふ。ぬぐいでもしようものなら、顔つきはますます奇妙きてれつ。鼻には細かな砂がつまって呼吸も困難になる。時々天井を向いて息をはいては生きかえる⁽³¹⁾。

とはいえ、鑄型の技術をマスターすることに情熱をもやす王は、一日労働八時間、勉強五時間の日課を定め、「一時間の勉強でも、他の人の三、四時間に匹敵」する意氣込みで、勉強にも勵んだ。この王若飛の日記にみられる勤工儉學生生活は、おそらくとも積極的に努力し、しかも幸運にめぐまれた例であつたであろうが、何長工も、ルノー自動車工場で、四ヶ月間働らいたとき、仕上げ工、旋盤工、セーバー工を次々にマスターして、技術を身につけていった情景をえがいている⁽³²⁾。

このような一部の成功例をもって、多くの人々は、勤工儉學の精神を手ばなしで絶賛した。ラロシェルの化學工場を見學した徐特立は、勤工儉學が、從來の中國知識人階級の弊害、すなわち第一に勞働に慣れず高等遊民化し、第二に面子ばかり重んじて實際の役に立たず、第三にまったく何の大義もたず學問し、第四に大家族が一、二人の働らきにたよって徒食し、第五に身分にしばられて不自由である、といった弊害を、ことごとく打破するものであると、高く評價した。また、『留法勤工儉學的歴史』の著者も、「學生一たび降りて工人となり、貴人一旦にして賤役を執り、視ること平常のごとし。その精神、何如となすや。勤工儉學の價值、すなわちここに一斑を見るべし」⁽³⁴⁾と、最高級の賛辭を表わしている。

とりわけ得意満面であつたのは、李煜瀛である。一九二〇年二月、かれは初期の成功例を以て、大いに自慢する文章を中國國內で發表した。一年前に勤工儉學運動を提唱したときには、それが實行可能であることは確信していたが、古人および近人の少數の例を根據にしていただけであつたので、説得力に乏しく、理想論といわれても仕方がない面があつた。ところが、「現在に至つて、すでに二百人以上の勤工儉學生が數十の工場に分布している。多數人の試験がすでに事實になつたといえる。とりわけ樂觀できるのは、勤工儉學という事が實行可能なばかりでなく、成績の優秀さは、最初に期待した以上であることだ」⁽³⁵⁾。そして、勤工儉學をさらに發展させるのに望ましい人材として、身體強健、意志堅固、フランス語の初歩的知識、工業技術の初歩的修得、就職までの金銭的餘裕という五つの條件をそなえた人物の來佛を要請したのである。

李煜瀛が豫想以上の大成功と喜んだのはよいが、盛成のような例がむしろ多數を占めていたという事實は決して忘れてはならない。しかも、その成功として、李煜瀛の努力によるのではなく、劣惡な條件を克服して懸命に働らいた勤工儉學生一人一人の奮闘の結果でこそあつた。まして、成功した例についてみても、かれの當初に意圖していた方向、すなわち現在の社會狀況を變革することなしに、ただちに肉體勞働と頭腦勞働を止揚した勞働のあり方を實現する方向に發展したものでは決してなかつた。勤工儉學の理想をまともに追求し、自らの肉體をはってまじめに勞働すればするほど、勤工儉學生たちはかえつて、李煜瀛の空想性をますますはつきりと認識するに至つた。議論の段階ではバラ色にえがくことのできた勤工儉學の理想も、資本

主義社會の勞働現場における實踐の中で、容赦なくその空想性を暴露された。そこでは、現實の社會を變革するという重要な觀點から、勤工儉學の理念が検討しなおされ、より現實的な意味内容が賦與されなければならなかった。

サンシャモンの鐵鋼工場で働らいていた王若飛は、李煜瀛の舉げた五つの條件を完全にそなえ、おそらくもつとも理想的な勤工儉學生であつたといえるであろう。情熱、技術の點でかれに不満足な個所はみいだせない。境遇の點でもめぐまれて、勞働と技術修得を一致させることのできる職場に就職したのであるから、李煜瀛からみても非のうちどころのない勤工儉學生であつた。にもかかわらず、かれがこの勤工儉學生活でえた勞働に對する認識は、李煜瀛からみて、決して優等生の答案ではなかった。かれが日記に記している勞働觀は、あきらかに蔡元培や李煜瀛のそれとは袂を分つていたのである。

勞働は、自己の人類に對して盡すべき義務であり、勞働は良心にもとづく平和な生活であり、勞働は愉快な事業であり、勞働に對して苦痛の念を生ずるのは、恥ずべきことである、というのはぼくも知らないわけではない。しかし、現在のこのような勞働は、完全に他人のためにしてやって、勞働力で金をかせぐもので、積極的、自主的な勞働ではない。もし、満足しているのであれば、現在の勞働運動は存在するはずがない。⁽³⁶⁾

蔡元培の唱えた「勞工神聖」というスローガンは、勞働を蔑視してきた中國知識人の惡弊を批判するかぎりでは、きわめて有効であつたかもしれない。王若飛もおそらく、このスローガンに觸發されて勤工儉學運動に参加した一人であつただろう。だが、このような勞働一般に對する賛美は、勞働を経験したことのない知識人には説得力をもつたものの、いったん「降りて工人」となった知識人は、それが現代社會における勞働の意味をまったく知らない空疎な美言にすぎないことを、早晩見ぬかずにはおかなかった。現代の資本主義社會においては、勞働力は商品でしかなく、抽象的勞働一般は存在しない。好むと好まざるとにかかわらず、勞働者は商品としての勞働力を賣る存在でしかない。このような體制のもとで、勞働が商品交換以外の

形態で存在しうると考えるのは、まったくナンセンスである。したがって、王若飛は、勤工儉學による労働といえども、決してこの法則と無關係に存在しうるはずがないと考え、空想的な勤工儉學の理念に大幅な修正を加えざるをえなくなった。「ぼくは現在の仕事に對して、以下の四つの條件を抱いてやることにする。(一)労働の習慣を養成すること。(二)品性をみがき、身體をきたえること。(三)勉學の方法^{てだて}を達すること。(四)實地にフランス労働界の状況を考察すること」⁽³⁷⁾。要するに、現在の社會においても勤工儉學になんらかの現實的な價值があるとすれば、その價值は、労働者としての品性をみがき、商品交換の結果えた金で勉學を續け、資本主義社會における労働の意味を正確に分析できるようになるところにあるといふのである。このような王若飛の勤工儉學觀が、もはや提唱者たちのそれとまったく次元を異にすることは、多言を要しないであらう。

二、二八 闘争

フランスでの勤工儉學生活が、まず順調であつたといえるのは、一九二〇年前半までのことである。二〇年も六月をすぎると、全般的に中佛教育會と勤工儉學生との關係は惡化しはじめた。すでに明白になりつつあつた兩者の世界觀の隔りを考えれば、早晚、分裂がおこることは必至であつたが、フランス社會の戦後不況化における物價騰貴が勤工儉學生の窮乏化をまねき、しかも杜撰な體質の中佛教育會が、十分な對策もないままにその責任を放棄してしまつたことが、惡化の進行を速めることになつた。その結果、勤工儉學生は中佛教育會に見切りをつけ、「勉學權、労働權、生存權」のスローガンを掲げて、一九二一年二月二十八日、パリの中國公使館を包圍するに至つた。

勤工儉學生の窮乏化をもたらした直接的な原因は、フランス社會の戦後不況にあつた。「あるいは一廠全停し、あるいは一部分を停し、あるいは一週に一、二日を停す。往往にして一廠中、同時に工人を辭退せしむること二、三千人に至るものあり」⁽³⁸⁾と述べられる如く、操業短縮、操業停止そして大量解雇の嵐がフランス社會にふきまゝくつた。急進的な労働總同盟(CGT)は、一九二〇年のメーデーを境いに、鐵道労働者の波狀ストを中心とするゼネストに突入したが、右派勢力のミルラン内閣は、こ

の勞働攻勢に徹底的な彈壓を加え、二萬二千人にのぼる解雇を斷行したといわれる。このように驟然たるフランスの社會狀況は、ことばも自由でなく技術もすぐれているとはいえない勤工儉學生に、まさきに深刻な影響をおよぼさずにはおかなかった。

そのうえ、一九二〇年にはいつてから、千二百名にのぼる新しい勤工儉學生が殺到したが、その中には國內での預備をまったくつんでいない學生が相當數ふくまれていたため、一九二〇年末に千六百名に達した勤工儉學生の質は、初期に比べて相對的に低下していたことも否めない。クリーゲルがフランス外交文書 (Archives des Affaires étrangères) を利用して報告しているところによると、勤工儉學生二千名 (クリーゲルのあげる概數) の中、就職を希望した者は千六百名いたが、實際に就職できたのは五百名 (三十一パーセント) にすぎなかった⁽⁴⁰⁾ という。この數字は、おそらく一九二〇年一年間を推算した結果であろうから、二〇年末にはその率はさらに低下したと推量できる。勤工儉學生自身の實感的數字では、結局「十人に八人までは、就職を希望しながらできない⁽⁴¹⁾」という状態であった。

就職率の極端な低下とともに、戦後のインフレが、勤工儉學生のわずかな所持金の價值をひきさげ、窮乏化に拍車をかけた。中國の國費留學生が、物價の騰貴を理由に學費増額を要求した書簡⁽⁴²⁾では、戦前に比して一九二〇年の物價は、家賃、食費、被服費が四倍、學費が二倍強、書籍費が二・三倍で、平均でもやはり四倍に達すると報告している。もともと、目減りしたにしても、所持金のある者はまだ幸いであった。初期の勤工儉學生は、旅費をさしひいても、なお二百元 (約千五百フラン) 位は手元に餘している者が多かったが、一九二〇年後半に來佛した者は、百元の旅費をようやく工面してきたものがほとんどで、フランスにたどりついたときには財布は底をついているのが普通であった。そのため、萬一の僥倖をえて就職できた者でも、給料がはいるまでの最初の一ヶ月間は、中佛教育會から借金しなければ食いつないでいけない有様で、その金が到着するまで、一日分の食物を三日に分けて食べた勤工儉學生もいれば、雨具を買えず、びしょ濡れで働いたものもいた。

まして、就職できなかった學生の慘狀は、推して知るべし。見知らぬ國でたよるあてもない勤工儉學生は、職もなく財布も底をつくと、おのずとパリに流れつてきた。中佛教育會は、最初、華僑協社の應接室をこれらの學生に開放したが、狭い部

屋に二、三十人をつめこんでもなお足りず、後には前庭にテントをはり、さらに地下藏をあけて收容した。寝がえりさえうてない窮屈なテントには、榮養失調のどす黒い顔をした學生があふれ、雨がふるとたちまち泥水が流れこんだ。食事をする場所などももちろんなく、學生は前庭で、洗面器をささげもって、立ったまま食べた。食べるものは、いちばん安い豆かすとジャガイモで、石油すら買えないから、なま煮えのまま食べることが多く、病死した學生を解剖してみると、「胃の中はまるで鐵のかたまりのような、まるいままのジャガイモだらけであつた」⁽⁴³⁾。李璜が中佛教育會の劉厚から聞いた話として傳えているところでは、一九二一年までの二年間に、事故死五人、病死者六十一人にのぼつた⁽⁴⁴⁾。さらに盛成は、「勤工儉學生來佛後の死亡人數——きのこを食べて死んだもの、生煮のジャガイモを食べて死んだもの、失蹤して死んだもの、肺病で死んだもの、狂い死にしたもの——二百の上にあり」⁽⁴⁵⁾という、驚くべき數字を書きのこしている。

このような勤工儉學生の窮乏化に對して、中佛教育會は、ほとんどなす術をもたなかつた。恒常的な財政基盤がなく、時々個人的な寄付金にたよつていた中佛教育會にとつて、一九二〇年後半の事態は、餘りに過重な財政負擔をかけることになつた。それを如實にものがたるのは、中佛教育會の經費と、勤工儉學生への貸付の急増である。一九二〇年十一月、中佛教育會は職員交代を行ない、會計係に齊榮卿、覓工係に李光漢（廣安）、覓學係に曾仲鳴を任じたが、その前後の財政負擔の激變は顯著である。一九二〇年十月以前の十五ヶ月間に、經費は四萬八千フラン、貸付は四十六萬フランであつたものが、十一月以後二一年一月までのわずか三ヶ月間に、經費は四萬フラン、貸付は三十二萬フランにのぼつた⁽⁴⁶⁾。月平均でいえば、經費は四倍強、貸付は三倍強に増加したわけで、何らかの手をうたなければ、中佛教育會の財政が破綻をきたすことは、火をみるより明らかであつた。

したがつて、一九二一年一月十六日に至り、中佛教育會が勤工儉學生への經濟援助打切りを通告したこと自體は、この財政狀態からみて當然の處置であつたといえる。問題は、そこに至るまでに、中佛教育會が必要な措置をとらず、あまつさえ、勤工儉學生の疑惑と不滿をまねいた無責任體制を放置しておいたところにある。李煜瀛のフランス人祕書がいみじくもいったよ

うに、「人はよいが、残念なことに何をやっても尻切とんぼ」⁽⁴⁷⁾は、中佛教育會の提唱者全體にあてはまることであつた。一九二〇年にはいると、李煜瀛、吳敬恆はあいついで歸國してしまい、もつとも困難な時期には、提唱者はだれ一人フランスにとどまっていないう有様であつた。

獨斷で事務の裁量を任された劉厚、向廸璜などの職員は、「仕事もできない」くせに、「官僚風をふか」せ、勤工儉學生の窮狀を無視した非情な態度が目にあまつた。學生たちがかれら二人に「劉督軍」、「向省長」と渾名をつけたのはその傲慢な態度に對する皮肉であつた。學生たちの不滿をまねいた問題の一つに「換工」がある。かれらは、學生の體力など一切かわりなしに、どんなに激しい肉體勞働であらうと、就職口があると有無をいわさずおしこんだ。體力の弱い學生は、荷役などについて數日もすると音をあげてしまい、「換工」をねがいでたが、劉、向は「仕事をする意欲がないからだ」と、一切變更を認めず、もし命にそむいて職場を離れば、今後就職の世話をしなと恫喝した。このため、負傷者、病人があとをたたないことになつた。劉、向に對する不滿は、かれらのあまりに強すぎる同郷意識からも生じた。華僑協社のテントにあふれた學生が、血まなこで就職口を探していたある時、八人の募集に對して數十人が應募したが、四川出身の學生は四人が四人とも合格したという話が、⁽⁴⁸⁾痛恨をこめて記録されている。

しかし、勤工儉學生のもつとも大きな怒りをまねいたのは、中佛教育會職員による補助金の横領であつた。劉、向の時代から、中佛教育會の會計には、不明朗な部分が多く、勤工儉學生はたびたび決算報告を要求したが、職員側は頑として應ぜず、疑惑をつのらせていた。例えば、一九二〇年四月十七日の『旅歐周刊』に、湖南省政府から十餘萬フランの補助金がおくられたという記事がでたにもかかわらず、中佛教育會がこの補助金を支給したのは、一年もあとの一九二一年になってからであつた。また、北京僑工局が無料で配布したフランス語會話の教科書を、中佛教育會が購入したものとして、豫算四千二百フランを計上した事件など、⁽⁴⁹⁾枚舉にいとまがない。

これらの多くは、勤工儉學生の追求にもかかわらず、證據がないままに有耶無耶の中に葬りさられ、杜撰な經理の體質は、

まったく改められなかった。その結果、齊榮卿、李光漢などが職員になると、横領は日常茶飯の事となった。特に李光漢は、一九二一年七月南通勸學所所長の王己劭がおくってきた一萬元の義捐金を着服したのを手はじめに、國內との通信が思うにまかせぬ勤工儉學生の盲點について惡行のかぎりをつくした。その中でも、もっとも惡辣な事件は、北京政府からの補助金の横領であつた。

一九二一年末、北京政府は勤工儉學生の窮狀を救うため、十萬元の補助を決定した。從來、中佛教育會だけが勤工儉學生の實數を把握していたため、實數を水まじした數字で補助金を分配されても、學生側は容易にその水まじ分を見破ることができなかった経験から、學生たちは「留佛勤工儉學生總會」(書記長は任卓宣)を組織し、各地の勤工儉學生の實態を調査して有資格者八百四十九名をリストアップした。二年五月、補助金が到着したとき、總會は中佛教育會と分配方法を協議し、十萬元、約七十三萬フランの中、十萬フランを女子學生三十數人の學費、一萬フランを總會の基金にさしひき、残り六十二萬フランを男子學生八百四十九人に七百三十フランずつ支給し、端數二百三十フランは總會の基金に加えることを決定した。かくて、李光漢の横領の餘地はまずないまでに準備はできていたのであるが、つまみ食いが習性となり、そのうえマルク買いや骨董品賣買などの投機で、すでに補助金に穴をあけていた李光漢は、朝三暮四の猿つかいよろしく、男子學生に六百フランずつしか支給しないで、残り百三十フランを着服したうえに、總會の基金一萬フラン餘りも懷にいれてしまった。

とくに勤工儉學生が激怒したのは、不慮の死をとげた學生のとり分までも横領したことである。残された學友がその一部を埋葬費に使ってやりたいと申し出たのに對し、李光漢は逆に「死人を埋葬するなど頑冥だ」とののしり、なんとしても支給しようとはしなかった。總會の李光漢糾彈の書簡は、滿腔の怒りをこめて訴えた。「夫れ萬里に勤工し、窮愁して以て死す。天涯に淪落し、同類與に悲しむ。骨を荒郊に暴すこと、情として何ぞよく忍ばん。これをしも、これを頑固という。然らばすなわち、必ず李光漢の如く、別に肺腑を具え、同學の早死を祝り、遺款の承襲をこいねがえば、乃わち頑固にあらざるか⁽⁵⁾」。

國內からの送金を一手に掌握していた李光漢は、こうして學生側の事前の準備にもかかわらず、七十三萬フランの中、十二

萬フラン以上をまんまと横領した。いかに中佛教育會の内部事情に暗い學生といえども、これほど單純な計算でだまされるはずはなかった。この事件をてがかりに、總會は李光漢の數多の犯罪行爲を次次に暴露し、會計の公開と横領金の返済をせまった。厚顏無恥な李光漢は追いつめられると、一轉して反撃にでた。配下のゴロツキ陳珍聚を使喚して、ピストルで武裝した無賴漢に總會の事務所を襲撃させ、器物の破損、文書の焼却をほしきままにしたうえ、印刷機などを掠奪させたのである。

總會は、この李光漢事件を總括して、「その職員は、ただ、書記一人と二、三の雇用人がいるだけで、所謂評議部もないばかりか、所謂理事會もなく、まして所謂委員會もない。したがって、李光漢一人が結局すべてを專擅し、すべてを包辦できることになり、中佛教育會はついにかれの金看板、狐皮外套に變じてしまった⁽⁵²⁾」と述べ、中佛教育會の組織のあり方自體にその原因を求めた。そこで、總會は中佛教育會に對し、「包辦制」を「委員制」に改め、決算報告と財政公開を實行して、補助金分配の權限が一人に集中することを避けるよう要求した。

いずれにしても、勤工儉學生がもつとも苦しい立場においていた時期に、中佛教育會の職員が、傲慢な態度で、救済措置をおこたるところか、生命の綱まで食いあらず不祥事件が續發したのは、一にかかつて提唱者たちの無責任さに原因があった。ところが、提唱者たちは、この事態に眼をつぶり、勤工儉學生の不滿の聲に耳をかそうとしなかった。一九二〇年六月、視察と稱して來佛した吳敬恆は、職員たちが、「換工」をねがいでた勤工儉學生の手紙を材料に、「學生たちは勤工どころか儉學もせず、むやみに騒ぐばかりだ」と話すのを鵜呑みにし、職員に不滿をもらす學生をしかりつけたうえに、「勤工儉學生は、いいのも悪いのもごちやまぜだ」などと吹聴してまわった⁽⁵³⁾。吳敬恆を瞞着して後楯をえた職員は、これ以後、なにはばかりことなく勤工儉學生を攻撃し、横領をほしきままにできるようになった。また、この年十月には、蔡元培、李煜瀛の特命をうけて、高魯が來佛したが、難事をおそれて中佛教育會に手をださず、結局、問題の人物李光漢が職員に選ばれる一幕もあった。これら一連の事態の總仕上げが、一九二一年一月、蔡元培によってなされた處置であつた。一九二〇年十一月、歐米の教育狀況視察の旅にでた蔡元培は、暮れもおしつまつた二十七日にマルセイユに到着した⁽⁵⁴⁾。冬を迎え、飢えと寒さにおののく勤工

儉學生は、救世主の到來と、かれの手腕に期待を寄せた。しかし、翌年一月二日バリ入りした蔡は、吳敬恆と同じく、中佛教育會の職員から一方的な事情聴取をただけで、早くも勤工儉學運動の中止を決定し、北京の教育部に次のような電報をうてしまった。

北京教育部總長鈞鑒。勤工儉學生の佛國に來たる者は、多く所訂の條件に合わず、携款も太だ少なし。また、勤工の志なく、かつ工もまた找し難し。教育會は、かれらの生活を維持せんと、經費を挪借するも、爲數はなはだ鉅にして、萬、繼續しがたく、現にすでに絶糧せり。擬して請うらくは、各省に籌畫し、湘、魯、粵各省の成例に按照して、本省地方に在りて從速に設法し、匯銀して接濟せしめられんことを。……並びに立即に各省の勤工儉學生遣送を阻止されんことを祈る。否らざれば、萬、辦法なし。

廖世功、蔡元培、高魯⁽⁵⁵⁾

この電報の趣旨は、もちろん後半の、各省からの救済金送付と派遣の停止を依頼するところにあつた。だが、國內ではむしろ前半に述べられた事柄に人々は注目した。この電報以前にも、中佛教育會は國內にたびたび打電し、「在佛の儉學生は、ただに佛語に毫も根底なきのみならず、且つ少數人の規則を守らざるあり、以て佛人のこれを歓迎せざるところとなるを致す」として、勤工儉學生の窮乏化をすべてその資質の劣悪さに歸する認識をひろめていた。そこに、北京大學校長蔡元培の名で、「多く所訂の條件に合わず」、「勤工の志なく」などのことが發せられるとき、どのような反響があるかは、當然豫想できたはずである。にもかかわらず、蔡元培は中佛教育會の財政負擔を軽減することにのみ眼をうばわれて、あえて勤工儉學生を非難することばをはいってしまった。本來、「國內での預備十年は、佛國で一年労働者になるにしかず」などと調子のいいことを言つて、「所訂の條件に合わざる」勤工儉學生を大量におくりこんだのは、中佛教育會であつた。また、大部分の勤工儉學生

は、決して「勤工の志がな」かったわけではなく、一つの就職口に何十人も殺到しながら、職員の恣意的な選別に泣いていたのである。これらの事情から考えれば、前半のことは、中佛教育會の責任者が軽々しく口にすべきことではなかったといえる。

案の上、一九二一年一月二十一日、教育部がこの電報の趣旨を各省の教育機關に通電すると、かえってきた反響は、救済措置などではなく、勤工儉學生の強制送還という強硬な主張であつた。江蘇教育會等七團體の教育部宛電報は、その最たるものである。「勤工儉學生は、程度等しからざる以上、辦法も宜しく各おの異なるべきに似たり。……貧窮の子弟にして、工業知識なく且つまたフランス語に通ぜざる者は、國交を篤うせんがために、速やかに歸國せしめられんことを請う」。フランス政府の感情を損うことをおそれ、主に所持金の有無によつて殘留と送還をよりわけるとも安易な方法を主張するこの電報は、さらにご丁寧にも、「かかる學生近き將來、歸國したる際、上海に鳩合するにまかさば、苦慮すべき事態起こるやも知れず、各自本籍地に送還せしめられんことを、併せ請う⁽⁹⁶⁾」とわめきたてている。本來、貧窮の子弟に技術と學問をさずける最善の方法として、蔡元培らが天より高くもちあげた勤工儉學運動は、蔡元培の輕率な電報がなげかけた波紋の中で、すでに金錢の有無によつて學生の資格を辨別するところまでいやしめられたばかりか、金錢のない學生をゴロツキ扱いするまでに至つたのである。

勤工儉學生を輦⁽⁹⁷⁾棧敷においたまま、蔡元培は、意圖に反してかれらをますます苦しい立場においこむ結果をまねいてしまつた。そのうえで、蔡元培は一月十二日と十六日の二度にわたり、勤工儉學生全員に「通告」を發し、經濟援助打切りを宣言した。

十二日の「通告 一」では、學生事務部と勤工儉學生の雙方からの事情聴取をした結果、現在の混亂の原因は、學生事務部の組織不良によるものが半ば、勤工儉學生が中佛教育會、儉學會、勤工儉學會の區別を明瞭にしていなことが半ばであるとして、双方に反省を求める姿勢をだしているが、實際は「いま、すでに一切の困難を解除せんと欲すれば、先ずこの三會の性

質を辨明せざるをえず」と、もっぱら三會分離案の展開に議論を集中している。まず、成立の過程から歴史的に、三會が目的を異にする團體であることを力説し、儉學會、勤工儉學會は、中佛教育會の事業の一部にすぎず、それらの事務處理すべてを教育會におしつけること自體が誤まっていると強調した。したがって、今後中佛教育會は、本來の仕事である中佛兩國の文化交流にたちもどることにし、儉學會、勤工儉學會は、學生が自から組織、運営することが望ましいと結論を下した。

蔡元培の三會分離案は、なるほど建前としてはその通りかもしれないが、現實には留佛勤工儉學會の成立のときから、提唱者たち自身、これら三會の區別に對してきわめてルーズであつたことは、第二章に述べた。そのような自分たちのルーズさを棚にあげておいて、窮地においこまれた段階になつてから、あわてて組織の區別を嚴密にせよというのは、あまりに身勝手である。よしんば、このような過去の行きがかりに眼をつぶり、勤工儉學生の自立という將來への展望を主として考えるにしても、この通告には問題があつた。もし分離案に實利があるとすれば、それは、中佛教育會の職員から補助金分配の職權を學生自身に移讓することによつて、その腐敗を一掃し、汚職を防止できる點にあつた。しかし、實際には「通告」が發せられた後も、依然として中佛教育會の職員は、送金分配の役得を握りつづけ、ついに李光漢事件までひきおこしてしまつたのである。

汚職防止という點で、分離案はまったく實效をあげなかつたのであるが、それは、もともとこの案の本意ではなかつたからである。蔡元培が分離案をもちだした目的は、この通告の付録である「儉學會、勤工儉學會の組織方法」に、婉曲的にはあるがくりかえし説明されているように、中佛教育會の財政的負擔をいかに輕減するかということだけに向けられていた。「按ずるに、現在、勤工儉學生の工作なき者、毎月中佛教育會の維持費を受ける人、各各百五十フラン。中佛教育會は、もとより基金なく、また入款もなし。その學生に付與する維持費は、均しく他處より輾轉騰挪して來る。この種の辦法は斷じて持久しがたし」⁽⁵⁸⁾。そこで、各省の學生が團結して小團體を結成し、本省に對して經濟維持の要求をせよというのである。蔡元培は、勤工儉學生の自治組織について、その組織方法を懇切丁寧に説明したつもりであろうが、讀む側からすれば、要するに自分たちでどうにかして維持費を工面せよ、としか讀めない。したがって、「通告 一」は、過去の經緯をすべて切り捨て、空疎な建

前論から三會離案を提示したものの、實質は經濟援助打切りの前口上にすぎなかったのである。

十六日の「通告 二」は、これをうけて、「通告 一」の主眼だけを、いいわけがましくしかも誤解の餘地なく、宣言したものである。「中佛教育會は、儉學生あるいは勤工儉學生に對し、一切の經濟上の責任を脱却してただ精神上の援助を負う。學生諸君、幸いに、本會の接濟は始めありて終りなしと誤解するなかれ。すべからず知るべし、本會すでに源泉として來るの底款なければ、すなわち、この、日とともに増す應付を、なんぞよく接濟せん⁽⁵⁹⁾」。そして、この通告が發せられた日以後は、工場で首を切られても一律に維持費を支給しないこと、在學者に對しても二月以降、學費貸與を打切ること、および以後一切の貸付を行なわないこと、という三つの決定をいいわたした。

二つの通告に接した勤工儉學生は、中佛教育會の一方的な措置に抗議するため、モントルジ、ラロシエル、フォンテンヌブローなどの各地から、代表をパリに送った。しかし、教育會側は、肝心の蔡元培がすでにベルギーに赴き、補佐役たる高魯もイギリスに逃れ、李麟玉（聖章）だけしか應對にでてこない有様であつた。一月二十六日、學生代表は、華僑協社で討議したのち李麟玉に面會したが、何の權限ももない李は、「教育會はすでに二月以後、學生と經濟關係を脱離すると宣言した」と同じことばをくりかえすだけで、ついには「諸君は、公使、領事に手段を講じて維持してもらうよう請願すべきだ」と責任を轉嫁した。⁽⁶⁰⁾高潔な人格を以て知られていた蔡元培ですら、無責任な通告を發したまま、ベルギーに姿をかくしてしまつた事態をみて、學生代表は中佛教育會とのこれ以上の交渉は無意味であると判斷し、攻撃の鋒先をパリ駐在領事廖世功に轉じた。二日後の一月二十八日、學生代表は領事館で救濟策を討論し、とりあえず、公費留學生への支給額の半分に當る月四百フランを勤工儉學生に支給するよう、領事に申し入れた。⁽⁶¹⁾

しかし、廖世功は「もし、就職も、勉學もできず、生活を維持することもできないなら、暫時歸國する方がよい」と答えるだけで、學生の要求を一笑に付した。代表は、さらに新任の公使陳籙にも要求をつきつけたが、これも本國政府に辦法を交渉中の一邊倒で、あいまいな態度をとり續けた。交渉が一向進展しないうちに、少ない旅費も底をついてしまつた學生代表は、

尹寬、方敦元、張子怙、張宗文、鍾巍、汪澤楷の六人だけをパリに残し、各地にひきあげた。その六人も「襄空、洗うが如き」状態で、二月四日には、鬭争資金のカンパを各地の學友に依頼するはめになった。⁽⁶²⁾交渉が膠着状態のまま長期化するにつれて、經濟援助を打切られた勤工儉學生の窮乏化は日を追って進行し、放置しておけば、さらに多數の犠牲者が續出する危険が生まれていた。

しかも、これに追いうちをかけるように、蔡元培の電報が國內でまきおこした強硬論が、次第に強制送還をつよく要求しはじめていた。北京の教育部から、二月十七日付で公使館に送られた電報は、この國內輿論を反映して、「勤工儉學生の自給する力なき者は、遣送歸國せしめよ」⁽⁶³⁾と指示した。勤工儉學生にとって、「遣送歸國」ということは、「死刑の宣言」にも等しい意味をもっていた。

この危機的状況を打開するうえで、モンタルジの蔡和森、王若飛らの結成した「工學互助社」が果たした役割は、きわめて大きかった。モンタルジでも、學校當局が二月に至り、學費の滞納を理由に強制退學を勧告したことから、學生たちは急進化した。⁽⁶⁴⁾工學互助社は、先頭にたつて、フランス各地の勤工儉學生に、決起をよびかける印刷物を配布した。それまで、どちらかといえば、少數の代表が當局に經濟的窮狀を訴え、援助の繼續を哀願するという、陳情的運動にとどまっていたのが、工學互助社がたちあがるに至って、その様相を改めていった。初歩的な社會主義者を多く結集した工學互助社は、この運動を、單に中佛教育會の再考を求めるとか、公使館に援助を求めるとかいったレベルでとらえるのではなく、明確に、勤工儉學生の權利を確保する鬭争として位置づけた。提唱者の無責任さを糾弾しつづける一方、自分たちの力で、フランスでの生活權を維持することが、かれらの鬭争目標であった。

強制送還の聲が次第に高まってくる中で、工學互助社のメンバーは、中佛教育會及び公使館のすべての策動が、結局は貧窮の子弟から勉學權を奪い去り、留佛儉學會の當時と同じく裕福な家庭の子弟にのみ機會を與えるものであることを暴露していた。未確認情報では、學生への貸與をうちきった中佛教育會は、これにこりて、今後來佛する者には五千元の保證金を納付

させる方針であるとの噂も流れてきた。これでは、中流以下の子弟に留學の機會を與えるという、勤工儉學運動の最低限の目的すら、まったくふみにじられることになってしまう。救済の手段が講じられないばかりか、提唱者の中佛教育會自身が、勤工儉學運動を根底から破壊するお先棒をかつぐに至っては、もはや一刻の猶豫も許されない。

二月二十七日、パリのある大きなカフェーにおいて、工學互助社のヘゲモニーにより、「留佛勤工儉學生代表大會」が開催された。勤工儉學運動に對する、あらゆる非難、中傷をはねのけ、勤工儉學運動のすぐれた面を發展させるスローガンとして、「働らく權利、勉學の權利、飯を食う權利（勞働權、讀書權、麵包權）」が、満場一致で採擇された⁽⁶⁵⁾。この目的を達成するため、翌日、公使館に大衆的な請願デモをかけることも決議された。請願、陳情であることにはかわりはないにしても、明確に闘争目標を掲げ、それにむけ大衆行動をおこすという、このスタイルは、明らかに社會主義思想の洗禮を受けた人間の發想といえるであろう。蔡和森、王若飛らにとつて、それは封建勢力との闘争の第一歩と意識されていたにちがいない。

「モンタルジの町は、異常に緊張した空氣にかわり、町に住むフランス人さえ、不安を感じた⁽⁶⁶⁾」。二月二十八日モンタルジにフランス各地から結集した學生たちは、蔡和森、王若飛そして向警予を先頭に、パリの中國公使館へ向け行進を開始した。この朝、パリ警察署に、匿名の手紙がまいこんだ。書面には、「留佛中國學生は本國の使署に對して、まさにこの項の舉動あらんとす。請うらくは、警長が干渉を加えることなからんことを⁽⁶⁷⁾」と記されていた。本當に學生側が、干渉をうけないよう事前に通知したのか、それとも公使館側が學生の動きを察知し、學生をよそおってパリ警察に密告したのか、判斷はつかない。いずれにしても、事はただちにフランス外務省に報告され、そこから中國公使館にも電話で通知された。學生の隊列、三、四百人が公使館に到着した頃には、すでに公使館は、騎馬警官までくりだしたフランスの警官隊によつて、嚴重に警備されていた。この警備陣を前にして隊列を組んで公使館に突入することを斷念し、學生たちは、女性一名（向警予）を含む十一人の代表を選び、公使陳録に面會を求めた。面會の間、他の學生たちは付近の公園で待機した。

代表十一人は、陳録に對して「いずれにしても、必らず勤工儉學の目的を達成しなければならない。政府に、四年を期限と

して、一月四百フラン支給するよう請求する」と斷固主張した。これに對して陳籙は、「もしできることなら、よろこんでやる。しかし、政府に轉達して、どう解決するかをみななければならない。現在のところ、諸君に暫らく學校に入ってもらい、その間、三月分の中一月分の學費を負擔しよう。(政府からの)返事をまつて、もう一度通知する」といった後は、ただ「返答の權がない」をくりかえすばかりであつた。學生代表は、毎月四百フランの補助金という要求に對して、明確な回答がえられるまでは、あくまで引退がらない決意をかためた。「われわれは、數百の學友に推擧されて來た。いま、學友たちは、とある公園で回答をまつている。もし、具體的な永遠の解決をえられなければ、學友たちにこたえることばがない⁽⁶⁸⁾」。交渉は平行線をたどり、結局陳籙は、學生たち全員の前で説明しなければならぬに立たされた。

午後一時にいたつて、陳籙は、高魯(留歐學生監督)と李駿(パリ駐在副領事)をひきつれ、まちくたびれた學生たちの前に姿をあらわした。陳籙は例によつて、本國政府の決定がなければ回答できないとくりかえすばかりか、本來、勤工儉學生は中佛教育會の斡旋できたのだから、中佛教育會に要求をだすべきで、公使館にくるのはおかどちがいであるとまでいいきつた。學生のだけれが、「公使たるあんたは、いったい、何をするのが仕事なんだ」とつめよつたのに對し、「どんなことでもする。

だが、君たちのことはしない」と陳籙がやりかえずに及んで、群衆のいかりは頂點に達した。とりかこんでいた學生が、かんに怒つて向つてきたので、陳籙はシルクハットをとばして逃げだした。この事態に、フランスの警官隊はただちに干涉にのりだし、騎馬警官を先頭に學生たちに襲いかかつた。⁽⁶⁹⁾學生たちは、スクラムを固く組んで、この彈壓に抵抗したが、あえなく蹴散らされてしまった。その後、公使館の壁には、「パンをくれ! ああ、ひもじい、ひもじい (Donnez-moi du pain. Oh, j'ai faim, j'ai faim...⁽⁷⁰⁾)」と、炭で書いた絶叫がのこされていたという。

一方、公使館に逃げかえつた陳籙は、應接間で待つていた代表たちに、居丈高にひきあげるよう命じた。だが、公園の學友たちが暴力で追いはらわれてしまつたいま、自分たちが學友にとつて最後の頼みの綱であると自覺し、代表たちは要求が聞きいれられるまで斷固として居すわる決意であつた。以前から學生たちとは顔なじみであつたところから、副領事の李駿は、學

生の味方であるかのような風をよそおって、この場は一時ひきさがらう、ことば巧みに説得した。「目的が達せられないからには、どうあつても、歸つて學友たちにあわせる顔がない」、代表たちの決意は固かつた。押し問答が延々數時間續き、七時がすぎると、陳籙は代表の前から姿をくらまし、ついに公使館の前に待機していた警官隊を導入し、實力排除にかかつた。

代表たちは、たちまち公使館からひきずり出され、そのまま警察に連行されていつた。あわてたのは陳籙の方で、入獄者でたとあつては、學生たちの鬭争心をますますあおりたてるにちがいないと判斷して、ただちに李駿をつかわし、警察に釋放を懇請させた。陳籙のあわてぶりに、學生の方はかえつて、これがさらなる鬭争を促がすきっかけになると考え、釋放をこばんだ。夜半まで八人がねばり、翌朝になつて殘る三人も漸やく獄舎をあとにした。⁽⁷¹⁾

勤工儉學生の最初の大衆鬭争は、こうして武力彈壓の前にあえなく敗北した。無能な官僚が帝國主義の武力を用いて、正當な要求をかかげた學生を彈壓したさまは、帝國主義の走狗、軍閥が、中國國民の正當な意志をふみにじつて武力支配している國內狀況の縮圖であつた。何長工は、「いったい誰が、フランスにきてまで反動勢力の迫害の手が、一步一步きびしくなろうなどと考へたであらうか」と糾弾しているが、まさしく二八鬭争は、勤工儉學生一人一人に、祖國の混亂狀態とかけ離れた別天地はどこにもなく、どこにいやと軍閥政治の被害をうけることを、身にしみて教えた。

一方、二八鬭争を目撃したフランス人は、異口同音に、フランス社會の秩序を破壊するものと非難した。「目的が何であれ、採用した行動は、かなり革命的色彩をおびた行動である」と、フランス政府はみなした。また、陳籙と特に親しいあるフランス議員は、狂つたように叫んだ、「あれらの中國學生は、革命をやろうとしている人間だ。早いうちに方法を考へて、對應しなければだめだ」。⁽⁷²⁾ みじめなほど、フランス人の顔色をおそれる陳籙は、學生の要求には微動だにしなかつたが、これらの意見を聞くととたんに、何らかの手をうたなければ、フランス人の機嫌をそこねることになりかねないと思ひはじめた。また、事件が新聞に報道されると、フランスの輿論もだまつてはいなかつた。とくに、輿論が攻撃したのは、ろくに救済策を講ずることなく、中國政府が強制送還の方針をうちだした點であつた。はるばるフランスにまで留學しながら、このようなかたち

で歸國させられたのでは、學生たちがフランスに悪い印象しかもたないであろうというのが、ごく素朴な一般の人々の意見であった。フランス政府も、動機はまったく異なるが、やはり「フランスの文化に、頗る影響を受ける」として、「遣送経費をまわして、學生を維持する用につかう方がよい⁽⁷⁴⁾」と公使館に忠告した。

フランスの輿論と政府の壓力により、陳籙は、三項目にわたる解決策を提示せざるをえなくなった。一、すでに入學している者には、暫時、三月分の中、一月分を補助する。二、失業者には、毎日、生活費を支給するほか、フランス工業界の各團體に極力交渉して、就職のでだてを講じる。三、歸國を志願する者には、費用を與えて歸國させる。この三條に加え、フランス政府と共同で、恒久的な對策を講じる確約も與えた⁽⁷⁵⁾。もちろん、學生たちに十分な満足をもたらす解決策ではなかったが、ともかく歸國を志願制にしたことと、生活費を支給したことで、一往、納得させることはできた。三月から、失業している學生に、毎日三フランの生活費（四月からは六フランに増加）が支給されはじめ、勤工儉學生の危機的状況は、ようやく峠をこし、學生たちは恒久的な解決策の行方に注目することとなった。

中國公使館とフランス政府との意見調整に二ヶ月餘りを費した後、五月十四日に至って、勤工儉學生救済のための「中佛委員會」が正式に發足した。中佛兩國から、閣僚クラスの人物を名譽會長に選び、顔ぶれだけからみれば、兩國が並並ならぬ熱意を以て救済に當ろうとした感がある。中國側は、袁世凱時代に交通總長、內務總長をつとめ、訪佛代表團團長としてたまたまフランスに来ていた朱啓鈴が名譽會長、陳籙が名譽副會長で、以下、王曾思（公使館一等書記官）、廖世功（パリ總領事）、李駿（パリ副領事）、鄭毓秀女士が委員に名を列ね、中佛教育會からも蔡元培、李光漢が列席した。一方、フランス側は、前總理であつたパウルヴェ（Painlevé）が名譽會長、外務省祕書長のブラディエ（Bradier）が名譽副會長となり、ベラン（Belin 文部省代表）、ピクナール（Piquenard 商工省代表）、カーン（Khan フランス・ベルギー銀行代表）、サン・ピエール（Saint Pierre 東方滙理銀行代表）、シェフェール（Schaffer フランス鑄造工業協會代表）、オーディネ（Audinet 極東商業公司組合總經理）が委員となり、中佛教育會からは、會長オラル、書記ベルナルが列席した。委員會を實質的に運営したのは、中

佛兩國の名譽副會長であつた。

形式的には、この五月十四日の第一回會議を以て、中佛委員會の發足としているが、實質的な事業はすでに三月からはじめられていた。會議では、まず二ヶ月間の收支決算が別表のように報告された。これによると、収入のすでに半ば以上は、救済金として支出されてしまっている。また、陳公使の解決案、第三條に提示された志願歸國に應じた學生は、わずか二十一名にすぎないにもかかわらず、その經費に二萬四千フラン以上を費した。一人當り、一千二百フラン弱が必要であることになり、もし二千人に支給するとすれば、二百四十萬フランにのぼる資金を用意しなければならない。國內でさかんにいわれた強制送還の聲は、この費用の膨大さが明白になるにつれて、立消えになった。ともあれ、救済の切札として仰仰しく登場した中佛委員會ではあつたが、すでに發足當初から、あとわずか二ヶ月で資金の枯渴することがはつきりしていた。フランス側の名譽副會長ブラディエは、一ヶ月に十五萬フランが消えていくことにため息をもらし、中國の各省政府が大量の補助金を送付するか解決策はないと、最初からあきらめきつた表情であつた。

中國側も、政府が歸國費用として送付してきた金で救済にのりだしてみたものの、一ヶ月餘りでほとんどその金を使いきる有様に、やはり最初から繼續の熱意はすでに失なつていた。⁽⁷⁶⁾こうして、中佛合同を銘うった救済活動も、すでに船出の段階から挫折の運命が眼にみえていたのである。

ところで、わずか數ヶ月にしろ、中佛兩國政府が勤工儉學生に對して、かかる「慈善行爲」にでた眞意は何であつたのか。まず、フランス帝國主義政府の底意は、あきらかにアメリカ帝國主義がおしすすめていた中國への文化侵略に對抗することにあつた。この意圖を知るためには、中佛委員會のフランス側名譽會長であつ

中佛委員會收支一覽（5月初まで）

収入(フラン)	
中國政府歸國費	300,000.00
朱啓鈴代表團寄付	50,000.00
フランス外務省補助	100,000.00
東方滙理銀行寄付	50,000.00
その他 寄付	56,658.28
計	556,658.28
支出(フラン)	
歸國志願者船賃	24,759.15
在學生補助	117,198.05
失業者救済費(3月~5月初)	130,000.00
醫藥費	300.00
雜費	11,477.93
計	283,735.13

たパウルヴェの言動に注目する必要がある。パウルヴェは、ゴレージユドフランセ校長、パリ大學教授などからなる大型文化使節團の團長（かれ自身の肩書は、パリ大學中國學院院長）として、一九二〇年六月二十二日に北京に到着してから、三ヶ月足ずの間、中國に滞在して關係各方面と中佛兩國の文化交流について折衝した。⁽⁷⁷⁾この使節團の出發に先立ち、總理という高い地位にあつた學者が中國を訪問することの意義を、パウルヴェは、新聞記者のインタヴィューにこたえ、次のように語った。

極東の商館において、對抗する外國語のために、というのもそれらを知っている方が有利だからであるが、フランス語は輕視されるようになるであらう。文明を防衛するためにフランスがはらつた犠牲の故に、フランスが極東から實質的に驅逐されるのを知ることが、耐えることであらうか、正義になつたことであらうか。その結果は、不正義であるばかりでなく、實際、あらゆる國の眞の利益にもまた有害となるであらう。それを防ぐために、フランス文化は、中國のもつとも優れた青年たちの間で、その地位を保持し続けなければならない。中國の將來の技師、商人、辯護士、政治家の中、相當數がわれわれにより、われわれの間で教育され続けられなければならない。⁽⁷⁸⁾

フランス帝國主義政府の立場からみれば、第一次世界大戰という「文明を防衛する」戦いで、フランスが犠牲をしいられている間に、日本帝國主義とアメリカ帝國主義が火事場泥棒的な進出をとげ、フランスを中國侵略の隊列から驅逐してしまつたという被害者意識があつた。とりわけフランスが神經をとがらしていたのは、義和團賠償金を基金として、アメリカが大大的にすすめていた清華大學留米事業であつた。フランス政府が、蔡元培、李煜瀛らの提案をうけて、北京に中佛大學を設立したのも、あきらかにこの文化侵略に追隨するためであつたとみなければならぬ。その延長線上に、前總理を團長とする大型使節團の派遣が實行されたわけである。この團の滞在中に、安直戦争が勃發し、親英米派の直隸派が勢力をえたことにより、フランスの野心はいよいよ大きくなつた。その侵略計畫の一環が、次節に述べるリヨン中佛大學の設立であるが、より手つとり

早い方法として、勤工儉學生の抱き込みが試みられたのである。フランス文化の影響を中國の青年たちに及ぼし、賣國的知識人を養成するというフランス帝國主義の野心からすれば、外務省の與えた十萬フランの補助金などものの數ではなかった。しかも、二千人という勤工儉學生の數を以てすれば、それはアメリカの清華大學留米事業に優るとも劣らぬ「成果」を期待できたのである。

一方、北京軍閥政府が救済にのりだした裏には、より直接的な打算がはたらいていた。一九二二年四月、北京の財政部は、吳鼎昌をパリに派遣した。その名目は、中佛實業銀行の改組問題について、フランス側の理事会及びパリ銀行團と折衝することである。このことであつたが、實質は、その改組計畫第六條に、「フランス政府は、中國政府が該銀行の運営を援助していることを以て、國內での外債を禁止する現行の例に拘わらず、中佛銀行が改組後に、ただちに三億フランの債券募集を行ない中國政府へ交付することを許可する」という一條を定め、大借款を實現することが目的であつた。もし、この策動が勤工儉學生に探知されれば、反對運動が起ることは必定であつたので、その救済に一役かつておいて、かれらの反對運動を豫防しようという魂膽をめぐらしていたのである。

この魂膽を最初に暴露したのは、中佛教育會の御用團體である「勤工儉學期成會」であつた。かれらの意見では、大總統徐世昌の派遣した朱啓鈴が中佛委員會の名譽會長に就任し、五萬フランの寄付をしたのは、とりもなおさず勤工儉學生の買収工作にほかならないというのである。「少數の人士が全體の名義で、いくつかの電報を國內へ打つて以來、國內の政黨ゴロどもは、喜び勇んでほしきままに鼓吹した。これはまさしく、許多の人間を網羅し、許多の青年を買収できる絶好の機會だと考えたのである」⁽⁸⁰⁾。「少數の人士」とは、中佛教育會に反對する工學互助社などの進歩的勤工儉學生をさしている。中佛教育會が期成會にこのようなキャンペーンを展開させたのは、いうまでもなく北洋政府の賣國行爲に反對するためではなかつた。財政負擔をまぬがれたい一心から、勤工儉學生に對する經濟援助をうちきつた中佛教育會ではあつたが、自からの影響力が地に落ち、フランス政府と中國公使館に勤工儉學問題のヘゲモニーを握られる事態にはがまんならなかつた。そこで、この買収問題

を誇張して、中佛教育會に反對する勤工儉學生に牽制をかけようというのが、その眞意であつた。

中佛教育會のいやがらせに對して、工學互助社を中心とする勤工儉學生は、このキャンペーンが「第三者の維持に反對する」利己主義的な觀點からなされていることを糾弾した。「朱（啓鈴）に不軌の事があれば、事實を指して攻撃すべきで、寄付金を前提として罪案をなすべきではない。寄付金を前提としているのは、學生を打倒するのを目的にしているのであつて、朱に對して非難してゐるのではない⁽⁸¹⁾」。朱啓鈴が買収するのは、なんの目的か。もしそれが政治的目的をもつのであれば、それに反對すればよい。そもそも、勤工儉學生は、祖國の發展のために勉學にきているのだから、「國家の補助金をうけ、私人の援助をうけることは、ともになんの不都合もない」。自からの都合で援助をうちきっておきながら、勤工儉學生が中佛兩國のわずかばかりの援助をうけるや否や、とたんにこれを買収費と叫び、勤工儉學生を兩國の手先きとわめきたてさせた中佛教育會のやり口は、「袁世凱が民意を製造したのと同様な、卑劣な手段」といわれても仕方ない。

しかし、いかに黨利黨略からでたキャンペーンであるとはいへ、中佛兩國の底意が明白になつた以上、勤工儉學生は甘んじてその非難をうけることはできなかった。中佛教育會とその手先きの學生たちが、口先きだけで北京軍閥政府に反對したのとは對照的に、工學互助社を中心とする先進的勤工儉學生は、實力闘争で祕密大借款を粉碎した。もちろんこの行動が、いまのところ命の綱である補助金の打切りにつながることを十分に承知の上である。一九二一年七月二十九日、工學互助社が先頭に立ち、勤工儉學生、華工、華僑など多數を結集して、第一回の借款反對大會が開催された。さらに八月十三日には、第二回大會を開き、中國側代表の一人である陳籙に、出席して釋明するよう要求した。しかし、陳籙は大衆の怒りを恐れ、王曾思を代理として行かせた。周恩來が天津の『益世報』におくつた通信では、「第二回借款拒否大會では、情勢はさらに激昂を加え、公使館の王祕書は、陳籙の代りになぐられてしまつた⁽⁸²⁾」と傳えている。

そして、いよいよ兩國政府の調印まじかという消息が傳わると、二八闘争の公使館包圍が再現した。ただし、こんどは學生だけでなく、華工も加わり、徹底的な實力闘争を貫徹した。「身體逞しく、威風堂々とした」山東出身の華工と連帶した學生

たちは、前回の經驗をいかして、まず「公使館の電話線を切斷し、外部との連絡を斷ち切ったうえで、もってきたアルコールを玄館のドアにふりかけ點火した」。狼狽した公使館員が、膽をつぶしてドアを開けるや、群衆がどつと突入し、直接談判がはじまった。學生たちは、「賣國的借款に反對する！ 陳籙は代表團からおりろ！ 北洋政府に電報をうって、首謀者の賣國奴どもをひきわたせ！」と聲だかに叫んだ。⁽⁸³⁾ 公使館焼打ちを突破口として、中佛祕密大借款反對の聲は、在佛中國人の間ばかりでなく、中國國內とりわけ南方にも、激しくもえあがった。その結果、中佛兩國は、有耶無耶の中にこの借款問題をたなあげにすることを餘儀なくされた。

これが、中佛兩國の底意に對する、勤工儉學生の鮮明このうえない應酬であるとともに、中佛教育會の卑劣な非難に對して、行動を以て示した回答でもあった。とりわけ激怒したのは、フランス文化に忠實な賣國奴的知識人の養成をたくらんだフランス帝國主義政府であつた。このように果敢に反帝反封建の闘いをすすめた學生たちが、かれらの帝國主義的野心にすぐわなかつたことはいうまでもない。「借款拒否の騒動が発生した後、フランス政府は、公使館員が毆打されたことによって、極めて不安を表し、かつ遺憾ながら本年三月中國政府の遣送歸國という主張にしたがわなかったため、餘計な事態をまねいてしまったと聲明した」。⁽⁸⁴⁾ 勤工儉學生を甘くみた自からの不明を恥ぢ、フランス政府はただちに中佛委員會の解消を決定した。九月三日には、フランス政府が一方的に、九月十五日を以て補助金を打切ると宣言したが、あまりに唐突で露骨なやり方に、公使館と北京政府の方が躊躇してしまい、結局一ヶ月延ばして十月十五日を打切りの日とした。だが、中佛兩國の陰險な彈壓は、これで終ったわけではない。

三、リヨン進軍

一九二二年という年は、勤工儉學生にとって、まさしく激動の年であつた。「多事多難の秋ではあつた。ひとつの波がおさまると、またあらたな波が起こった」と感慨をこめて語られているように、二八闘争、中佛祕密大借款反對闘争にひきつづき、

一九二二年の秋は、リヨン中佛大學をめぐって、勤工儉學生と中佛教育會の間に最後の「死闘」がくりひろげられた季節であった。それは同時に、五四運動前後の理想主義的雰圍氣の中で醸成された勤工儉學運動が、提唱者と勤工儉學生との分裂を通じて、帝國主義、封建軍閥と直接對峙する形態に變化、發展したことを意味する。以下では、リヨン中佛大學設立の經過及びその貴族教育に對する勤工儉學生の批判と鬭争を述べ、勤工儉學生が反帝反封建の意識を鮮明にするに至る過程を明らかにしたい。

勤工儉學運動が、よきにつけ悪しきにつけ李煜瀛の思いつきに源流があつたのに對して、リヨン中佛大學の構想は、吳敬恆のアイデアに端を發している。「現代の墨子」と渾名される吳敬恆は、もちろん勤工儉學運動の提唱者の一人でもあつたが、きわめて能率を重んじるかれの眼からみると、勤工儉學運動はあくまで、中級、下級の技術者を養成する運動にすぎず、上級知識人を育成するためにはやはり大學教育が必要であると考えていた。しかも、文明の程度が低い中國國內では、理想的な學園を建設することは、到底不可能である。そこで、混亂した國內を離れて海外に理想の大學を創設しようという構想が生まれた。では、どの國がそれに最適か。答えは、自ずとさまっている。勤工儉學運動がフランスを選んだのと同じ理由で、すなわちフランス文明の偉大さに對するかぎりない敬愛の感情から、やはりフランスがもっともふさわしいと判斷されたのである。

吳敬恆は、『時報』の一九一九年十二月二十三日から翌年一月六日まで九回にわたり、「海外中國大學末議」という論文を連載した。この論文は、『建設』にも上下に分けて、第一卷第六號（一九二〇年一月一日）、第二卷第一號（一九二〇年二月一日）に轉載された。海外中國大學とは、「中國の大學を暫く海外に設けること」と定義される。中國國內では、「環境と教團とが、二つともその適當なる者を缺いている」が故に、「暫時、海外の適當な處を借りて開辦し」、教團、設備、校風が整った時點で、「完全に、自國の應に設けるべき地點に遷移」しようというのが、この論文の趣旨である。そのモデルケースとして、文明の都バリに海外中國大學を設立すると想定して、その利害得失を詳細に論じていく。そこにおいては、常に現在の中國國內にある大學がひきあいに出され、これらにみられるすべての弊害が、海外中國大學では除去できる、というバラ色の展望が語

られる。

第一に、中國國內では、「社會の凶暴、懶惰、穢惡等の現象」が到る處に存在する上に、「下等遊戲の場、親朋淫博の習」がつねに學生を誘惑する。ところがパリでは、「たとえその自然に任せ、補救を加えなくとも、得るところの非凶暴、非懶惰、非穢惡の教訓が、すでにその失うところを補償するに足りて餘りある」。學生をとりまく環境がかくも隔然と異なるのである。第二に、今日の中國の大學は、「精神教育」（文科系の教育）の程度を高める能力はようやく足りているが、「物質教育」（理科系の教育）の程度は話にならない。「區區たる四五百元の月金」で海を渡ってくる外國人教習は、本國では「下材」であること、西洋留學した者ならだれでも知っている。もしパリでこれだけの金をつかつて非常勤講師を雇えば、第一級の「物質教育」を授ける先生を期待できる。この二點が積極的なメリットとされる。

一方、初めての試みであると危ぶむ者に對しては、上海の日本同文學院、香港にある英國式大學、上海の約翰大學が先例として挙げられる。同文學院は「中國の内情を詳察しよう」とするところに目的があり、若干趣きを異にするが、後の二者は「その目的は慈善的であり、他國の人民を教育するところにある」。もし、パリの中國大學がフランス人に教授できれば、わが國にも「慈善の力量」があることを示すことができる。帝國主義の文化侵略を慈善的とみなすところに、吳敬恆の政治傾向が現われていることを注意しておきたい。また、從來、英文を重視してきた中國の教育からみて、フランスの教育は不適當と考える者には、パリ中國大學では、英佛兩文を必須科目とするので、その心配はまったくなく、むしろ兩文を學ぶことによってヨーロッパ言語に對する感覺を養うことができるかと反論する。そして、この海外中國大學が、從來の留學と混同されることを恐れて、三點にわたる相違を述べた後、海外大學がもたらす附帶利益を七項目にわたって説明する。その詳細は省くが、要するに、一つの大學全體がパリの町中に移動する効果は、中國人の精神、とりわけ五四運動の精神を、廣くフランス人全體に正しく傳えられるばかりでなく、そこが窓口となって世界の最新の情報を中國に輸入することができるといのである。

續いて、吳敬恆がもっとも得意とするところの、金銭的な損得關係が微に入り細にわたって検討される。ここでは、數字が

學 校 名	教員數	職員數	學生數	一年經費 (元)	教員一人 當學生數	學生一人 當經費
北 京 大 學	149	44	1695	560,000	11	330
北 洋 大 學	20	6	441	220,000	22	500
山 西 大 學	38	17	675	90,000	18	133
南 洋 公 學	41	25	167 (3?)	156,460	9	425
唐山路礦學校	11	7	174	110,216	16	633
北京工業學校	39	18	242	126,360	6.5	522

縱横に驅使され、生々とした説明が滔滔とあふれ出て、かれの眞骨頂というべき部分である。別表は、一九一九年三月、全國專門學校校長會議の時に教育部の刊行した統計から吳敬恆が作成した三つの表を、一つにまとめたものである。當時の高等教育の實態を示す統計として興味深いものであるが、吳敬恆はこの表を證據にして、國內の高等教育機關とほぼ同じ經費で、海外中國大學を運営できると力説する。すなわち、學生一人當りの經費が最高である唐山路礦學校に準じ、學生を七百人とすれば、約四十五萬元が一年の經費となる。教員は四十名とすると、山西大學並みの教員一人當りの學生數を確保でき、國內での最高に近い四千元の年俸を支拂うとしても、十六萬元ですむ。この他、職員給料四萬元、學生船賃三萬元、學生食費七萬元、教材費等十二萬元とふめば、なお三萬元のおつりがくる。机上の空論は、どこまでもふくらみ、これに設立經費一百萬元（校舍・宿舍、五十萬元、試験工具、五十萬元）を加えれば、海外中國大學が一つできあがりというわけである。最後に、唐突の感がつよいが、廣東、廣西、雲南、四川の四省が共同で西南大學を設立する計畫のあるうわさをとりあげ、是非とも、西南大學國内部と西南大學海外部（パリ）の二つを設立するよう當事者に建言し、「金錢萬歲！ 中華民國萬歲！」を以てこの論文を結んでいる。⁽⁸⁵⁾

論文の後には、蔡元培の跋があり、「いま、吳先生の海外中國大學の議を觀るに、歳費四十餘萬金にして國內大學の諸缺點以てこれを補充するあらざるなし。その成效あに量るべけん⁽⁸⁶⁾」と絶賛している。しかし北京大學でさえも、教員の給料が缺配していた當時において、百五十萬元にも及ぶ金がどこから出てくるのか、という金錢面の空想性は、しばらく問わないにしても、「海外中國大學末議」に說かれてゐる種々の利點は、フランスをすべて善、中國をすべて惡とみなす卑屈な態度と、半植民地の中國と帝國主義のフランスを同

等視する夜郎自大があつてこそ、主張できることであつた。ともかく、これで理想のアカデミーを建設できると、吳敬恆は盲信したのであり、この盲信にしたがつて以後の行動がおこされたのであるから、われわれはリヨン中佛大學構想の發端として十分この論文に注目しておいてよい。なおかつ、論文末尾に唐突にあらわれた西南大學設立の消息こそ、吳敬恆がもっとも利用しやすい手づるとして關心を注いでいたものであることも、かれの行動を追う上で、重要な糸口となるものと、承知しておきたい。

「海外中國大學末議」では、パリに設立地を想定していたが、事態の進行は、より中國との結びつきがつよいリヨンを選擇させることになつた。リヨンの町は、絹織物の産地として、中國との商業上の關係が密接であつた。リヨンの商會からは、二度にわたつて中國へ實業視察團が派遣された實績があつた。また、リヨン大學には古くから漢學の講座が設けられ、町全體が中國には特別の關心をいだいている土地柄であつたといわれている。吳敬恆と蔡元培がパリ滞在中の李煜瀛に書簡を送り、海外中國大學の計畫を提案し、フランスでの奔走を依頼してきたとき、李煜瀛はまっさきに、この親中國的な町に白羽の矢をたてた。まず、李煜瀛が交渉したのは、リヨン大學校長ジュバン (Joubin) であつた。ジュバンは從來から、北京にフランス學院を設立すべきであるとの持論をもつていた人物で、この李煜瀛の提案に全面的に賛成し、協力を約束した。リヨン大學では、一九一九年十二月六日、評議會を開き、ジュバンがリヨン中佛大學設立のために積極的に盡力することに承認を與えた。

さらに、李煜瀛はリヨン市長エリオ (Herriot)、リヨン選出の下院議員ムーテ (Moutet) とも聯絡をとり、協力を依頼した。エリオは、リヨン市長として、中佛の實業提携に熱心であり、『創造』という書を著わして中佛親善を説いていた。ムーテは、中佛教育會の副會長であるとともに、義和團賠償金の退還によつて中佛提携の教育事業を行なうことを、もつともつよく主張した議員として知られていた。李煜瀛の財政援助の要請に對して、エリオはぬけ目なく、中國政府が生糸などの商品を擔保とすれば、數萬から十萬フランまでの援助を毎年與えると確約し、ムーテが國會で義和團賠償金退還の議決を實現するよう働きかけることも承諾した。⁽⁸⁷⁾ もちろん、これらの政治家が中佛大學の設立にかくも熱心であつたのは、前節で紹介したパンルヴ

エの見解に象徴されるのと同様の意圖からであつたことはいうまでもない。

いまひとりの協力者は、リヨン醫科大學學長レピン (Lépine) であつた。リヨン地方の公共建築物を中佛大學に貸與するために關係各方面との折衝に當つた。フランス、とりわけリヨンの積極的な受入れの熱意は、提唱者の豫想を超えるものであつたといわなければならない。吳敬恆の海外中國大學構想は、國內よりも先に、フランスで支持をえたわけである。

フランス側の全面的な同意をえた李煜瀛は、一九一九年十二月にマルセイユから歸國の途についた。一九二〇年二月十日、上海に出迎えた吳敬恆は、李煜瀛からフランスでの交渉がきわめてスムーズに運んだことを聞いた。これに力をえて、吳敬恆は李煜瀛とともに廣州に赴き、黃強ら、中佛教育會廣東支部の人々と打合わせたうえで、二月十九日と二十五日の二回、護法軍政府主席總裁兼內務部長岑春煊、總裁兼外交部長伍廷芳らに面會した。かねての思惑通り、吳敬恆は、西南大學開校費の一部を、リヨン中佛大學のために融通してくれるよう申し入れた。岑春煊は、この申し入れに基本的に同意し、總額三十萬元の補助を約束し、とりあえず三月二日に十五萬元を交付した。⁽⁸⁸⁾二月二十六日、廣州の政務會議は、「西南大學組織大綱」を可決し、汪兆銘、章士釗、蔡元培、李煜瀛、黃炎培、吳敬恆を主事に招聘したが、⁽⁸⁹⁾この人選は當然前日の會談からでたものと考えられる。最初の計畫から三分の一以下に減じたとはいへ、西南軍閥の巨頭にとりいって吳敬恆はその計畫を實施に移す財政的裏付をえたわけである。

さらに吳敬恆は廣東軍閥陳炯明とも接觸をもつたが、その内容はいまのところ知りえない。ともかく、資金のめどがついたので、フランスに滞在していた褚民誼が、開校一切の責任を負い、リヨン當局との折衝に當ることになった。リヨン當局側は、かねてから西の郊外サンティレネ (St. Irénée) 山上に打捨てられたままになっていた舊式の砲臺を、中佛大學の校舍に改装する案をもっていた。この案に沿つて、リヨン大學が陸軍省にその借用を申請した結果、年額一フランで貸與することが認可された。陸軍省からの回答をえたリヨン大學は、ただちに三月二十日、パリの中佛教育會にこの旨打電し、おりかえし翌日、褚民誼と張繼がリヨンに赴いて砲臺を視察した。サントルネ砲臺は一八四〇年に建設された古い砲臺であつたが、リヨ市内

から電車で十五分、敷地は七九八〇〇平方メートルに及び、その中に大小五つの建物が並んでいた。最大の建物は、四階建て、五、六百人を收容可能であつた。使用していたときには、二千人の兵隊が駐屯していたという、この廣大な施設に、褚民誼と張繼は十分満足した。フランス軍の無線電信をかりて、上海の李煜瀛と聯絡をとつたうえで、廣東政府の補助金十五萬元がとどき次第、ただちに改裝工事にかかることを、その場で決定した。⁹⁰

三月二十四日、中佛教育會の講堂（華僑協社内）で、フランス各地の十一校から勤工儉學生代表二十一名（熊天祉、鄧大鳴、宋紹景、王恒心など）と女學生代表二名（向警予、范新瓊）を召集して、第一次學生代表談話會が開催された。席上、就職狀況、就學狀況などが、中佛教育會職員、劉厚と向廸璜によつて報告されたが、學生たちの關心をもつともひいた話題はなんといつても、二日前に決定されたリヨン中佛大學の建設であつた。報告にたつた蕭子昇は、リヨンと中國との關係から説きおこし、一昨日、サントルネ砲臺に中佛大學建設が決定されるまでの經過を詳しく説明した。以前からうわさは耳にしていた學生代表たちではあつたが、計畫が豫想以上に速く進捗しているとの報告に、驚きと喜びを禁じえなかつた。とくに、蕭子昇がその敷地の廣大さと建物の膨大な收容人員を強調して、「全砲臺をひっくりかかして論じれば、以前にはもともと兵士二千人を住まわせることができた。もしさらに機械室等を改造して居室にすれば、よりたくさん、大體二千五百人前後を收容できるであらう」と大見得を切つたことにより、勤工儉學生代表は、勤工儉學生全員を收容できるような一大センターが建設されるものと、過大な期待を抱いてしまつた。

だが、この報告は、中佛教育會職員の勇足であつた。わずか二日前に決定した事柄であるだけに、職員たちもつい吹聴してしまつたのであろうが、吳敬恆の構想では、リヨン中佛大學は勤工儉學生とまったく別個に、學生を募集するはずであつた。西南軍閥の巨頭岑春煊が無償で、三十萬元もの大金を供與することはありえなかつた。資金提供者の意に沿つて軍閥の子弟を受入れ、また自分たちの黨派的利害を貫ぬくためにも、吳敬恆は勤工儉學生のことなどほとんど眼中になかつたのである。

四月二十三日、吳敬恆は上海をたち、リヨン中佛大學の建設狀況を視察するために、フランスに向つた。六月、パリに着い

た吳敬恆を迎えて、勤工儉學生は「耶蘇救命主の到來」とばかりに期待の眼を向けた。三月の談話會で、壯大な計畫が途についたことを中佛教育會職員から聞いた學生たちにとって、吳敬恆の到來は計畫の着實な進行を確信させるにたるものであった。だが、案に違つて吳敬恆の表情はさへなかつた。中佛教育會職員の早とちりによって、勤工儉學生がリヨン中佛大學を當然自分たちのセンターとなるものと信じていることに、大いに不快の念を示した。かれの言い分では、「中佛教育會は李石曾がやっているもので、リヨン中佛大學はわたしがやっているものだ」。「わたし吳稚暉のリヨン中佛大學は、かれ李石曾の中佛教育會とは絲毫も關係ない。きみたち勤工儉學生は中佛教育會にたずねていくべきだ。將來、リヨン中佛大學に入りたければ、申請して試験を受けなければならない」というものであった。この意を吳敬恆は一部の勤工儉學生にはもらしたものの、大部分の勤工儉學生は、なお吳敬恆を耶蘇とあがめ、中佛大學の完成を待った。この段階で、中佛教育會と吳敬恆の齟齬が、より廣く勤工儉學生の間に傳わつていれば、ただちに勤工儉學生の廣範な非難があがつていたであろうが、話は有耶無耶の中に進行してしまつたのである。

この年冬、リヨン中佛大學協會 (Association Universitaire Franco-Chinoise) が設立され、中國人會長に蔡元培、フランス人會長にレピンが就任し、祕書にはリヨン大學漢學教授クーラン (Courant) が選ばれた⁽⁹³⁾。また、開校後の通常經費についても、六月二十日北京の江西會館で開催された第二回中佛協進會の報告では、北京政府の徐世昌大總統が十萬フランを寄付し、西南大學が二十萬元、厦門大學が十五萬元をそれぞれ支出する見通しがついたとのことであつた⁽⁹⁴⁾。通常經費は、吳敬恆が「海外中國大學末議」で想定したのに近い額が調達できることになつたのである。

ところが、廣東の方では、すでに六月三日、孫文が唐繼堯らと結んで、岑春煊打倒の宣言を發表し、廣東軍政府は分裂状態におちいり、リヨン中佛大學のことなど顧みている暇がなくなつた。抑も、母體となるべき西南大學自體が、軍政府内部の政争とからんで裁判ざたとなり、六月末に至つて、設立計畫は頓挫してしまつていた⁽⁹⁵⁾。かくて、リヨン中佛大學の方も一時、準備活動を中斷のやむなきに至つた。他方、砲臺の改裝は順調に進み、一九二一年二月の報道では、「土木工人の修理は一月に

完工することになっており、したがって二月中には預備科を開いて、夏休み以後に正科がただちに始業できるように備えるべきだ⁽⁹⁶⁾」との状況であった。この預備科が實際に開かれたかどうかは知るすがないが、建物が準備萬端ととのつていたことはまちがいない。そして校長には吳敬恆、副校長には褚民誼が就任することになった。

中國國內で、リヨン中佛大學の準備工作が再開されるには、一九二一年五月、廣州で孫文が非常大總統に就任するときまで待たねばならない。このとき、吳敬恆と李煜瀛は廣州に赴いて孫文に面會して協力を依頼した。孫文の方も、軍政府政務會議でかつて討議された折にも、海外中國大學の構想には賛意を示していたので、教育部においてリヨン中佛大學の準備工作をすすめることを承認した。陳獨秀が局長をつとめる教育部内で、吳敬恆は通常經費の捻出と學生の募集という二つの仕事にとりくんだ⁽⁹⁸⁾。

通常經費の方は、廣東政府が四十二萬フラン、北京政府とフランス政府が十七萬五千フランの提供を確約したが、合計六十萬フラン足らずでは、當初の豫定四十五萬元のほぼ八分の一にすぎず、それに合わせて事業規模も縮小せざるをえなくなった。「この校の設備は、決して完全な大學ではなく、リヨン大學の補習學校にすぎない。校名は Institut Franco-Chinoise であつて、決して Université Franco-Chinoise ではない。中法大學と譯しているのは、蓋し、その名を美しくしているだけである⁽¹⁰⁰⁾」。當初の海外中國大學構想は、はかなくついえ、リヨン大學の補習學校兼宿舍にまで、程度を格下げにしたばかりでなく、學生數も當初の七百人から百五十人に規模を縮小した。

さらに、この百五十人の學生すら、優待生、官費生、自費生の三級に分け、優待生は、「膳宿費」と若干の小使いを支給し、官費生には學費免除の上、食事と宿舍を提供し、自費生は、「學膳費」年三百元を徴収すると規定した⁽¹⁰¹⁾。この規定にもとづき、吳敬恆は、上海、北京、廣東で學生募集をおこなったが、採用された學生には、二つの典型的なグループが含まれていた。まず、優待生あるいは自費生の中に、有名なアナキストが相當數いたことである。陳獨秀とのアナボル論争で有名な區聲白をはじめ、唐學詠、黃涓生、またかの劉師復の弟の劉石心と四人の妹である劉抱蜀、劉天放、劉無爲、劉翠微、さらにはかの女

たちの夫になる桐章（天放の夫）、黃葉（無爲の夫）、崔載陽（翠微の夫）など、名前が知られているだけでもこれだけにのぼり、⁽¹⁰²⁾さほど名の知られていない人物を加えれば、二十名をこすのではないかと思われるほどである。吳敬恆が、かれの黨派的利害を第一に優先させて人選にあたったことが知れる。いまひとつのグループは、自費生を設定したことによって、無能な名門の子弟が數多くまぎれこんできたものである。「この輩の自費生は、名は招收となすも、實は多く親故名門の紹介するところより出づ」。リヨン中佛大學の設立資金のために、西南軍閥にとりいつた吳敬恆は、開校の段階になって當然その借りを返さなければならなかった。かれらは、「甚しきは、大小便の微に至るまで、また須らく、吳氏が、苦口婆心し、指點講解して以て人の斥辱を免がれし」⁽¹⁰³⁾めなければならぬような状態であつた。しかし、當時年費三百元を支出できる家庭が、どの階級に屬していたかを考えれば、自費生の枠を設けたこと自體が、このような事態をまねくものであつたといえる。

かくして、アナキストと「貴族階級」の子弟を中心とする學生たちは、吳敬恆の引率のもと、一九二一年八月二十一日、上海からポルトス號に搭じてリヨン中佛大學に向つた。⁽¹⁰⁴⁾一方、パリでは、リヨン中佛大學が單なる宿泊センターに格下げされてしまつたことに、大きな不滿がおこつていた。一九二一年六月六日、王若飛を先頭とする工學互助社は、二百二十五人の勤工儉學生を結集して、決起集會を開き、リヨン中佛大學を「工學院」に改め、勤工儉學生を收容するように要求した。⁽¹⁰⁵⁾二八闘争をたたかい、いままた中佛祕密大借款反對闘争をたたかうとしていた勤工儉學生にとって、リヨン中佛大學は、最後のよるべき據點として、まさにオアシスを遠望するかのような存在であつた。ところが實際には、一部のアナキストと、軍閥官僚の子弟が國內で選拔されて來佛しようとしており、しかもフランス在住者で入學を許可されたのは、勤工も儉學もしていない中佛教育會の職員（劉厚、華林、曾仲鳴、彭襄、吳樹閣など）ばかりで、⁽¹⁰⁶⁾本當の勤工儉學生は完全にシャットアウトされたといふことが明白になったとき、困窮した勤工儉學生の怒りは當然、頂點に達した。

とくに、八月二十一日上海出發の消息が傳わると、フランス各地の勤工儉學生は、もはや待機主義をふりすてて、積極的にリヨン中佛大學を勤工儉學生の手に奪回する闘争方針を鮮明にした。クルーズ工場に働らく勤工儉學生、百四十七人は、「ク

ルーズ工場勤工儉學生、中佛、中比兩大學奪回運動團」を組織して、いち早く各地の勤工儉學生に檄をとばした。最初にだした宣言では、中佛大學の設立經過において、李煜瀛、蔡元培らが、常にフランス在留の千數百人の勤工儉學生を口實にしていたことを理由に、中佛大學が勤工儉學生のために建設されたのは、不動の事實であると主張した。

中國が海外教育を建設することは、空前の創舉である。中國の平民教育が、いままさに萌芽しようとしている。國內の父老、昆弟は、これに對していかばかり期待していることであろう。リヨン中比兩大學は、開始以來、國內政爭の影響を受けて、ほとんど停滯していた。いまに至ってまた活動しているが、突然に方針を變え、經過もひたかくしにしている。實質によつて觀察すると、結局、中國が數十年來派してきた官費の種々特殊待遇の貴族教育と軌を一にし、特殊階級のた⁽¹⁰⁷⁾めに特殊勢力を造りだしている。

設立經過のうえから勤工儉學生に優先權があるばかりではない。數十年來の官費留學生が特權階級に獨占されてきた弊害を除き、海外教育においても、新しい平民教育の時代をきり開く使命を、リヨン中佛大學はになつていたのである。勤工儉學生を排除することは、この崇高な使命を自ら放棄して、舊來の貴族教育に逆戻りするのにはかならないわけである。したがって、奪回運動の目的は、「勤工儉學生の需要に適合して、その平民のための教育を完成する」ことにある。

さらに、九月五日に發せられた通告では、「中佛、中比兩大學創辦の初めは、頗る平民教育の旨に合するも、後に一般の軍閥、官僚の破壊するところとなる」という認識を再度表明したのち、奪回運動の組織手順を具體的に提示する。第一段は、各地で團體を組織し、辦法を講じ、辦事人を選出する。第二段で、各地の團體が結集して、全體的な同盟をつくりあげる。第三段では、中佛兩國の要人に働きかけて援助を請うとともに、兩大學の責任者と「正式の談判」を行ない、「平和的に奪回の目的を達成することを期す」というものであった。⁽¹⁰⁸⁾この段階では、實力占據という方針はまだ出てきていなかったわけである。

クルーズ工場の運動團がはなつた檄は、各地の勤工儉學生から大きな反響をえた。九月十日に至り、パリでは再び大衆的な抗議集會が開催された。すでに述べた如く、九月三日にフランス政府が中佛委員會の解消と補助金の停止を一方的に宣告したことは、勤工儉學生の危機感をいっそうつのらせた。このとき、周恩來は學友たちに、「途はきわまった。ついに方向を轉換しなければならぬ。勢單力薄なれば、いっそう團結しなければならぬ。マルクス、エンゲルスは、世界の勞働者、團結せよ」と叫んだ。かれらはいまも、すべての勤工儉學の學友諸君、早急に團結せよ！と思っているだろう」とよびかけた。⁽¹⁰⁹⁾九月十七日のパリ代表大會では、學生の鬭爭心はより高揚し、「リヨン大學を開放することを、唯一の目標とする」という決議を可決した。ここに至って、勤工儉學學生總會をリヨン中佛大學へ移轉させることを名目にして、入校部隊をリヨンに進軍させ、實力占據鬭爭を貫徹するという方針が確定されたのである。

しかし、そこに革命的警戒心がかけていたこともまた事實である。何長工は、このリヨン進軍に公使陳錄の謀略が働らいていたと指摘している。「この海千山千の、狡猾な官僚は、さらに學生のために一計を案じ、リヨン大學にうつり住むようすすめるとともに、もっともらしく氣前のいいところをみせて、リヨンまでの旅費を出そうといった⁽¹¹⁰⁾」。實際、クリーゲルが Archives des Affaires étrangères を驅使してつきとめたところでは、陳錄から學生たちへ、八千フランにのぼるリヨンへの旅費が支拂われたとのうわさが流れていた。陳錄が學生に同情して支援したなどということは、到底ありえないことである。當然、學生たちの怒りを中佛教育會に向けておいて、自らは難をのがれようとする保身の術であることは、言うをまたない。だが、その背後にはさらに狡猾なフランス帝國主義の策動があった。北京駐在のフランス代理公使が本國政府に九月一日付で打電した電文は、その陰謀をあけすけに語っている。中國政府に學生を送還する決意を固めさせるためには、學生が公使館へデモをかけるのを放置しておくのがよいと忠告したのち、電文は「われわれは、この送還にいかなる責任ももっていないと思われるようにすべきである。當事者のすべての怒りをかれらの政府に向けることが重要である⁽¹¹¹⁾」と結んでいる。北京軍閥政府、フランス帝國主義政府のいずれにとつても、リヨン進軍は自からの手を汚すことなく先進的な勤工儉學生を一網打盡にする願

つてもない機會であつた。

リヨン進軍の總司令部は、パリにおかれた。十七日の大會決議が各地に送付されると、コロンブ、モントルジ、シャトウテイエリ、サンセルヴァン、ムラン、フォンテンヌブローなどの勤工儉學生も、リヨン進軍に呼應することを誓つた。「九月二十日の夜、パリのリヨン驛を、數十人の悲壯な青年が靜悄悄と歩んでいた。同夜の中に、各地から出發するはずの青年たちも、嚴肅に、突撃の途についていた」⁽¹¹²⁾。二十一日朝、パリからついた學生たちは、リヨンで各地からかけつけた九十七名の學生と合流し、總勢百二十五人を以て、サントルネ山上を目ざしていった。前線指揮をとつたのは、工學互助社の蔡和森、クルーズ運動團の李立三、さらに李維漢、陳毅、趙世炎、向警予らであつた。門衛の阻止を突破した學生たちは、リヨン中佛大學の校内に大舉押し入り、自分たちの要求がいれられるまで、實力占據を貫徹する態勢にはいつた。最初の豫定では、これを先鋒隊とし、パリにのこつた王若飛と周恩來がさらに多くの學生を結集して、本隊を送りこむことになつてゐた。

ところが、リヨン中佛大學の副校長、褚民誼は、學生の占據と同時に、リヨン市長に「匪類の逮捕」を名義として警官の出勤を要請した。社會主義者を以て知られてゐたエリオも、所詮はブルジョア國家の市長であつた。翌朝、二、三百人の武裝警官がリヨン中佛大學の建物を包圍し、中に閉じこもつてゐた學生を全員檢舉して付近の兵營に監禁してしまつた。⁽¹¹³⁾先鋒隊全員逮捕されるとの飛報に接したパリ本部では、急遽方針を變更して、逮捕者の釋放に全力を注ぐことになつた。周恩來と王若飛は、勤工儉學生の長老二人、徐特立と黃齊生（王若飛のおじ）に、關係當局との交渉を依頼した。徐特立の回憶には、この時の吳敬恆との遣取が詳細に描かれてゐる。そこには、「辛亥革命の闘士」であつた吳敬恆が、化の皮をはがれていく過程が巧みに敘述されてゐる。なお、吳敬恆は、十月二日に數十人のアナキストと軍閥の子弟をひきいてマルセイユに到着してゐた。

吳稚暉先生は、當時學校當局であるとともに、中佛教育會創立者の一人でもあつた。かれは辛亥革命のさいの愛國學社における光復會系に屬し、だれでも吳先生は北洋政府と對立するものと信じてゐた。ところが、吳は北洋系の公使陳鐸と、

勤工儉學生を壓迫するうでで合作したのだ。……若飛同志はこの運動の組織者であつた。かれはパリに来て、わたしと黃齊生先生をさそつてリヨンに赴き、稚暉と交渉した。この時、わたしと黃は呉の爲人を信じていたので、リヨン大學に出かけ呉と會つた。ところが、呉は罵倒した、「勤工儉學生が規律を守らないから、どうしようもない。金の工面など論外だ」。わたしと黃は答えた、「規律を守らないのは、失業して勉強できず、また生活していくこともできないからです。金さえあれば、かならずや方法もありましょう。呉先生は、金の工面の問題についてどうお考えです」。呉は答えた、「わたしはすでに陳籙に、金を工面してくれるよう手紙を出しておいた」。この時、わたしは思った。呉は在野の名士で、陳籙は國家の公使である。呉に、公使に金の工面を命令する權力などどうしてあろうか。われわれをだましているだけだ。さらに呉はでたらめな話もちだして、「勤工儉學生にもし方策があるのなら、わたしと呉某が、およばずながら出て出よう」といった。以前、わたしと黃齊生先生及び若飛同志は、呉を聖人の類と思つていたから、われわれはかれを疑わなかつた。しかし、こんどばかりはわれわれも聖人に失望した。⁽¹¹⁴⁾

呉敬恆の方針ははっきりしていた。「リヨン大學は高等なる人材を養成するためつくられたもので勤工とは主旨が合わぬ」が表向きの理由であり、内心では國內から引率してきた學生だけでも財政負擔の壓迫が相當になるとみこまれるうえに、千數百人の勤工儉學生に門戸を開けば收拾がつかなくなると判斷して、斷固勤工儉學生を拒否するだけであつた。したがつて、勤工儉學生との交渉なるものは、鬭爭の激化を阻止して時間かせぎをするだけの意味しかもつていなかった。十月三日、交渉の場は、リヨンからパリに移され、呉敬恆は、章士釗、高叔欽、李駿、鄭毓秀を召集して對策を協議した。その結果、リヨン中佛大學開放という勤工儉學生側の要求はいれることができないが、その代償として、章士釗が國內で九萬元の募金を集めること、公使が政府に年三萬元の援助を要求すること、それまでは公使館が貸與を行なうこと、學生五百人がクルーズ工場に就職できるように折衝すること、の四項目を提示して妥協をもとめた。⁽¹¹⁵⁾この妥協案は、徐特立のいうように、「在野の名士」呉敬恆

に實現できる内容ではなかった。

しかし、實現できるか否かは、吳敬恆にとってすでに問題ではなかった。十月三日付の公使館から北京外交部への電報⁽¹¹⁶⁾によれば、中佛祕密大借款が勤工儉學生の鬭争によって阻止され、復仇の念にもえていたフランス帝國主義政府は、「治安擾亂」の罪名をかぶせて、逮捕學生全員を強制送還すべく、すでに北京軍閥政府に一萬元の船賃を要求していたのである。フランス政府がイニシアティブをとって決定されたこの既定方針は、當然、中國公使館、中佛教育會の同意もすでにとりつけていたはずである。とすれば、吳敬恆の妥協案は、強制送還が實現されるまでの期間、勤工儉學生の眼をリヨンからそらせておきさえすればよいだけのものであったといわなければならない。

しかも、強制執行の日が近づくにつれて、中佛教育會の面々はパリを脱出し、あるものはベルリンへ、あるものはリヨンへ逃亡していった。リヨンでは、十月十日雙十節を期して、中佛大學の開校式が盛大に舉行された。歌や舞りの歡聲が、離れた兵營の鐵格子にまで響いてきた。「が、兵舎のなかは逆に、ひっそりとしており、兩者は好對照をなしていて、人を堪えきれなくさせた。だから、とらわれていた學生たちは、一日ハンストをして抗議の意を表明した⁽¹¹⁷⁾」。公使館からは、李駿が「フランス當局に學生釋放を交渉するために」、派遣されてきたが、もちろんそれもポーズにすぎなかった。自らの運命を知った學生たちは、落ちて足を折ったり、塀の外の犬に噛まれながら脱走を試みた。最初逮捕された學生は、百二十五人と百三十人ともいわれていたが、このようにして逃れた學生がでて、強制送還の日には、百四名が残っていた⁽¹¹⁸⁾。その中には、蔡和森、向警予、陳毅、李立三などの、代表的な活動家が含まれていた。趙世炎は、奇計を用いて危うく送還を免がれたといわれている。

十月十三日、裝甲車につめこまれた百四人の學生が、リヨンの驛で窓をびったり閉じた特別列車につみかえられてマルセイユへ送られた。急を聞いた學友たちは、驛にかけつけたが、フランス兵の壁にさえぎられて言葉さえかわすことができなかった。ものかげでは副校長の褚民誼がじっと傍觀していた。「中國人學生が聲をかぎりにかれをのしったが、かれはにやにやしなうなづくだけだった⁽¹¹⁹⁾」。マルセイユでポールルカ號の船倉につめこまれ、十月十五日、無念の中に、フランスをあと

にした。その日は、中佛委員會の補助金が停止される日でもあった。

かくして、學生たちが、吳敬恆のマヌーバーと公使館の策略にふりまわされている間に、フランス帝國主義政府は、情容赦なく、彈壓の切札を行使した。強制送還された學生は、蔡和森のような戰鬪的な先進分子だけではなかった。兵營の中で徐特立に「わたしの家は破産し、やっとの思いで路銀とその他の費用を工面しました。學成つて歸國する日をたのしみにしていました、いまフランス語もちゃんと學んでいないのに、とうとう強制歸國させられることになり、わたしの父兄に再會する顔がありません」と訴えるような學生もいた。提唱者であった中佛教育會、とりわけ吳敬恆は、このひたむきな心情に對して、黨派的利害と軍閥との野合を優先させ、政客そのものの對應に終始したのである。クリーゲルをはじめ多くの論者は、この現象を、辛亥革命世代と五四運動世代の分裂という觀點から説明している。もちろん、世代論はいつの時代の現象を説明するにも、つねに一定程度の有效性を發揮するものであるが、二八鬭爭からリヨン進軍に至る一連の現象に對しては、それだけでは不十分であり、吳敬恆を筆頭とする提唱者たちが、帝國主義及び封建軍閥といかなる關係にあったかをも、分析の材料にいれなければ完全とはいえない。例えば、徐特立と黃齊生も世代でいえば、あきらかに辛亥革命の世代であった。提唱者とのこの相違を十分に説明するためには、どうしても、帝國主義、軍閥との距離を問題にしなければならぬであらう。

この關係を、リヨン進軍を指導した周恩來は、當時すでに正しく理解していた。「勤工儉學生が一日フランスにいれば、かれ〔陳籙〕の賣國の陰謀は決して遂げえない。また、勤工儉學問題が一日解決しなければ、陳籙もまた決して安寧でない。陳籙は、仇讐さわり、そこでフランス外務省と聯絡してこの毒手を下し、突然、維持費を停止し、勤工儉學生のリヨン大學奪回の心理を利用して、手助けしてリヨンに行かせ、おりに陥し入れてから、外力を借りて家においかえたのである」⁽¹²¹⁾。リヨン進軍は、かたちとしては、陳籙の同情により旅費を支給された學生が、リヨンにのりこみ大學當局と直接談判をしたのであり、リヨン中佛大學あるいは中佛教育會と、勤工儉學生との對立という形態をとった。しかし、勤工儉學生は、鬭いをすすめていく中で、眞の敵がどこにいるかを、すでに明敏に察知していたのである。中佛教育會の背信行爲は、もちろん糾彈されな

ければならない。だが、そもそも中佛教育會がなぜ提唱者としての名譽をかなぐりすててまで、勤工儉學生の彈壓にまわることになったかを冷靜に考えてみれば、その根源が結局、帝國主義と封建軍閥に支配されている中國の社會狀況にあることが明らかになった。しかも、闘争の経過を仔細に検討してみると、まさしく周恩來の指摘するとおり、北洋軍閥政府の公使陳籙とフランス帝國主義政府の一體となった陰謀が浮びあがつてきたのである。

勤工儉學運動という一つの運動を闘いぬくためにすら、最後の段階に至れば、帝國主義、封建軍閥ブロックと直接に對峙して、虚虚實實の戦いをすすめなければならぬ。リヨン進軍はあえなく敗北したが、その教訓は、代價をつぐなつて餘りある貴重なものであった。われわれは、リヨン進軍を以て勤工儉學運動の終焉とみなしてよいだろう。だが、それは、提唱者である中佛教育會と勤工儉學生の決定的な分裂だけを理由とするのではない。勤工儉學生自身が、勤工儉學よりも、帝國主義、封建軍閥との闘争が先決であり、その熾烈な闘争を闘いぬくことなしには、勤工儉學さえも實現できないことをはっきりと自覺したところに、眞の理由をみとめるのである。勤工儉學運動の終焉は、同時に反帝反封建闘争への進撃でもあった。

注 引中の()は原注、〔 〕は筆者の挿入。

(1) 何長工『フランス勤工儉學の回想』 四八頁。

(2) 吳若膺『歐行雜記』、『學藝』第二卷第七號(民國九年十月三十日)所收。『西貢本是法國的屬地。待中國人及安南人、均異常苛刻。凡是中國人及安南人在西貢的、每人每年皆要納稅、中國人十八元、安南人只要五元。並且都須寫一張『身納紙』。在紙上中國人須用五指作印、安南人只拇指一個。這張紙時時必須帶在身上。因為常常有法人盤問、或一時忘却、則必被捕受罰。』孫福熙『赴法途中漫畫』——『新潮』第三卷第一號(民國十年十月一日、本來は『晨報副刊』に

民國十年一月十一日から三月二十一日まで十回にわたり連載されたもの)所收では、文學者らしい皮肉な觀察がみられる。

(3) 以上、何長工 前掲書 五二—五三頁。

(4) 同前 四八頁。

(5) 盛成『海外工讀十年紀實』上海中華書局 一九三二年刊 四頁。

(6) 吳若膺 前掲文 七頁。

(7) 盛成 前掲書 七頁。

(8) 何長工 前掲書 五七頁。

(9) 同前 八三頁。

(10) 莊啓『留法勤工儉學』——『教育雜誌』第十二卷第六號(民國九年六月二十日)所收 五頁。

(11) 李書華『十年留法』——『傳記文學』第三卷第四期(民國五十二年十月一日)所收、四二頁。『東方雜誌』第十七卷第十一號(民國九年六月十日)卷頭の口繪「巴黎華法教育會同人攝影」も参照のこと。

(12) 「法國華僑協社成立紀」——『時報』民國八年十一月十五日所載。「僑法華人、最近有一極可記之事、即華僑協社成立是也。僑法華人本來甚多、其所組成之各團體、亦以十數。惟向缺一種共同協助之組織、

故有許多應辦將辦之事、每歎力弱未能暢通進行。現在各國體因感此必要、特創設一華僑協社。計其組織之要旨、係一組織華僑公共機關、二採取協會分工協力之制、三共同消費、四舉辦或協辦各種公益事業。其地點在巴黎西郊可倫布村、新購房屋一所約五萬餘佛郎。內設備辦公室、講演室、圖書館、商品陳列所、公用電話、住址、車具、廉價之印刷照相及其他用品、廉價之宿舍、廉價之船位等等。……已於八月三十一日、開成立大會。是日、除在社各團體代表外、有陸徵祥專使及胡維德公使代表、巴黎總領事廖世功、副領事李駿、俄國華工管理員及華僑代表朱紹陽等。……」

- (13) 「留法勤工儉學雜述」——『時報』民國九年一月十二日所載。「自本年（一九一九年）三月以來、勤工儉學會為與各工廠預商、以為新生到後入廠之預備。計一月之內、發出二百餘函、其所得結果大致十分之八、皆以暫緩二字回復。一則原戰後工廠皆在改組或停閉中、二則因學生作功其效猶未大顯、各廠皆意存觀望也。」

- (14) 卞孝萱輯「留法勤工儉學資料」——『近代史資料』一九五五年第二期所收 一七七頁。及び莊啓前揭文八〇九頁。なお、勤工儉學生の就職先については、前掲「留法勤工儉學雜述」も併せ参照。

- (15) 「巴黎華法教育會開會記（續）」——『時報』民國九年六月八日所載の向迪璜報告。「……現在畢竟得到較圓滿的結果。先走到 Grenoble、次到 Saint Etienne、Grenoble 的總商會、對於此事極允贊助、今日接到他的回信、他已為我們介紹了八十個工廠了（劉君便將此信傳觀）。至 Saint Etienne 亦已交涉妥當、有許多候工同學、正在倚裝待發。該地有 Le Flaire et Coie 廠、向本會約送三百四十二名、即日入廠、以後並可以用學徒。ただしこの三百四十二名という数は、この直後ではまったく逆轉して二百四十三名となっている。いずれかが誤植であろう。」

- (16) 「巴黎華法教育會開會記」——『時報』民國九年六月七日所載の劉厚報告。「……學校的交涉不易。這是對於勤工同學說不易、若儉學同學、當然不同。法國學校收費、大半都論學年學期、不以月計。但是

勤工同學不久也便要作工、自然不能久住、因此不得不與幾個學校特別交涉」。

- (17) 卞孝萱 前掲資料 一九四〇一九五頁。

- (18) 同前 一七八頁。

- (19) 同前 一七八—一七九頁。

- (20) 「李石曾之勤工儉學談」——『時報』民國九年二月二十九日所載。「至謂機關中人『有官氣』與『不能辦事』、乃極不公道之言」。

- (21) 李璜「學鈍室回憶錄」傳記文學叢刊二十七、台北 民國六十二年刊 六三頁。人數については、「楓丹白露之中國學生」——『時報』民國九年六月三日所載も参照。

- (22) 「留法勤工儉學詳況」——『東方雜誌』第十六卷第十二號（民國八年十二月十五日）所收 一九六頁。

- (23) 「五四」時期湖南新文化運動的部分資料——「五四」時期湖南人民反帝反封建運動報刊紀述輯錄之三」（以後、「報刊紀述輯錄之三」と省略する）——『湖南歷史資料』一九五九年第四期（十二月二十五日）所收 六六〇六七頁。

- (24) 「楓丹白露之中國學生」——『時報』民國九年六月三日所載。「夫德意志之蹂躪人國、至矣盡矣。幸法有以勝之。今吾國亦有遠東德意志之患、法人亦知之乎。彼日本軍閥之奪吾滿洲山東、亦與羅蘭亞爾薩斯之故事曷異。然而法人苦心孤詣、竟得二州之珠還。吾輩深羨法人精神、遂亦知自勉」。

- なお、おそらくこの游藝會の記念寫眞と思われるものが、『教育雜誌』第十三卷第四號（民國十年四月二十日）の巻頭口繪として残っている。

- (25) 卞孝萱 前掲資料 一八〇頁。

- (26) 以上、何長工 前掲書 七八〇七九頁。

- (27) 盛成 前掲書 五一頁。「校長與監學、視中國學生與法國學生無異同、管理至嚴、不能自由出入。法國學生、確少自治能力。……法國中學、沒有監學、學生要造反了」。

(28) 同前 五二、五三頁。「搬木頭、抗木頭、頂木頭、不要手藝、倒要一付硬肩背、倒少不了一塊大好的頭顱。第一天、做了六點鐘、倒來倒在床上、飯也不想去吃、連大小便、都懶得起來去解。一刻閑、都是好的。……第二天清晨五點半、那無情的鬧鐘、嗡嗡不住的來叫。好似說、『起來、穿衣服、去上工廠。』我却去去的思索、看去好還是不去好。一想起了布棚、連想起了地窖、再想起了那維持費。撲突、我起來了。冷水、麵包、可糖、接連咽了幾咽。北風兒、你吹我吧。我不抖、也不動。穿上上衣、好冷、工頭來了、快快做、經理來了、快快做、廠主來了、快快做、」

(29) 「法工廠中之中國學生」——『時報』民國九年三月十六日所載。「彼等雖係在化學廠作工、但於學問技藝、皆無關係。所作者不過係無味之苦工。」

(30) 以上、「王若飛同志留法勤工儉學日記」——『中國青年』一九六一年第十六期（一九六一年八月十六日）所收 一一、一二頁。「學目一望、只見黃塵滿地、黑烟四起、天色愁暗、河水污濁。」「粗野」的勞動者、才是人類過正當生活的人、又是文明的製造者。」「築的松緊、關係很大。若是松了、把木型取出后、必至潰散。若是緊了、鐵中所含的一種氣體、不能發舒、也要爆裂。」

(31) なお、この日記は、王若飛「聖西門勤工日記」——『少年世界』第一卷第十一號（民國九年十一月一日）所收からの摘録と思われる。同前一二頁。「四月二十九日、連日天氣甚熱、廠中尤為乾燥、遍地都是泥砂、大風過處、砂即騰起、着于面上、為汗水所粘滯、偶一拂拭、其狀越怪丑可笑、鼻為灰沙窒塞、呼吸因之迫促、時時仰面噓氣、以自蘇。」

(32) 何長工 前揭書 九六頁。

(33) 前揭「法工廠中之中國學生」。

(34) 卞孝萱 前揭資料 一七六頁。

(35) 「李石曾之勤工儉學談」——『時報』民國九年二月二十八日所載。「至於現在、則已有二百餘勤工儉學生、分布於數十工廠。可謂多數人之

試驗、已成事實。尤可樂觀者、則勤工儉學之事、不僅可以實行、且成績之佳、尤非始願所料。」

(36) 王若飛 前揭日記 一二頁。「我非不知勞動為自己對人類應盡之一種義務、勞動為良心上平安的生活、勞動是愉快的事業、對於勞動而痛苦觀念是很可恥的事。但是、現在這種勞動、完全是替別人做事、拿勞力賣錢、不是自動自主的勞動。若認為安、則是現在的勞動運動、可以無須乎有了。」

(37) 同前 一二頁。「我對於我現在的作工、是抱定下面的四個條件去做、(一)養成勞動的習慣。(二)把性磨定、把身煉勁。(三)達求學之一種方法。(四)實地考察法國勞動真象。」

(38) 卞孝萱 前揭資料 一八六頁。

(39) 河野健二『フランス現代史』世界現代史十六 山川出版社 一九七七年刊 一九〇頁。

(40) Annie Kriegel *Communismes au miroir français* p. 84

(41) 卞孝萱 前揭資料 二〇四頁。

(42) 「留法學生請加學費書」——『時報』民國九年五月二十日所載。

(43) 何長工 前揭書 一〇五頁。この慘狀については、卞孝萱 前揭資料 一八二、一八三頁も参照のこと。

(44) 李璜 前揭書 七〇頁。

(45) 盛成 前揭書 六一頁。「勤工儉學生來法後之死亡人數、在二百之上——吃菌子死的、吃炸白薯死的、失蹤死的、肺癆死的、瘋癲死的。」

(46) 卞孝萱 前揭資料 一八五頁。

(47) 盛成 前揭書 四九頁。「李先生、人是好人、可惜做事、有頭無尾。」

(48) 同前 四八頁。

(49) 卞孝萱 前揭資料 一九六、一九七頁。

(50) 「留法勤工儉學生請懲辦李光漢」——『時報』民國十二年七月十六日所載。

(51) 同前「夫萬里勤工、窮愁以死、天涯淪落、同類與悲、骨暴荒郊、情

何能忍。此而謂之頑固、然則必如光漢、別具肺腑、祝同學之早死、冀遺款之承襲、乃非頑固耶。

- (52) 任卓宣「勤工儉學生與華法教育會底改造」——『留法勤工儉學生週刊』第十四期（一九三三年五月二十六日）所收 二頁。「牠的職員、只有一個書記和三個雇用人、既無所謂評議部、又無所謂董事會、更無所謂委員會。因此、李光漢一人、遂得專擅一切包辦一切。華法教育會、竟變成了他的金字招牌、狐皮外套。」

- (53) 何長工 前揭書 一一〇頁。

- (54) 李書華 前揭文 四三頁及卅下孝萱 前揭資料 一八五頁。

- (55) 「教育部再阻勤工赴法」——『教育雜誌』第十三卷三號（民國十年三月二十日）所收 臺灣復刻版通頁 一八一〇一頁。「北京教育部總長鈞鑒。勤工儉學生來法國者、多不合所訂條件、撥款太少、又無勤工之志、且工亦難找。教育會、維持彼等生活、挪借經費、爲數甚鉅、萬難繼續、現已絕糧。擬請籌畫各省、按照湘粵粵各省成例、在本省地方、從速設法匯銀接濟。……并祈立即阻止各省遣送勤工儉學生。否則萬無辦法。廖世功、蔡元培、高魯。」

- (56) 以上、「電阻勤工儉學生赴法」——『時報』民國九年十一月二十五日所載及卅下孝萱 前揭資料 一八九頁。

- (57) 「對於勤工儉學生之通告」——蔡元培——『安徽教育月刊』第三七期所收。いまは、舒新城編『近代中國教育史料』第一冊 上海中華書局 一九二八年刊の轉載による。同書 三三五頁。「今既欲解除一切困難、不得不先辨明此三會之性質。」

- (58) なお、この二つの「通告」は、天「留法勤工儉學生使館請願記」——『教育雜誌』第十三卷第七號（民國十年七月二十日）所收にも、全文が收録されている。

- (59) 同前 三三六頁。「按現在勤工儉學生之無工作者、每月受華法教育會維持費人、各百五十元。華法教育會、本無基金、又無入款。其付與學生之維持費、均由他處轉騰挪而來。此種辦法、斷難持久。」

所收。いまは、舒新城 前揭史料 三三七頁による。「華法教育會、對於儉學生或勤工儉學生、脫卸一切經濟上之責任、只負精神上之援助。學生諸君、幸勿誤會之接濟有始無終。須知本會既無源源而來之底款、則此與日俱增之應付、何能接濟。」

- (60) 卞孝萱 前揭資料 一八七頁。

- (61) 同前 一九〇頁。

- (62) 以上、同前 一八七—一八八頁。

- (63) 「留法勤工儉學生之經過情形紀實」——『安徽教育月刊』第五十三期（民國十一年五月）所收。いまは、舒新城編『近代中國教育史料』第一冊の轉載による。同書 三三四頁。「二月十七日接准教育部電開、將勤工儉學生無力自給者遣送回國等因。」

- (64) 王獨清「我在歐洲的生活」上海大光書局 民國二十五年再版 四八頁。

- (65) 以上、何長工 前揭書 一一四頁。

- (66) 王獨清 前揭書 四八頁。「M城底空氣、變得異常的緊張。連城中的法國人、都感到了不安。」

- (67) 天一「留法勤工儉學生使館請願記」——『教育雜誌』第十三卷第七號（民國十年七月二日）所收 臺灣復刻版通頁 一八五八八頁。「請願之前、有未具名之函、投至巴黎警察署、告以留法中國學生、對於本國使署將有此項舉動、請警長勿加干涉。」

- (68) 以上、同前 一八五八八頁。「無論如何、必達到勤工儉學目的。請求政府每月給費四百佛郎。」「如做得到、無不樂爲。惟須轉達政府、看如何解決。至現在、諸君可暫入學校、此間擔任三月內一月學膳用費。俟有覆音、再行通告。」「某等係由數百同學公舉而來、此時同人均在某公園等候回信。若不得具體之永遠解決、無辭回覆同人。」

- (69) 何長工 前揭書 一一五頁。

- (70) 王獨清 前揭書 五〇頁。

- (71) 以上 天一 前揭文 一八五八八頁。

- (72) 何長工 前揭書 一〇〇頁。

- (73) 以上 王獨清 四九〇五〇頁。「不管爲的是甚麼目的、而採取的行動是一種相當有革命色彩的行動」。「那般中國學生、都是些要革命的人。非趕快想方法對付不可」。
- (74) 前掲『留法勤工儉學生之經過情形紀實』 三三〇〇三三一頁。
- (75) 天一 前掲文 一八五八九頁。
- (76) 以上、李璜「巴黎現存關於留法勤工儉學生救濟實況檔案摘要」『傳記文學』第二十三卷第四期（民國六十二年十月一日）所收 一六〇一八頁。
- (77) 「新到北京之法前總理」——『時報』民國九年六月二十五日所載。
“M. Painlevé's Tour” : North China Herald 1920. 6. 26.
“France and China—M. Painlevé on his Mission” : North China Herald 1921. 1. 1.
- (78) “M. Painlevé's Visit” : North China Herald 1920. 7. 3.
- (79) 前掲『留法勤工儉學生之經過情形紀實』三三三頁。「法國政府、以中國政府扶助該銀行進行、可以不拘國內現行禁止外債之例、准由中法銀行於改組後、即行招募三萬萬佛郎、交與中國政府」。
- (80) 卞孝萱 前掲資料 一九九頁。
- (81) 同前 二〇一頁。
- (82) 胡華『青少年時期的周恩來同志』北京中國青年出版社 一九七七年刊八八頁。何長工「回憶旅歐期間的周恩來同志」——『周恩來總理八十誕辰紀念詩文選』人民出版社 一九七八年刊所收にも、この闘争について詳しい記述がある。
- なお、羅眞容「寶貴的文獻——介紹周恩來同志的旅歐通信」——『新聞戰線』一九七八年第一期（十二月）所收によると、この記事を含め、周恩來が『天津益世報』に寄稿した記事は、五十四篇、二十四萬字近くにのぼったという。
- (83) 何長工 前掲書 一二二一二三三頁。
- (84) 前掲『留法勤工儉學生之經過情形紀實』三三三頁。「拒款風潮發生之後、法政府因使館館員被毆、極表不安。且聲言惜未按照本年三月

- 中國政府之主張遣送回國、致生枝節」。
- (85) 以上、吳敬恆「海外中國大學末議」上・下——『建設』第一卷第六號（民國九年一月一日）・第二卷第一號（民國九年二月一日）所收。
なお『時報』所載、民國八年十二月二十三、二十四、二十六、三十一日、民國九年一月四〇六日も文字の異同はない。
- (86) 同前 第二卷第一號 六八頁。「今觀吳先生海外中國大學之議、歲費四十餘萬金、而國內大學諸缺點、無不有以補充之。其成效豈可量哉」。
- (87) 以上「巴黎華法教育會開會記（續）」——『時報』民國九年六月十二日所載。
- (88) 陳淩海編「吳稚暉先生年譜簡編」——『吳稚暉先生全集』（臺北 民國五十八年刊）卷十八附錄 四九〇五〇頁。
- (89) 舒新城編『近代中國教育史料』第三冊 一八頁の解題。
- (90) 以上「巴黎華法教育會開會記（續）」——『時報』民國九年六月十三、十四日所載。
- (91) 「巴黎華法教育會開會記（續）」——『時報』民國九年六月十四日所載。「統全砲臺而論、以前本可住兵士二千人。若其再將機械室等、概行改爲住室、更可多住、大約儘可容到二千五百人的上下」。
- (92) 以上、盛成 前掲書 五七頁。「華法教育會是李石曾辦的、里大是我辦的」。「我吳稚暉的里大、與他李石曾的華法教育會、是沒有絲毫關係的。你們勤工儉學生、要去找華法教育會。將來要進里大、須報名投考」。
- (93) 李書華「十年留法」 四五頁。
- (94) 「中法協進公會開幕記」——『時報』民國九年六月二十四、二十五日所載。
- (95) 楊端六「西南大學之經過（續）」——『太平洋』第二卷第七號（民國九年十一月五日）所收 二四頁。
- (96) 「里昂之中國大學校舍」——『教育雜誌』第十三卷第二號（民國十年二月二十日）所收 臺灣復刻版通頁 一七九八〇頁。「土木工人修

- 理、定於一月完工。因二月內即須開預備科、以便預備至暑假後、正科即可始業。
- (97) 楊端六「西南大學之經過」——『太平洋』第二卷第六號（民國九年八月五日）所收 一三頁。
- (98) 陳淩海編 前揭年譜 五〇～五一頁。
- (99) 舒新城『近代中國留學史』 九九頁。
- (100) 熊卿雲「法國教育概況」——『教育雜誌』第十五卷第四號（民國十二年四月二十日）所收 臺灣復刻版通頁 二二四七五頁。「此校之設備、並非完全大學、不過爲里昂大學之補習學校而已。校名爲 Institut Franco-Chinoise 並非 Université Franco-Chinoise；譯爲中法大學、蓋美其名耳。」
- (101) 同前
- (102) 朱伯奇『巴黎續紛錄』香港南洋編譯所 民國五十八年刊 五八頁。
なお、劉師復の妹四人は、陳淩海編 前揭年譜 五一～五四頁の「中法大學學生房間分配表」には、その名前を見出せない。
- (103) 以上 同前 一八～一九頁。
- (104) 狄膺「十載追思」——『狄君武先生遺稿』臺北 民國五十四年刊所收 一六頁。
- (105) 前掲「留法勤工儉學生之經過情形紀實」 三三三頁。
- (106) 陳淩海編 前揭年譜 五一～五四頁の「中法大學學生房間分配表」参照。
- (107) 卞孝萱 前掲資料 二〇三頁。
- (108) 同前 二〇四～二〇五頁。
- (109) 胡華 前掲書 九〇頁。
- (110) 何長工 前掲書 一二七頁。
- (111) 以上、クリーゲル 前掲書 八五～八七頁。
- (112) 胡華 前掲書 九一頁。
- (113) 王獨清 前掲書 五一～五二頁。及び何長工 前掲書 一二八頁。
- (114) 徐特立「回憶留法勤工儉學時代の若飛同志和齊生先生」——『解放日報』民國三十五年四月二十三日所載。「吳稚暉先生當時是學校當局、又是華法教育會創辦人之一。他是辛亥革命的愛國學社中光復會派、誰都相信吳先生是與北洋政府對立的。不料吳與北洋系的公使陳鑄、在壓迫勤工儉學生上合作。……若飛同志是這一運動的組織者。他來到巴黎、約我與黃齊生先生赴里昂去、與稚暉交涉。這時我和黃是相信吳之爲人。一到里昂、見了吳、吳却大罵說、『勤工儉學生不守紀律、無辦法。籌款不成問題』。我和黃回答說、『不守紀律是由於失業、不能求學、又不能生活下去。有錢必然有辦法。吳先生對於籌款的方法怎樣』。吳答、『我已寫信給陳鑄要他籌款』。這時、我以爲吳是一個在野的名流、陳鑄是國家的公使、吳有何權力命令公使籌款。只是對我們一個欺騙。吳還言了一句都無利的話。他說、『勤工儉學生如果有辦法、我吳某要賣屁股也願意去做』。以往我和黃齊生先生及若飛同志、還以吳爲聖人之流、因此我們不懷疑他。但這一次却使我們對聖人失望。」
- (115) 前掲「留法勤工儉學生之經過情形紀實」 三三三頁。
- (116) 同前 三三四頁。
- (117) 何長工 前掲書 一三一頁。
- (118) 徐特立 前掲文。
- (119) 王獨清 前掲書 五二頁。
- (120) 徐特立 前掲文。「我家破產、纔籌了船費和其他用費。希望學成歸國、今夫法文還沒有學好、竟押送回國、無面再見我的父兄。」
- (121) 胡華 前掲書 九二頁。

第四章 共產主義運動

一、理論闘争の深化

二八闘争からリヨン進軍に至る一連の闘争を通じて、勤工儉學生は、身を以て、帝國主義と封建軍閥という二つの眞の敵を知った。この強大な敵を前にして、勤工儉學生自體の内部にも、深刻な龜裂が生じた。「この何度かの闘争をへて、フランス留學生のなかでは、革命の陣營と反革命のそれとが、いっそう明確になった。大多數の勤工儉學生は、かならずプロレタリア革命の道をあゆんでこそはじめて勝利を得ることができる、とはつきり看取していた⁽¹⁾。しかしながら、問題はそれほど單純ではなかった。そこに至るには、實踐闘争とともに、たえざる理論闘争がくりかえされなければならなかった。本節では、一連の闘争とパラレルに進行していた理論闘争をとりあげ、共產主義思想が他の諸思潮を壓倒していく過程を追求する。

勤工儉學生の間における論争は、主にロシア十月革命をいかに評價し、それを中國の改革といかに結合するかをめぐる進められた。その論争は同時進行的ではなく、われわれの知りうるところでは、モンタルジに學ぶ湖南留學生が先端をきったようである。モンタルジの湖南留學生は、その多くが新民學會の會員であつたため、勤工儉學運動に加わるに際しても、當初から明確な目的意識をもっていたことが下地になった。その中でも、蔡和森がもっとも強力な牽引車であつたことは、よく知られている。最初、かれは會話力が十分ではなかつたので、新聞や書籍から、ヨーロッパ各國の社會主義運動についての知識を収集することから始めた。かれの學習計畫では、フランス滞在の期間を五年とし、「最初の二年間は活動せず、もっぱらフランス語の上達につとめ、各國の社會黨、各國の勞働組合及びコミンテルンについて、まず明確に知る⁽²⁾」ことを目ざした。そして數ヶ月以内に百餘種にのぼるマルクス、レーニン主義のパンフレットを「猛看猛譯」して、その知識を豊富にした。

一九二〇年五月から九月にかけて、かれは毛澤東に三通の書簡をおくった。これらの書簡で、蔡和森は、「社會主義こそが世界改造の對症法であり、中國にはこれ以外にないと考えるようになりました」と、早くも確固たる社會主義の信念を獲得した興奮を傳えている。ここでかれのいう「社會主義」は、決して五四前後に蔓延した社會主義思想一般ではなく、明らかに、ロシア十月革命を成功させたイデオロギーとしてのマルクス、レーニン主義であつた。その證據に、かれがもつとも力點をおくのは、階級闘争（かれ自身は「階級戦争」とよぶ）とプロレタリア獨裁（同じく「無産階級的迪克推多」^{ディクトーリア}）の原理にあつた。かれの主張をみると、われわれは『共產黨宣言』よりもむしろ『國家と革命』から、より直接的な影響をうけていることを感じる。「元來、階級闘争は政治闘争にはかならない。現在の政治は完全に資本家の政治であり、資本家は政權、法律、軍隊を利用してはじめて、労働者を抑壓できる。だから、労働者が完全な解放を獲得しようとすれば、まず政權を獲得しなければならぬ。換言すれば、ブルジョアジーの國家機關（君主立憲であろうと議會政治であろうと）を打破して、プロレタリアートの機關——ソビエトを建設しなければならない」⁽³⁾。

この原理において、レーニンに與するかれは、當然のことながら、修正主義を忌憚なく批判した。當時、中國國內では、『新青年』マルクス主義研究號の卷頭論文においてすら、修正主義をマルクス主義の發展ととらえる程度の水準であつた。⁽⁴⁾これと對比すれば、「修正派、改良派（つまり、ブルジョア觀念論の毒にそまつた）のカウツキー、ベルンシュタインらは、大膽にもブルジョア觀念論をもちだしてきて、唯物史觀を論駁した」⁽⁵⁾と、かれが斷言しているのは、先驅的見解といえる。コミンテルン派と社民派が激しく對立していたヨーロッパに、身をおいていたからこそ得られた成果であろう。この觀點から、かれは、ドイツ社會民主黨に追隨して改良主義を鼓吹していた張君勵一派と、政權奪取を放棄したサンディカリズムを、徹底的に糾弾した。

社會主義諸思想が同時注入的に紹介された五四直後の中國思想界が、社會主義論戰をへて無政府主義、修正主義を克服しはじめたのが、一九二〇年後半であることを考慮にいれるならば、蔡和森が社會主義論戰の先端をあゆんでいたことは、まち

がない。しかし、その受容の仕方には、初期に特有の教條主義的傾向があつたことも否めない。修正主義批判の鋭利さに比べ、マルクス、レーニン主義を中國に適用する論據が、かなり曖昧であるのは、その故であろう。きわめて豫言的に、「中國に今日發生している問題は、どれか一つでも現在の社會制度のもとで解決できるであらうか。したがって、中國の社會革命は、どうしても免がれたいものだ」とか、没主體的に「中國には階級がないというものがいるが、わたしは認めない。小工、小農が無知蒙昧で（つまりマルクス主義の指導をうけていないということ）、窮乏慘苦を運命のせいと思つているからにすぎず、一旦階級の自覺が生まれれば、その氣餒は決して東歐西歐に劣らない」と述べるだけで、階級闘争やプロレタリア獨裁の原理が、どこでどう中國革命と結びつくかは、ほとんど明らかにされていない。

そのような蔡和森にとって、コミンテルンの存在は、中國革命の指針と意識される前に、プロレタリア世界革命の觀點を提供するものであつた。「コミンテルン、つまり世界革命の總機關は、プロレタリアートのきわめて徹底的な、きわめて眞實の、きわめて主義・戰略をそなえた眞の國際組織であり、氣勢のあがらないブルジョアジーの國際聯盟と眞向から對立している」⁽⁷⁾。われわれは、ベトナムの愛國者グエン・アイ・クオックが、當時同じくバリで活動し、徹頭徹尾、ベトナム民族主義の立場から、コミンテルンの諸テーゼをよみあさつた史實を知つて⁽⁸⁾いるが、蔡和森の場合にはこれとは若干異なる立場である。もちろん、かれとて、中國民族の解放を課題にしていることはたしかであるが、基本的な視點は常に國際共產主義運動、プロレタリア世界革命にすえられており、その高みから中國の革命を考察する立場をとつたといふことである。

周知の如く、『民族と植民地問題についてのテーゼ』が作成される段階で、後進諸國におけるブルジョア民主主義運動の評價をめぐつて、レーニンとロイとの間に論争があつた。レーニンが、抑壓民族と被抑壓民族を嚴密に區別したうえで、民族ブルジョアジーを民族解放運動の擔手たりうると評價したのに對し、ロイは後進國におけるブルジョアジーが封建階級と未分離の故に、外國帝國主義とも結合するという理由から、後進國に勃興しつつある二つの民族運動、すなわち民族ブルジョアジーのそれと、あらゆる搾取からの解放をもとめる無產農民、勞働者のそれとを區別し、コミンテルンが後者を援助するよう主

張したのである。その結果、レーニンの起草したテーゼと、ロイの「補足テーゼ」とが、それぞれ提出されることになった。^⑨
一九二一年二月十一日、すなわち二八闘争の半月ほど前に、蔡和森が『新青年』の陳獨秀に送った書簡を読むとき、われわれは、かれがロイに近い見解をいだいていたことを知りうる。

労働者の解放は、一地方、一國家、一民族の問題では決してなく、世界的な社會問題にはかならない。マルクスの社會主義は國際的社會主義であるから、われわれは決して地域的、民族的色彩をおびてはならない。中國の階級闘争は、國際的階級闘争である。中國には大ブルジョアジー（大中産階級）がないから、階級闘争を用いようがないというのは、もとより中國の國際上における經濟的地位を忘れ、外國の資本家がすでに中國プロレタリアートの主人になっていることを忘れてゐるのだ。また、中國の階級闘争は、最大多數の労働者の、自國の憐れむべき數人の資本家に對する闘争だということのも、やはり同じく、中國の國際上における經濟的地位を忘れ、やはり同じく、外國の資本家がすでに中國プロレタリアートの主人になっていることを忘れてゐるのだ。故に、わたしは、中國の階級闘争は國際的階級闘争にほかならないとみなすのだ。中國にすでに勃興している何人かの資本家と、まさに勃興しようとしている資本家階級は、五大強國の資本家階級の付屬物にすぎない。^⑩

蔡和森の所説では、中國のブルジョアジーが國際資本主義の付屬物になる媒介項としての封建階級への視點が缺落している點、また、帝國主義の相對的安定は、植民地からの超過利潤で本國の労働者階級の闘争を緩和することによるという指摘はあるものの、植民地、半植民地の闘争が、この帝國主義のメカニズムを破壊するもつとも重要な環となるという發想がない點、この二つの點で、自からロイとのへだたりはある。しかしながら、中國の現存のブルジョアジー、あるいは未來のブルジョアジーを、帝國主義の付屬物と斷定し、民族ブルジョアジーの解放闘争をまったくありえないものと否定したこと。および、中

國のプロレタリアートの革命闘争は、帝國主義との直接的な對峙という形態でしかありえないと指摘していることからみれば、その媒介項と意義付けを缺いているとはいへ、やはりロイに與する立場といえるだろう。

したがって、中國における黨建設も、決してこの觀點から離れるものではなく、プロレタリア世界革命の要請にこたえる質のものでなければならぬ。「世界の夫勢の赴くところからして、かくの如く幼稚な中國の民衆運動は、どうすればよいのか。わたしは、ロシアと一致した（原理でも方法でも一致した）黨を組織しなければ、民衆運動、勞働運動、改造運動は、有力となりえず、徹底しえないと思う」^①。二年以内に、ボルシェビキ式の黨を建設しなければならぬと主張する蔡和森は、中國革命の停滯が、世界革命の桎梏となることを何よりも恐れていたのである。

このように、世界革命の高みから中國革命をとらえていた蔡和森の思想に、われわれは容易に教條主義的缺陷を指摘することが出来る。民族ブルジョアジの役割を全面的に否定するかれの觀點からすれば、數年後に問題となる國共合作は、到底説明しきれない奇奇怪怪の現象ということになるであろう^②。その傾向は、おそらく、第二インターの帝國主義への投降に對して、當時ヨーロッパで展開されていたコミンテルン派の批判の論點を、一面的に受容し、しかもそれを中國の現實と結びつけることなく抽象的に、純粹培養的に發展させた結果といえるであろう。

しかし、ここでわれわれにとって重要なことは、蔡和森の教條主義を指摘することではない。それは、例えば國內の共產主義小組の機關誌『共產黨月刊』の諸論文にもみられるように、共產主義受容の初期においては避けがたい一つの傾向であり、實際の闘争の中でのみ克服されるものである。重要なことは、そうであるにもかかわらず、蔡和森が、中國での革命闘争をすすめるうえで必須の理論、すなわち帝國主義世界のメカニズムを解明する理論を確固として把握したことにある。しかも、その理論にもとづいて、プロレタリア獨裁の必須性と修正主義の罪惡性を早くから認識していた蔡和森は、かなり先驅的にボルシェビキ式の黨建設を主張した點と考え合わせるならば、たしかに勤工儉學生の中に出現した、最初のボルシェビスト、レーニン主義者と稱してさしつかえないであろう。

この突出したレーニン主義者は、モンタルジで、恒常的に共產主義のキャンペーンをくりひろげ、次第に多くの學友を自からの陣營にひきつけていった。丁守和、殷敘彝の考證によれば、一九二〇年七月上旬、新民學會フランス分會は、十三人の會員をモンタルジに召集し、「會務進行の方針——中國と世界の改造」という問題をめぐって、七日間に及ぶ討論をすすめた。⁽¹⁴⁾

この會議は、救國の方略をめぐってたたかわれたフランスでの論争としては、最初に文獻にあらわれるものである。論争の一方の雄であつた蕭瑜の回想によると、フランス人の好奇の眼をさけるために、この會議は、ピクニックをよそおつて、モンタルジの町外れの大きな森に出かけ、「ピロードのソファのように柔らかな草地」の上で、車座になつて開かれたといふ。⁽¹⁵⁾

争點は明瞭であつた。革命による救國か、改良による救國か、いずれの途を選ぶべきかが議論の的であつた。それは、基本的には當時國內で展開されていた社會主義論戰と同質の論争であつたといえる。蔡和森がきわめて明解に、すでに述べたような觀點から、ソ連の共產主義革命を全面的に主張したのに對し、蕭瑜をはじめとする「少數派」は、革命ではなく改良主義を要求した。「われわれの問題は目前のことではなく、わたしのみるところ、十年以内のことでもない。十年の内に東方にはなすべき大事はない」。中國に革命勃發の可能性を認めえない蕭瑜は、したがってゆるやかな改革しかイメージしえない。「われわれは、一部分の犠牲によつて多數人の福利にかえることを認めえない。溫和な革命——教育を以て工具とする革命、人民のために全體の福利をはかる革命——を主張し、勞働組合、合作社を革命實行の方法とする」⁽¹⁶⁾。蕭瑜の説く「教育革命論」は、ラッセルの來華以後、國內でもかなりの支持をえた議論であつたが、教育の可能性にまだ樂觀的であつた當時の勤工儉學生には、とりわけ説得力をもちえたであろう。蔡暢なども、後の回想で告白しているように、「私は當初は『教育救國會』の民族主義者たちに所屬していたが、しだいに社會主義綱領の正しさを信ずるようになった」⁽¹⁷⁾一人であつた。

革命救國と教育救國の論争は、これ以後もたえず再生するが、草の上の論争には、長沙の毛澤東が書簡を以て結着をつけた。長沙でも、ラッセルの講演をめぐって深刻な討論がなされ、その結果をふまえた毛澤東が、論斷を下したのである。「わたしには、ラッセルの主張に對して、『論理のうえでは言えることだが、實際上はできない』という評語がある。……教育には、

第一に金がいり、第二に人がいり、第三に機關がいる」。現在の世界では、すべての金が資本家の手ににぎられており、教育を行なう人は、資本家かさもなければ資本家の奴隷だ。學校と新聞社という、二つのもっとも主要な教育機關も、資本家の掌中にある。「要するに、現在の世界の教育は、資本主義の教育だ」⁽¹⁸⁾。

當然すぎるほど正しい毛澤東の書簡が、モンタルジにとどいた頃、當の蕭瑜は中佛教育會の仕事で一時歸國していた。しかし、蔡和森の方は、毛澤東の全面的な同意をえて、いよいよ主義の宣傳に情熱を傾けた。その功績は、論敵すら認めないわけにはいかなかった。「彼の共產主義に對する熱烈な信仰は人びとの間にひろがっていった。もう五十になる彼の母親や妹の蔡暢も、彼といっしょにフランスに来ていたが、彼のいうことを熱心に聞いていた」⁽¹⁹⁾。蔡和森の努力が、周圍の人々に共產主義の學習を促していた頃、一般的な勤工儉學生の間でも、それは抽象理論としてではなく、賛成すると否とにかかわらず自身と祖國の將來にかかわる重大な問題として、避けて通ることのできないものと意識されはじめていた。

すでに第三章でふれた盛成も、平均的勤工儉學生であつたといえるが、かれですら、身を粉にして一日働らいてもその日のパンを得るのがやつとの生活の中で、次第に資本主義社會の構造をおぼろげながら理解するようになった。かれは、自分の勤めていた木工場が突如休業した體驗から思索をめぐらす。ヨーロッパの工業は、利潤追求のためにのみ生産する。利潤のためならば、需要と供給の關係など無視し、日用必需品とは無縁の奢侈品の生産に利到する。すると、需要と供給のバランスがくずれ、休業が續出するが、資本家の方は、「工場の門を閉じ『休業』と貼りだせばしまい。かれは暴利を使いはたせば、再び別に工場を開く。そこで、労働者は技術があろうとなかろうと、同じ空腹をかかえることになる」⁽²⁰⁾。その結果、激烈な「階級奮闘」が造成されると、資本家は「實業團」^{トラス}を實行して安定をはかる。そして、資本組織が堅固なうえにも完備してくると、「われわれ東方の資本組織のない國家」に對して、經濟を用いて植民してくる。かれらは、二東三文でわれわれの米、麥、一切の糧食、布帛、「造屋の鐵、石、煉瓦、木材」を買いたたき、國內の市場をきりまわす。かれらは奢侈品を供給するが、それは「餓えても喰う米にもならず、凍えても着物にもならない」。かくして、中國社會は安寧の日とてない狀況になるが、か

れらは本末轉倒して「華人は内亂を好む」ときめつける。だが、ヨーロッパの資本制度は永遠に動搖しないだろうか。民衆が衣なく食なく住なき状況におこまれると、「階級奮闘」が激烈となり、「資本家は集中した産物を販賣できず、經濟は回轉できず、資本制度の末日が到來せんとしている」⁽²⁾。

ここに、われわれは非常に素朴な帝國主義論の展開をおえた。その素朴さは、蔡和森の前衛的な修正主義批判とは、ほとんど天地の差がある。仕事を終えた後、夜に『資本論』と『叛逆者の言葉』『パンの略取』を專讀したという盛成のちぐはぐさは、蔡和森からみれば、クロポトキンの信奉者でありながら『共產黨宣言』の翻譯を手がけた清末の辮髪をつけた無政府主義者が、五四の新時代に再び現われたぐらいの驚きであっただろう。にもかかわらず、遠くフランスにあつての勤工儉學生活の體驗と、軍閥戦争にあけくれる祖國の慘狀とを、必死に因果關係で結びつけようとしている眞摯な姿を、われわれはこの盛成に認めておくべきである。

一九二〇年末、蔡元培に同行してきた北京大學の張松年（申府）は、「留佛勤工儉學生の中にはマルクスを信奉する者が多いが、必ずしも、ほんとうに理解し、革命でなければだめだとはんとうに考え、生命を賭してもよいと思つてゐるわけではない」と批判する書簡を、陳獨秀に寄せた。この批判は、おそらく一面では、當時の勤工儉學生の思想狀況を傳えているであろう。もつとも、當のご本人が、同じ書簡の後半で、革命と勞農專政（これは美名にすぎず、「開明專政」が實質であるというのかれの意見である）を中國改造の程序だと主張しながら、その直後でラッセル、デューイを科學方法を理解している哲學家と稱賛してやまない爲體であるから、勤工儉學生のマルクス主義理解の淺薄さを批判する資格が、どれほどあるかは疑問ではある。むしろ、張松年自身の思想的混亂に如實に現われているのと同じく、勤工儉學生の間でも、なおマルクス主義が絶對的な優位をしめていたわけではないということの證左として、この書簡を讀んでおこう。

二八闘争の頃に、モンタルジの蔡和森、王若飛らが、勤工儉學生の利益を擁護し、社會主義を研究するために組織した團體においても、事情は同じであつた。この團體は、ふつう「工學互助社」と稱するが、人ごとに呼び方が異なり、工學互助組、

工讀互助團、はなはだしきに至つては勵志會と稱されることもある。この會員であつた蕭三（蕭瑜の弟）は、その結成時の模様を、次のように傳えている。

一九二一年、フランス、モンタルジ地方のとある公立學校の教室に、机と椅子が四方形に並べられた。ここに數十人の留佛勤工儉學生が集合した。教室の戸棚や壁には、長い長い紙に本人のゴツゴツした字でぎっしり書かれた蔡和森同志翻譯の『共產黨宣言』等々が、一枚一枚つなぎ合わせて貼つてあつた。會場にはいると、みんなまわりによつて讀んだ。しばらくしてみんなが席につくと、開會した。蔡和森、向警予、羅邁（すなわち李維漢）、羅學瓚、張昆弟、李富春、袁子貞が……ともに發言した。和森同志の話がもつとも長く、また回数も多かつた。數日後、『工學互助社』が組織された。⁽²³⁾

何長工の回憶によつていま少し補足すると、この團體は二八闘争以前に成立した模様で、團體の性質としては、「一方でつとめて自己救済をはかるとともに、他方では社會主義研究に従事する」ものであつた。その規約の第一條には、「社會革命の實行を主旨とする」と明記されていたのであるが、その社會革命をいかなる方法で實行するかをめぐつては、深刻な意見の對立があつた。それは互いに團結もすれば闘争もする團體で、主要にはマルクス主義派と無政府主義派の理論闘争が對立の軸であつた。自身も成立大會に参加した郭春濤は次のような記録をのこしている。

工學社が成立大會を開いたとき、ある者は無政府主義を採用して中國を改造することを主張し、ある者はマルクス主義を採用して中國を改造することを主張した。當時後者の路線を歩むことを主張したのは、若飛と和森であつた。若飛は滔滔たる雄辯で群雄と辯戦し、和森の方は『馬克思主義與中國』という洋洋數萬言の文章を、會場の壁面に貼つて宣傳した。前者の路線を主張する者にも、少なからず有力分子がいた。當時、二つの路線の論争は、たがいに一步も譲らず、あやう

く流會になりかけたが、間に和森の夫人、向警予が調停にはいり、二つの主張は、しばらく決着をつけず、次回の大會まで保留し、討論、解決するという⁽²⁵⁾ことで、ようやく圓滿に會が成立した。

この緊迫した成立大會の情景は、蔡暢と何長工も回憶に記しているが、かれらの記述では向警予よりも王若飛の役割を高く評價し、「ゴム工場で働らいていた王若飛同志」が、流會の瀬戸際に立ちあがって、「われわれはソビエトロシアの労働者の道を歩まなければならない」という鮮明このうえないスローガンを叫び、多くの會員の心をとらえたという⁽²⁶⁾。ともあれ、成立の時点から波瀾づくみではあったが、「社會革命の實行」を最低限綱領として、工學互助社は勤工儉學生の前衛的存在となった。郭春濤によると、最初四十數名で發足したこの團體は、やがて三百餘名の會員を擁し、「留佛學生中の愛國的積極分子」をほとんど吸収するに至った。この數を蔡暢はもう少し控え目に二百名餘りとしているが、その構成は、ほぼ三派に分れ、社會主義派、アナキズム派および社會民主派で、しかも確實に三分の一はアナキズム派であったという⁽²⁷⁾。

こうして成立した工學互助社は、勤工儉學生の先頭になつて、二八鬭争、中佛祕密借款反對鬭争、リヨン進軍という一連の鬭争をもつとも果敢にたたかった。相繼ぐ鬭争は、内部矛盾をも激化させ、マルクス主義派と無政府主義派その他との世界觀の隔りは、埋めがたい龜裂を生じていった。その過程で、かれらの間にどのような論争がたたかわされたかということは、非常に興味深い問題であるが、われわれはその一端をうかがうすべしかもない。

「勤工儉學運動」そのものの意義についてたたかわされた論争でも、兩者の世界觀の相違は明白であつた。無政府主義者たちの考えでは、「勤工儉學は、終身にわたつて實行できる『主義』である。これはフランスで實行できるばかりでなく、中國いやもつと廣く全世界でも實行できる⁽²⁸⁾」というのである。無政府主義者にとって、勤工儉學は、工讀互助運動などと同じく、無政府の世界を造りだす重要な實踐活動の第一歩と意識されていた。全世界の人々が働らきつつ勉學する勤工儉學の生活をおくるようになれば、その時世界は、肉體労働と頭腦労働の乖離が止揚され、階級のない理想社會にかわるであろう。勤工儉學

主義は、その理想社會に到る「主義」として、現在の社會でも實行できるし、また實行しなければならないというのである。

これに對して、マルクス主義者たちは、過去のあらゆるユートピア思想と同じく、それは幻想にすぎないと考えた。「勤工儉學は『手段』であり、貧乏學生が暫時これにかりて、フランスの革命思想と生活技能を學習し、歸國して革命する準備をする臨時的な辦法にすぎない。資本主義制度のもとでは『勤工』は資本家が剩餘價值を増加させるのをたすけることにほかならず、資本主義制度の殘酷な搾取のもとでは、廣く『儉學』をおしすすめることは、一層不可能なことである⁽²⁰⁾」。すでにみた如く、王若飛は、サンシャモンの鐵鋼工場での労働經驗から、現代の資本主義社會では勤工儉學は實現できない理想にすぎないことを悟っていたのであるが、この認識は、同じく労働經驗をもつ勤工儉學生にとつても、共通の認識になっていたのである。それは、國內で工讀互助運動が數ヶ月にして、ことごとく破綻をきたし、マルクス主義的な觀點から、資本主義社會で部分的なユートピアの建設を試みても無意味である、との總括がなされたのと、同質の體験的な結論であつた。そのうえに、フランスでは、リヨン進軍の敗北によつて、現代の社會における教育が、すべて支配階級に奉仕するためのものであるという認識が、勤工儉學生の間に深く浸透していたのである。

したがつて、マルクス主義派の勤工儉學觀は、ともに労働し眞剣に闘かつた勤工儉學生には、當然支持をえたが、「金のある學生と無政府主義に傾いていた者」は、やはり前者の説を支持した。かくて、勤工儉學運動そのものの意義付けすら、まったく相對立するに至ったとき、われわれはもはや、かれらを一括して「勤工儉學生」とよぶことにためらいを感じる。リヨン進軍を以て、われわれは「フランス勤工儉學運動の終焉」とみなしたが、それは同時に、さまざまな思想をいだいた勤工儉學生の結集體であつた工學互助社の分裂と終焉をも意味していた。

共產主義派、無政府主義派そして社民派の各派は、それぞれ團體を組織し、激しい理論闘争を展開した。共產主義派は、リヨン大學闘争を先頭にたつて闘かつただけに、もつとも尖鋭的な理論家蔡和森をはじめ、多くの優秀な分子が強制送還のうき目にあい、一時勢力は半減したが、その後、周恩來、趙世炎、王若飛らの指導のもとに、態勢をたてなおし、理論面でも活動

面でも他派を壓倒していった。そしてついには、蔡和森が夢みたボルシェビキ式の黨をフランスの地に建設することになるが、この共產主義組織については次節で詳述するのいまはふれず、以下、他派との論争に重點をおいて敘述をすすめていく。

無政府主義派は、蔡暢の回憶にあったように、工学互助社の中でも、ほぼ共產主義派に匹敵する勢力を有していた。一方では、辛亥革命以前から、李煜瀛、吳敬恆らによってフランスに無政府主義組織が結成されていたという傳統があり、しかも「勤工儉學」という理念自體が無政府主義の主張に結びつきやすかったという事情が、その傾向を助長したといえる。後に共產主義組織のメンバーになった人々でも、その影響をうけていた者は、相當數にのぼった。蔡暢の言によれば、書報流通社を營んでいた陳延年、陳喬年兄弟や李立三なども、最初はアナキズムの影響にそまっていたという。

かれらが、その中核組織として「工餘社」を結成したのは、リヨン進軍後まもなく、おそらく一九二一年末のことと思われる。吳敬恆によってリヨン中佛大學におくりこまれた區聲白らのアナキストグループが、その成立にどのように關與したかは、いまのところ詳らかではない。主要メンバーに、陳延年、陳喬年、李卓、華林の四名を擧げている記録があるが、前二者については後述する少年共產黨の創立時期とかね合わせて考えると、眞偽のほどはさだかでない。李卓、華林はいずれも中佛教育會の關係者で、特に華林は留佛儉學會以來、李煜瀛のもとで働らき、リヨン中佛大學にも入學した人物であるから、工餘社が李煜瀛、吳敬恆の非常につよい影響下にあったであろうことは、容易に推測できる。

工餘社の活動は、一般的な勤工儉學生からも、「無政府黨は、人數こそ數十人もいるが、多數はプチブル特待生の生活をすごし、革命の要求はきわめて少なく、としこもつてぺちやくちややるだけで、まったくなにもしていない。ただ、口談主義を無聊の慰めにしてにすぎない」と批判された如く、ほとんど出版活動に終始し、華工のオルグなどにはきわめて不熱心であった。その機關誌『工餘』は、一九二二年一月十五日に創刊された。この雑誌は、日本國內では一號分しか見あたらないが、『五四時期期刊介紹』第三集の内容紹介と『少年』の批判論文中に引用されている斷片から、その概要はうかがうことができる。

ロシア十月革命が歴史のうえで現實のものとなるまでは、アナキストたちは自己の夢想するユートピアを白紙の上に自由に

描くことができた。しかし、ロシアの地にマルクス主義にもとづく勞農政權が樹立されるに至り、アナキストは、ユートピアに遊んでばかりはいられなくなった。プロレタリア獨裁——ソビエト政權のもとで、同志たちの運命がいかなる末路をたどったかを眼のあたりにして、かれらは自からの將來に戦慄を覺えた。かれらの主要な關心は、一致してプロレタリア獨裁の非を論證し、「勞農ソビエトのいまわしい實態」を喧傳することに向けられた。しかし、そこで援用されるのは、あいかわらずブルードン以來の國家論であつた。

國家は從來——將來も——個人をしいたげ、大衆の幸福を破壊するとともに、つねに不正義の歸結であつた。したがつて、無政府主義者は國家に存在の可能性があることを認めない。人類の幸福という點から考えれば、どうしても種種の革命的⁽³²⁾方法を用いて、國家を破壊しなければならない。

國家が萬惡の根源であるとなみなすアナキストにとって、勞農政權も同罪にとわれるべき存在である。「無政府主義者は、いかなる形式でも、強權を有する國家に反對する。すなわち、資本主義の國家、軍國主義の國家、ブルジョアジーの國家および『プロレタリア獨裁』の國家、すべてに反對するということだ」。これが、『工餘』の基本的な主張のすべてであつた。あとは、ソビエトロシアのさまざまな「弊害」を實例としてもちだし、この理論を潤色するだけであつた。包朴や黃凌霜の「赤露」實見記ともいふべき通信が、『工餘』に掲載され、ソビエト政權が民衆の支持をえていないことをくりかえし説いた。「余、ロシアに在ること半年、共產黨を除くの外、相與に接近せる平民、百分の九十九は、ともに勞農政府への不賛成を表示せり」。⁽³³⁾ロシア革命の成果を否定する觀點を獲得したうえは、内外のありとあらゆる反共宣傳、デマがかれらの材料となりえた。かれらはうむことなく、それらを翻譯しては『工餘』の誌面をうめた。

これに對する共產主義者の反論は直截であつた。ブルジョア獨裁とプロレタリア獨裁を同列において否定するアナキストに

對し、「一個無政府黨人と一個共產黨人の談話」の筆者尹寛は、「科學的研究もなければ、歴史的常識もなく、時間、空間の觀念もない。したがって、きみは社會進化の概念もなく、あらゆる社會の眞の關係がきみにはみえず、あらゆる流動する變化が、きみの眼には死んだひとかたまりのものとして現われる」と、唯物辯證法の原則をふりかざして、その非科學性を糾弾した。尹寛の論證は、ほとんど『國家と革命』の章句を逐條的に列挙するという方法で進められているものの、第三章第二節までをカバーしているその章句は、マルクス以來のプロレタリア獨裁の原理を大約うかがえるように構成されており、アナキズム批判にとどまらず、共產主義の初心者にもプロレタリア獨裁のABCを教えさす効果があつたと思われる。因みに、中國國內では、一九二一年五月七日發行の『共產黨月刊』第四號が、『國家と革命』の初譯を掲載したが、これは第一章第一、二節だけの譯にすぎず、完譯は一九二七年まで待たねばならない。

尹寛の論文は、プロレタリア獨裁の問題ばかりでなく、階級闘争、政治運動、共產黨の役割などの項目をたてて、『工餘』の議論に對して逐一批判を加えている。残念ながら、それらすべてを読むことができるわけではないが、おそらくプロ獨裁の時と同様、マルクス、レーニン主義の原典を繙いて有效な批判を展開するという手順がふまれたであろう。その副産物として、『フランスの内亂』の一部分、エンゲルスの「權威原理について」などの原典の翻譯が『少年』に掲載され、プロ獨裁に對する認識はさらに高まった。尹寛が原理的な面からアナキズム批判を展開していた間に、周恩來は實際的な問題を取りあげ、アナキストの非現實性、空洞性を批判した。フランスにおける代表論文「共產主義與中國」に、次のように述べる。

無政府主義は中國ですでに十年以上の歴史をもっている。それは中國人の惰性と忍容を利用して、ついに思想の墮落している者ときつても切れぬ縁を結んだ。かれらは科學を提唱した人間と自任しているが、實際は空想的藝術を高談し、眞・善・美といった名詞を高談できるだけで、現實に實業開發の方法ということになると、大規模生産の破壊と、集中制度に反對すること以外、おそらく何ら具體的な主義はあるまい。……無政府主義はかくも無内容であるからこそ、無政府

思想をもつ蔡元培、無政府黨人を自認する李石曾、吳稚暉の輩は、一たび當面の政治經濟問題にでくわすと、あわてふためいて、無政府主義と相反する主張をひっぱりだすぐらいしかできない。⁽³⁸⁾

無政府主義が「中國ですでに十年以上の歴史」をもっているというのは、おそらく辛亥後の劉師復を意識しているのであろう。また、周恩來がここでいう「實業開發」とは、決して當時流行した實業救國論の意味ではない。同じ論文で、「共產主義が實業發展の方法である」と斷言していることから明らかである。周恩來のオールドアナキストに對する批判は、リヨン中佛大學をめぐるかれらが帝國主義、軍閥と癒着した實態を目撃したあとだけに、峻烈である。理論の面でも、人間の面でも、工餘派は、共產主義派の攻撃の前に、退却をよぎなくされた。さらに任卓宣は、「甚麼は無政府黨人底道德？」を發表して、微に入り細にわたり、アナキストの實態をあげた。ここでは、時髦、粉飾、崇拜、自是、謾罵、誣枉、挑唆、棄信、扯^で誑、作偽、反工人、自私、自利、有産階級化の十三項目をたて、それぞれ實例をあげて、かれらの反共の罵詈雑言がまったくナンセンスであることを詳述している。⁽³⁹⁾しかし、尹寬、周恩來の場合と異なり、アナキストの土俵にのったかたちの非難の應酬におわっているこの文章は、ゴシップ的な興味はひくものの、論敵の醜惡さにひきずられた低次元の段階にとどまっている。これは、アナキストの謾罵に對しては、「暫時これを無理に置き、その自生自滅に聽すだけ⁽⁴⁰⁾」という『少年』の基本方針に反するが、逆にいえば、もはや無理に置けぬほど工餘派のデマ、中傷がひどくなったことを反映しているのかもしれない。

かくして、フランスにおけるアナボル論争は、一方ではマルクス主義者のプロ獨裁に對する認識を深める成果をもたらしたものの、他方では消耗な水かけ論の様相も示しながら、結局は、マルクス主義者の壓勝を以て終った。その後、アナキストがどの程度勢力を保持していたかは別として、工餘派の凋落は、遅くとも一九二三年末までには決定的になったものと思われる。⁽⁴¹⁾『工餘』雑誌のフランスでの發行は、現存するものにかぎっていえば、一九二三年七月の第十九號を以て終っている。その後、一九二四年になると、印刷所を上海に移し、ガリ版から活版に改たためて發行を續けたが、第三年第二號（一九二四年九月發行）

通卷で第二十三號に當るか？を以て停刊に至り、翌年上海のアナキズム雜誌『自由人』に合併された。⁽⁴²⁾ 第三年第二號卷頭の「啓事」は、活版化による出費の増加を理由にカンパを訴えているが、その中で「フランスで工作していた同志は、最近勞働を離れて勉學に入る者が多く、収入がないうえに出費がかさむので、ひきつづき巨額の資金を出すことがむづかしくなった」⁽⁴³⁾と事情を説明している。しかし、要は資金の不足より情熱の枯渇が、停刊においてこんだとみるべきであろう。

一方、社民派については、われわれはほとんど記録をもっていない。從來、曾琦の日記の一九二四年六月九日の條に、「健社」なる團體の名稱がみえ、その幹事である潘某が中國青年黨との連帶を申し出たという記事があったが、⁽⁴⁴⁾ そもそも健社がどういう性質の團體かということさえ不明であった。ところが、『少年』に掲載されている任卓宣「健社綱領草案批評」によると、この綱領草案の主張が、社會民主主義（すなわち社會民主主義）にはかならないと指摘されており、はじめてわれわれは、社民派もまた一つの團體を組織していたことを知りえたのである。任卓宣は草案を逐條的に舉げて批判しているが、そこから草案原文だけをひろいあげていけば、健社の性質をほぼ理解できるであろう。

まず、健社の中國の現状に對する認識は、こうである。「民國以來の政權はすべて軍閥が操縦してきた。……中國の社會はかくも暗黒で、社會の危亡は免れないところであつてみれば、個人の生活にどうして幸いがありえよう」。では、かかる中國の暗黒はどうすれば救われるのか。革命が必要であろうか。かれらの認識では、「中國の現在の文化、政治、經濟の狀況は、ともにまだ大改革の程度に達していない」。したがつて、現在は「工業などの物質能力の進歩……をまつて、しかる後にはじめて大改革の機會ができる」段階にすぎず、まず生産力の増大が先決である。しかしながら、「階級を醸成する病源は、完全に資本主義生産の制度による」のであり、「近世の社會は、このような經濟の進化が、人類を有産と無産の兩階級に分けた」のであるから、中國でも「もし、法を設けて預防しなければ、將來必ず歐米の現在の現象に達するであろう」。かかる資本主義の弊害を回避しつつ、資本主義生産を増大させるためにこそ、自分たちが議會内で多數を占めることが必要である。「政途に挿入し政權を掌握しなければ、私有生産を社會生産に變える目的も實行できない」というわけである。改良的手段によつて

生産力の増大をはかろうとするかれらには、當然、階級闘争やプロレタリア獨裁の意味も理解できない。「われわれの主張は、無産階級を將來、特權をもつ新貴族にならせた⁽⁴⁵⁾のではなく、資本階級と、特權をもつ各種の階級を廢絶することを期するだけである」。

資本主義の弊害を回避しつつ、階級調和のもとに生産の増大をはかる、という健社の主張は、社會民主主義というよりもブルジョア社會主義に近く、まぎれもなく梁啓超、張東蓀など研究系の政客が唱えていた改良主義と一丘の貉であつたといわなければならない。研究系の小頭目の一人、張君勵は、一九一九年から二二年まで、ドイツでオイケンの觀念論哲學を學んでいたが、たびたびフランスに足をはこんでいた模様で、おそらくはかれの影響が健社の主張にかなり及んでいたのであろう。ほかでもなく、「健社綱領草案」の最初は、「多數の人はどのようにして團結するのか。蓋し、人類には各々良知があつて、凡そ良知から發した自己の意見は、必ず多數の人の同意を得ることができる。團體の成立は、すなわち各個人の良知に本づく⁽⁴⁶⁾」と⁽⁴⁶⁾うたっている。良知説という觀念論を組織原則とする健社は、蔡和森がブルジョア觀念論と批判した社會民主主義の、まちが⁽⁴⁶⁾いなくもつとも出來の悪い末流であつた。われわれは、この團體がどれほどの會員を有し、いかなる活動をしていたかはまったく知らない。だが、綱領草案をみただけで、その末路がいかなるものかは、ほぼ察しがつく。かれらの綱領で、唯一、本心を語っているところは、中國が文化、經濟、政治いづれの面でも、まだ「大改革の程度」に達していないという一句だけであり、社會主義革命に反對することこそが、かれらの唯一の目的であつた。

かくして、フランスにおける社會主義論戰は、無政府主義派、社民派の反革命性を餘すことなく暴露して幕をとじた。

二、中國共產黨旅歐總支部

共產主義組織の必要性については、すでに一九二〇年中頃に、突出したレーニン主義者蔡和森が痛感していた。それは、國內の共產主義小組のような知識人のサークルではなく、ボルシェビキ式の「集權の組織」と「鐵の規律」をもった労働者の黨

でなければならない。「いま國內でこれを組織するには、祕密でなければならない。烏合の衆ではだめであり、工業界を離れてはだめであり、ブルジョアジーの文化運動ではだめである」⁽⁴⁷⁾。しかし、蔡和森が實際に組織したのは、無政府主義者、社會民主主義者までもふくめた勤工儉學生のサークル活動にすぎなかった。皮肉にも、かれが夢みたボルシェビキ式の黨は、かれ自身が犠牲となつてきり開いたリヨン進軍の教訓によつて、現實の課題となつた。

フランスにおける中國人の共產主義組織をめぐつては、從來、多くの誤まつた説が流布し混亂をまねいていたが、その整理、檢討については別稿を用意することにして、ここでは、最近の周恩來總理記念事業の成果として紹介されたいいくつかの新資料にもとづき、共產主義組織成立の經過を明らかにする。

何長工によると、「一九二一年」まもなく冬だというころ、高風と毛羽順とが手紙を突然くれて、王若飛、趙世炎、陳延年などの同志が、パリで社會主義青年團(S. Y.)をつくる準備をしているが、わたしに参加するかどうか、といつてきた⁽⁴⁸⁾という。社會主義青年團という名稱は正しくないが、いづれにしても、リヨン進軍の敗北後まもなく、工學互助社の共產主義派であつた王若飛、趙世炎と書報流通社の陳延年などが中心になつて、共產主義組織の結成に着手していたわけである。一方、リヨン進軍の指揮をパリでとつた周恩來も、その敗北の總括から、共產主義組織の必要性を痛感し、ともにフランスに来ていた覺悟社の社員と、「何回もの討論をへて、一九二一年十月以後になつてやつと正式に決定した」⁽⁴⁹⁾のである。

胡華が周恩來執筆の「旅歐中國共產主義青年團報告(第一號)」によつて明らかにしているところでは、一九二一年末、周恩來は趙世炎、陳延年とともに、「中國少年共產黨」を「發起組織」し、半年後の一九二二年六月「旅歐中國少年共產黨」の成立大會をパリで開催したという⁽⁵⁰⁾。フランスにおける最初の共產主義組織が「中國少年共產黨」と命名されたことについて、その中核であつた趙世炎が四川の出身であるところから、吳玉章、楊闇公らが中國共產黨と別個に四川で組織した「中國青年共產黨」に呼應したのであらうと説く論者もいるが、眞偽のほどは定かでない⁽⁵²⁾。しかし、胡華の説くところでは、中國少年共產黨は、成立のときから、「積極的に國內と聯系を建立」しようとしていたというから、國內の黨中央と連絡がつくまで、暫定

的に「少年」をつけて「中國共產黨」を僭稱するのを避けたとみておくべきであろう。

以上の経過を示す傍證資料として、われわれは、一九二二年十月二十七日付『天津益世報』の「巴黎中國共產黨之活動情形」と題するフランス報告に注目しなければならない。マルセイユ―上海間、約二ヶ月の通信事情から考えると、遅くとも一九二二年八月以前の情形とうけとつてさしつかえないであろう。

聞く、趙「世炎」等（勤工儉學生の一）、すでに正式に廣州の任命をうけ、歐洲の會務を總理せり。かつ、時に廣州の接濟を得たり。所以に、近來かれらは、並びに作工せず、しかも經濟は非常に活動せり。かつ、時に外國人のかれの寓所に入出入するあり。在佛の以前の各種黨派、工讀社、覺悟社、無産階級共產黨、華工會の如き、すでに合して一となり、名づけて（留歐中國共產黨青年團）という。このいくつかの部分は、もと總數四、五百人あり。のち許多の人が意見の合わざるを以て退出する者、半數有るあり。但、いま確確實實に、すでに黨員二、三百あり。若輩は、毎星期、必ず聚會あり。人人、趙等の指揮をうけ、趙もまた國內の指揮をうけ、毎月報告すること一次。黨綱は非常に嚴酷にして、服従の二字を以て信條となす。

全體の文面は共產主義組織に對して非好意的であり、しかも「すべて、苦困の同學は、まさに盡くかれらの網羅中の物となり、これに收買され、これに利用され、まさにすべて赤化に歸さんとす」ということばがあるところから考えれば、反共產主義者の報告であるにちがいない。したがって、その内部事情に暗いばかりでなく、意識的な歪曲が施こされていることも十分考えられるが、少なくとも中國少年共產黨が、八月以前に在佛中國人の間で廣く知られる存在になっていたことは確認できる。より重要なのは、ここに中國少年共產黨の組織母體がはっきりと述べられていることである。工讀社は、いうまでもなく工學互助社であり、覺悟社は、周恩來をはじめ天津からの留學生の組織である。無産階級共產黨については、現在のところわれわ

れは無知であるが、華工會の名をみいだすことによつて、すでに労働者をも吸収した組織であつたことがわかる。しかも、興味をひくのは、それらの團體が合併して、中國少年共產黨を結成したときに、半數が脱退してしまつたことである。工學互助社などの無政府主義派、社民派が分裂した結果にほかならない。

この報告で不審なことは、中國少年共產黨がすでに廣州と正式の關係を樹立し、資金援助までうけていたという指摘である。おそらくこれは、單なる風聞にすぎず、事實ではあるまい。「旅歐中國共產主義青年團報告（第一號）」によれば、フランスの共產主義組織が國內の黨中央、團中央と正式の關係を樹立するのは、一九二二年末から二三年初にかけてのことである。一九二二年十一月二十日、フランスの共產主義組織は、「旅歐中國少年共產黨」の名義で、中國社會主義青年團の「旅歐之部」として承認されたいとの公式書簡と、團中央への「建議三事」を作成し、李維漢（羅邁）にこれを携え歸國させた。⁽⁵⁴⁾ 李維漢は、單なるメッセンジャーボーイではなく、旅歐少共の代表として、團中央との折衝に當ることを委任されていた。ところが、このルートが通じる前に、コミンテルンへ派遣された中國代表團との間に通信連絡がつき、翌二三年一月、代表團から旅歐少共へ書簡がとどいた。その中で、代表團は、「旅歐少年共產黨」の名稱を「中國共產主義青年團旅歐之部」と改めること、その名稱組織のもとに、旅歐少共の「中央執行委員會」を「執行委員會」に改めることを希望するとともに、旅歐少共の中國社會主義青年團綱領に對する誤解を指摘し、ヨーロッパでの活動方針を指示した。⁽⁵⁵⁾

その後、李維漢のルートがいかなる役割をはたしたかは、まったく不明であるが、一九二三年二月十七日二十日にパリで開催された旅歐少共の臨時代表大會⁽⁵⁶⁾では、ほぼコミンテルンの中國代表團が指示した方針にそつて、改組の決定がなされた。第一の決定は、「旅歐中國少年共產黨」の名稱を、「旅歐中國共產主義青年團（中國社會主義青年團旅歐之部）」と改めたことである。二つの名稱が併記されているのは、いかにも奇妙であるが、理由はおそらくヨーロッパでの活動ということを考慮してのことであろう。國內の中國社會主義青年團が中國共產主義青年團と改稱するのは、一九二五年一月上海での社青團三全大會においてである。その時の理由は、ヨーロッパでは、社會主義青年團は第二インター系の青年團體の名稱で、コミンテルン

系の青年團體は共產主義青年團の名稱を使用しているということであつた。フランスの共產主義組織が敢えて「旅歐中國共產主義青年團」を正式の名稱としたのは、ヨーロッパにおけるその事情を、より痛切にわきまえていたからと思われる。しかし、それだけでは、國內の團中央との關係が曖昧になるということとで、「中國社會主義青年團旅歐之部」の名稱も併記したと考えるのが妥當であろう。いずれにしても、この決定で、中國社會主義青年團のヨーロッパ支部であることが鮮明にされたのである。

第二の決定は、一九二二年五月の社青團一大會で可決された「中國社會主義青年團章程」に準じて、「旅歐中國共產主義青年團章程」を定めたことである。もちろん、ヨーロッパ支部という特殊條件から、個々の條項まで全く同じというわけではないが、精神、形式の上では團中央の章程を遵守しようとしている。その内容を検討していくと、まず、第一章團員、第二章組織、第三章紀律と續いていく章だては國內とかわらない。第一章團員では、第一條で團員資格が記され、四つの條件が示されているが、第一には、「共產主義に對してすでに信仰があること」、第二は、本團の綱領及び章程を承認すること、第三は、「絶対に宗教を信奉しないこと」、第四は、「團員二人の紹介と保證及び本團執行委員會の通過をうること」となっている。第二、第四は國內のにもある規定であるが、第一、第三、とくに第三は、獨特である。おそらくは、勤工儉學生や華工の間に浸透していたYMCAの影響を慮つての規定であろう。第二條では、「國內の團員、その旅歐期間には、入りて本團團員と爲ることを得」と特に明記され、第三條では登記方法、第四條では團費が定められている。

第二章組織にはいると、「第五條、本團は旅歐全體團員を集合してこれを組成す」はことなるものの、代表大會で執行委員會委員五人―任期一年及び候補委員三人を選出し(第六條)、執行委員會で書記一人を互選し、事務を總理する(第七條)という組織方法は、國內とまったく同じである。また、國內では中央執行委員會の下に、書記部、經濟部、宣傳部を設けたが、旅歐支部では執行委員會の下に書記部のみを設け(第八條)、その代りに共產主義研究會を設けて團員全員の加入研究を義務づけ(第九條)、さらに「旅歐の特殊任務を増強」するために、學生運動委員會、華工運動委員會、出版委員會を設け、團員全員

が一つ以上に加入することを義務づけた（第十條）。第十一、十三條では、ヨーロッパ各地の地方會について規定されている。次に、第三章紀律にうつると、第十四條で「中國社會主義青年團中央執行委員會を本團の上級機關となす」、第十五條で、「本團の代表大會を本團の最高機關となす」と定められた。⁽⁵⁸⁾ 章程においても、ヨーロッパでの特殊任務を保留しつつ、團中央の下部組織であることを宣明したわけである。そして、この章程にもとづき、周恩來が書記に選出された。この時点で、すでに團中央の承認をうけていたかどうかは別にして、旅歐之部の側がなすべき手續は、完了したとみなしてよいだろう。

「中國人共產主義者の示威行動」と題する一件文書の中に、このようにして成立した旅歐中國共產主義青年團の性格を的確に傳えている文書がある。

正直に言おう、それが眞實なのだから。ヨーロッパ全般、殊にフランスに滞在している中國青年の中核は、旅歐中國共產主義青年團である。それは、その力をその堅固な組織とその嚴格な規律に負うている。他のものは凝集を缺いた寄せ集めにすぎない。そのグループは、一九二二年六月三日に結成された。それは最初、中國少年共產黨と呼ばれたが、ついで、それに先立って結成されていた中國社會主義青年團と對をなす現在の名稱を採用した。それは最初、五十一名を數えるにすぎなかったが、現在では綱の目の如く、中國國民全體をカバーする、中國全土の各省出身の三百名以上がいる。これらの青年たちは、空虚な政治的夢想をしているのではないと私は斷言する。彼らは中國プロレタリアートを一齊に起ち上らせることのみを目標として⁽⁵⁹⁾いる。

堅固な組織と嚴格な規律で、プロレタリアートの蜂起をめざす旅歐中國共產主義青年團は、まさしく蔡和森の唱えたボルシエビキ的組織である。しかも、その數三百以上というのは、五千人前後といわれた當時の在佛中國人の數⁽⁶⁰⁾からいえば、一大勢力であったとみなしてさしつかえない。

旅歐中國共產主義青年團の活動は、章程の中にも明記されているように、華工運動、學生運動、出版活動が三本柱であった。中でも、華工へのオルグ活動は、プロレタリアートとの結合をめざす共青團にとって、最も主要な任務であったと考えられる。一時、十五萬を數えた參戰華工も、大戰の終結とともに強制的に歸國させられる者が相繼ぎ、一九二三年頃には三千人を餘すのみとなつていた。⁽⁶¹⁾しかし、在佛中國人の中では、依然として最大の勢力であり、しかも帝國主義戰爭の被害者であるかれらは、政治的意識もかなり高かつた。パリ講和會議のとき、中國公使館を包圍して、陸徵祥、王正廷らの中國代表團が調印に赴くのを阻止した事件は、華工の最初の政治運動であつた。また、勤工儉學生と肩をならべて、中佛祕密大借款反對闘争をたたかつたことは、記憶に新しいところである。近代産業の集中した労働者となり、フランスの各地に分散しているという缺點はもつものの、華工は共青團の優秀な分子となりうる存在であつた。

華工の組織化は比較的早く、一九一六年に「旅法華工公會」という、労働組合というよりは互助組合的な組織がつくられた。その後、すでに第一章でみた如く、中佛教育會とYMCAが、華工へのオルグ合戦を演じ、一九一九年に、前者は「華工總會」(會長潘正東)、後者は「旅佛華工工團」(團長張伯遼)を組織して對立した。⁽⁶³⁾しかし、事情は詳らかにしないが、一九二〇年一月に至り、両者が合體して「旅佛華工會」となつた。評議部の議長潘正東、⁽⁶⁴⁾副議長馬致遠、書記謝壽康という顔ぶれは、中佛教育會系が優位を占めた感を與える。華工會は、フランス全土を五十四區に分け、それぞれ分會を設けた。華工會の活動では、華工の待遇改善が、フランス政府當局を相手にたたかわれた。それまで、殘留華工は戦後にもかかわらず、フランス陸軍省の管轄下におかれ、虐待されるにまかされていた。時の總理クレマンソーに、待遇改善と自由人になることを直接請願した華工會に對し、陸軍省は、議長潘正東に罪名をデッチあげて、一ヶ月餘り陸軍監獄に監禁し、彈壓にかかつた。フランス下院議員ムーテ(Moutet)と張繼の盡力で、一九二〇年三月三十一日、潘正東は釋放されたが、在佛中國人の怒りはおさまらず、四月六日にパリ哲人廳で大集會を開き、政府當局に抗議した。この結果、フランス政府は、陸軍省へ旅費六百フランを返還することを條件に、華工が自由人となることを認めた。その際、パリ中國領事館は、不法にも尻馬にのつて、自由人となつた華

工は、さらに歸國旅費千フランを収めなければ、フランスで労働するための證明書を發行しないと規定をさだめたが、これも華工會の抗議で半額に下げることと結着がついた。⁽⁶⁵⁾この闘争によって、華工會は全華工の信頼をえるに至った。

一九二三年、華工會は改組して、名稱も「旅佛華工總會」と改めた。共青團の華工運動は、一方でこの華工總會との連帶を求め、他方で華工にプロレタリアートの自覺をうえつけることを目指した。中佛教育會のアナキストたちの影響がつよい華工總會ではあったが、もともと政治的意識がかなり高かつたうえに、激しいアナボル論争でアナキズム派が凋落しつつあったこともあって、共青團と華工總會の關係は日ごとに親密さをました。周恩來はくりかえし、「ともに現社會の被抑壓者であるから、無條件の携手があるのみで、絲毫の誤會もあってはならない」⁽⁶⁶⁾と連帶をよびかけた。一九二三年以後の反帝反封建闘争で、共產主義派の赤光社と華工總會の名が、つねに並んで現われてくるのは、その努力の結果である。

しかし、華工總會の組織そのものは、やはり互助組合的なものであった。周恩來は、華工がもつとも集中していたビヤンクル地區に足を運び、工場や宿舍に深くはいりこみ、プロレタリアートの神聖な任務をといた。また、袁子貞や王子卿は、華工總會が各地に設けた工餘學校の責任者になって、華工教育にうちこんだ。袁子貞はビヤンクルのクルーズ工場に住みつき、華工の組織化をすすめた。⁽⁶⁷⁾一九二四年になると、クルーズの華工たちは、『新工人』という雑誌を發行した。その創刊に當り、新工人社は、赤光社に書簡を送り、「中國が半植民地に轉落したのは、十九世紀國家主義の賜である。解放の方法は、世界のプロレタリアート、被抑壓民族と聯合して、本國プロレタリアートと被抑壓民族を搾取するすべての帝國主義國家を打破するしかない」⁽⁶⁸⁾と宣言した。

共青團のこれらの活動を通じて、華工の階級的自覺はしだいに高まり、遅くとも一九二四年十月以前に、本格的な労働組合の組織である「旅佛労働組合書記部」が結成された。⁽⁶⁹⁾この名稱は、おそらく國內の共產黨労働運動組織の「中國労働組合書記部」にみならつたものであろう。蔡暢によれば、フランス各地に、華工と工場で働らく勤工儉學生からなる中國人労働組合を八つつくつたというが、旅佛労働組合書記部はそれらの統一機關であらう。そしてこれらの労働組合は、フランス労働總同盟

(CGT)に所屬したともい⁽⁷⁰⁾う。旅佛労働組合書記部が、どのような活動をしたかは詳らかでない。しかし、例えば一九二五年二月七日、二七惨案二周年を期して、書記部主催のもとに、パリ、リヨン、ビヤンクルの各地で記念集會が開かれ、パリでは二百人もの華工が結集したという事實⁽⁷¹⁾、また一九二四年段階で在佛共產主義者五百人の半數を華工がしめたという數字は、書記部が華工の間に相當浸透し、しかもかれらに明確な階級的自覺をうえつけていたことを物語っているであらう。

一方、學生運動に對する共青團の活動は、中佛教育會の破壊によつて一時停滯していた留佛勤工儉學生總會を再建することにあつた。一九二四年十月、四川、湖北、湖南、河南、江蘇等七省出身の勤工儉學生は、共青團の指導のもとに、勤工儉學生總會の改組總會を召集し、それまでアナキスト系の手に握られて開店休業同然であつた總會を、革命派の手に奪還した⁽⁷²⁾。

しかし、より重要な任務は、勤工儉學生の利益をまもる權利獲得闘争ではなく、勤工儉學生の優秀分子を革命の戰士に育てる訓練であつた。周恩來は、共青團のヨーロッパにおける特殊任務として、特にこの點を強調した。「本團旅歐の責任、及び今後まさにあるべき活動は、大體、共產主義の教育工作、換言すればレーニンの所謂『共產主義の學習』と規定する⁽⁷⁴⁾」。この方針によつて、執行委員會の下に、共產主義研究會が設けられたことは、章程の中でもみた。共產主義研究會は、パリ、リヨンをはじめ各地に共產主義討論會を組織して、共產主義研究の意見交換の場とするとともに、『共產主義研究會通信集』を發行して、各地の討論會の相互間でも意見交換ができるようにした。

『共產主義研究會通信集』では、マルクス、レーニン主義の原理に關する討論ばかりではなく、いかにして共產主義者に生まれかわるかというような身近な問題まで論じられた。共產主義學習と専門的な學問との矛盾などもその一つである。研究會員の一致した意見は、「われわれ同志がヨーロッパへ留學した目的は、以前はさまざまであつたが、現在に至つて、その重心があるところは、自己を養成して、共產主義革命を實行し共產主義社會を創造する人間になることにほかならない⁽⁷⁵⁾」ということであつた。だが、ある會員は、電氣を學ぶ専門の學問と、共產主義の學習を兩立させようとしたが、結局いずれも十分にできないという悩みを告白した⁽⁷⁶⁾。

この告白をめぐって、意見は對立した。共產主義者にとっては、共產主義を學ぶことこそが第一の任務で、専門の學問はいま學ぶ必要はない。これが多數の意見であつた。しかし、と反對派は應酬した。共產主義革命が成功した曉にも、依然として工業知識、農業知識は必要不可欠である。いやむしろいま以上に必要となるにちがいないから、いまからその専門知識を身につけておくことは十分に意味がある。⁽⁷⁷⁾

だが、「われわれの事業の第一歩は革命にある。革命の時期に用いるのは、工業、農業などではなく、革命行動の工具ではない」。まして、現在の中國共產黨人は數百人にすぎない。フランスには十萬前後の黨員がいるが、なお革命は成功していないではないか。産業の問題については、黨員以外にも協力できるが、革命の問題は共產黨員がになうほかない。「したがって、われわれは革命時期に用いる工具を直接に學習することあるのみ」。⁽⁷⁸⁾ 勤工儉學生は、共產主義の學習を最優先させることによつてのみ、共產主義革命家に生まれかわることができるのであつた。

さて、出版委員會には、李富春、劉伯堅、任卓宣、周維楨、範嚴など十六名が加わつていた。⁽⁷⁹⁾ その主要な任務は『少年』の發行であつた。『少年』は、一九二二年八月一日に創刊であるから、すでに中國少年共產黨の時代から存在していたわけである。現在確認されているのは、一九二三年十二月十日の第十三號までで、月刊が原則であるが必ずしも嚴守されたわけではない。『少年』の特色は、アナキズム、社會民主主義の批判と、マルクス・レーニン主義の理論研究であつた。もちろん、國際共產主義運動の紹介、時評などにも誌面をさいたが、基本的には理論雜誌の性格が濃厚であつた。ブハーリンの「コミンテルン綱領草案」、ロゾフスキーの「プロレタリア獨裁とは何か」、アドラツキーの「マルクス主義辯證法のいくつかの原則」など翻譯文獻が多くを占めたのも、その故であらう。要するに、『少年』の發行も、「共產主義の學習」の一環であつた。

このほか、旅歐共青團は、一九二一年四月モスクワに設立された東方勤勞者共產主義大學（クートヴェ）に、團員を派遣することに力をいれた。ある勤工儉學生の手紙に、「（一九二三年）九月の間、まさにここからロシアに赴こうとしているものが、約二十から二十五人の多數にのぼる」⁽⁸⁰⁾と記しているところからみると、相當の規模であつたと思われる。第一陣では、

趙世炎、陳延年、陳喬年、熊雄、劉伯堅、聶榮臻らが派遣され、クートヴェで共産主義の訓練を受けた後、歸國して初期中國共産黨の新しい戦力となった。⁽⁸¹⁾ 以上のような旅歐共青團の活動から、われわれは、旅歐共青團が、ヨーロッパでの特殊任務を、共産主義革命の戦士を養成する點においていたと結論できる。

ところで、旅歐中國共産主義青年團の上部機關たるべき中國共産黨旅歐總支部については、われわれは多くを知らない。何長工は「一九二二年七月、黨中央の指示によって、S. Y. は中國共産黨ヨーロッパ總支部に改組された」と述べ、以後多くの書物、論文がこの説を踏襲しているが、われわれの探究してきた事實からすれば、これは明らかに矛盾している。時期の問題はさておき、改組されたならば、S. Y. はこの時點で消滅したはずだからである。この矛盾を、胡華は「同年（一九二二年）冬、中共中央は旅歐中國少年共産黨に通知して、『中國共産主義青年團旅歐支部』と改名させ、すでに共産黨小組に加入していた者に、中國共産黨旅歐支部を組織させた」として、一往解決している。

われわれも、基本的には胡華の説が合理的であると考えるのだが、ただ一つ氣がかりな點は、『赤光』所載の各種宣言に、中國共産黨旅歐總支部の名稱が現われるのが、かなり遅いことである。「爲救濟德國無產階級事告旅歐華人」（第一期——一九二四年二月一日）、「爲徐樹錚來法告旅歐華人」（第二十一・二期合刊——一九二四年十二月十五日・一九二五年一月一日）の二つの宣言は、いずれも旅歐中國共産主義青年團の單獨署名で發せられており、「爲孫中山先生逝世告旅歐華人」（第二十八期——一九二五年四月一日）になつてはじめて、中國共産黨旅歐支部と中國共産主義青年團旅歐區の連名宣言が現われるのである。單なる偶然か、あるいは共産黨の方は地下にもぐっていたのか、それとも共産黨は存在しなかったのか、いずれにしても、この問題にいまのところまったく無知なわれわれに解決しうる疑問ではない。他日の課題としたい。

ともあれ、時期の問題はさておくとして中國共産黨旅歐總支部は成立したのであり、それはフランス支部、ドイツ支部、ベルギー支部を統轄する機關となつた。ドイツ支部には、朱德、高語罕、張崧年（申府）などがあり、一九二五年になると、國民黨ドイツ支部と合作して『明星』という機關誌を發行した。通信處は、ベルリン、ステグリッツ、ヘルダー街九、プラテン

氣付、高語罕宛であつた。⁽⁸⁴⁾一方、ベルギー支部はシャルルルワの勞働大學が據點で、何長工、聶榮臻をはじめ多くのフランス勤工儉學生がそこに學んだ。⁽⁸⁵⁾最盛時には、百名以上を數えたともいう。こうして、フランスばかりでなく、ドイツ、ベルギーにまで、中國人共產主義者の組織が確立し、ヨーロッパにおける共產主義運動は擴大の一途をたどつた。

かかる情勢を前にして、留佛中國人學生の反革命分子は、階級的危機感をおぼえた。かれらは、一九二三年十二月二日、パリ郊外のフォントネヨ・ローズ (Fontenay-aux-Roses) において、「中國青年黨」なる反動的團體を結成し、本格的な反共活動を開始した。⁽⁸⁶⁾この團體の主流は、少年中國學會の中で、いち早く反共の態度を表明し、國費ないし自費留學生として來歐した連中であつた。曾琦、李璜、周無、何魯之はフランスへ、左舜生、魏嗣鑾はドイツへ、陳啓天、余家菊はイギリスへ、それぞれ留學していた。かれらは、二八闘争直後の一九二一年三月、少年中國學會パリ分會を設立し、次第に共產主義者が主導權をにぎりつた國内の少年中國學會に對して、別派を形成していた。⁽⁸⁷⁾これに合流したのが、反共雜誌『先聲週報』を發行していた胡國偉、周燮言、張子柱らの連中であつた。

共產主義に反對するために、かれらがこねくりだした「國家主義」の理論は、ひたすらプロレタリアート、農民の臺頭を恐れる買辦ブルジョア、大地主階級の屁理屈であつた。かれらの言い分では、「中國目下の大患は、列強の壓迫、軍閥の横暴、議員の無恥にあるのではなく、多數の國民に、國家という自覺心がないことにある」。⁽⁸⁸⁾その自覺心をうえつげるためには、「一に自尊精神を培養して國格を確立し、二に國華を發展させて國光を闡揚する」ことが必要である。要するに、國粹精神を國民にうえつける國家主義教育が第一に重要であるというのである。この觀念論的な教育論は、清末に隆盛した國粹主義に酷似している。だが、かれらが國粹を過度に強調するのは、決して傳統主義への回歸を企圖しているのではなく、共產主義を國粹に對立する外來思想ときめつけ、それに毒されることは、とりもなおさず「奴隸の境に瀕する」ことにほかならないと騒ぎたてることが眞意があつた。國家主義派は、一時、同じ論點からキリスト教教育に反對する運動もすすめたが、最後の敵はつねに最強の外來思想、共產主義に設定されていた。

國家主義派はまた、「全民革命」というスローガンをもちだして、プロレタリア革命に反対した。かれらの論理では、「最近の全國職業の調査表によれば、勞働者は全國人口比例のわずか四パーセント強を占めるにすぎない。かくの如く少數の勞働者を以て獨裁を實行しようとするのは、これを事實に徴して、ほとんど萬、不可能である」⁽⁹⁰⁾。これが、かれらのプロレタリア革命論に反対する唯一の論據であつた。そこで、超階級的に全國民を結集して、「内除國賊、外抗強權」の全民革命を實行しようというのが、かれらの主張であつた。しかし、この勇ましいスローガンも、決して共產主義派の反帝反封建を拙劣に模倣しただけの代物ではない。後のかれらの反革命活動が如實に示しているように、國賊とは、軍閥ではなく、勞働者、農民を解放する共產主義者のことであり、強權とは、帝國主義ではなくプロレタリアート、被抑壓民族を解放するコミンテルン、ソビエトロシアのことであつた。

共產主義の撲滅を唯一の目的とする中國青年黨は、革命陣營を攪亂するため、「内除國賊、外抗強權」のスローガンをカモフラージュして、軍閥に反対し帝國主義に反対する政黨の假面をかぶつて登場した。しかし、その階級の本質までもかくしおすことは、到底不可能であつた。

かれらのいう反帝とは、決して帝國主義に反抗することではなく、帝國主義に慈悲を乞うものであつた。かれらのスローガンの一つに「東方文化の宣揚」があつた。「東方文化を宣傳して、歐米に黃種の侮るべからざることを知らしめる」というのが、その主張であるが、それは、共產主義者が批判した如く、「中國の長期にわたる封建社會の生産關係」の上にうちたてられた東方文化を溫存することによって、中國が永遠に帝國主義の走狗である封建主義の支配下にありつづけることを、歐米に理解してもらうことにほかならないのである。「國際帝國主義が中國を侵略するのは、かれらの資本主義が最高度に發展した必然の結果であつて、決してかれらが東方文化を了解していない結果ではない」という常識を無視して、かれらが敢えて東方文化を宣揚した眞意は、帝國主義の了解をえて中國の封建主義を保持することにこそあつたわけである。

帝國主義に媚を賣るかれらは、また封建軍閥との癒着もおろそかにはしなかつた。張作霖の腹心、周培超がフランスでつく

った航空學會、王寵惠が組織した旅歐中華國民外交協會は、中國青年黨の無二の朋黨であつた。そもそも、黨自體が、例えば先聲週報派の張子柱が軍閥陳炯明の幕僚であつたように、多かれ少なかれ、軍閥と切つても切れぬ縁をもつていた。⁽⁹²⁾ 共產主義派の批判に、「おまえたちの『内除國賊外抗強權』は『内聯國賊外結強權』の面具だという人があるが、このことばは、肺腑を洞見しているというべきだ」といつているのは、まさに事の本質をついつている。「内除國賊、外抗強權」は、反共反ソであるとともに軍閥帝國主義擁護の謂でもあつた。

こうして、國費留學生、富裕な自費留學生及び一部華僑の間に、一定の支持層をえた中國青年黨は、愛國主義の假面をかぶりながら、共產主義派を、「外力をたのみにして政權を爭奪する賣國團體」と非難しつづけたが、その攪亂戦法も、共產主義思想の普及と反帝反封建闘争の高揚を阻止することはできなかった。

三、反帝反封建闘争

フランスにおける共產主義運動の基調は、反帝反封建の統一戦線を實現することにあつた。旅歐中國共產主義青年團に改組された段階では、すでに黨中央、團中央との連絡がついていたのであるから、その運動は決して孤立した獨自の運動ではなく、中國の初期共產主義運動總體の有機的一部分として組みいれられるべきものである。したがって、「軍閥打倒」「國際帝國主義打倒」の國民革命という、初期中國共產主義運動の革命戦略は、當然フランスにおける共產主義運動にとつても、もつとも重要な當面の課題となつた。

共產主義研究會では、反帝反封建の國民革命をどう規定するかをめぐつて、熱心な討論が續けられていた。蔡和森のきわめた高みも、ここではすでに一般的常識となつていた。帝國主義段階において、半植民地の形で世界經濟にくみこまれた中國では、「共產革命の對象は、大部分が外國資本家（中國の資本家は附屬品である）」と、本國で悪行をはたらく軍閥である「こと、しかも社會主義陣營と資本主義陣營、プロレタリアートとブルジョアジーの對立する現在の世界で、「實際の情況に照せば、

中國革命の正軌は、共產主義の一路があるのみである」⁽⁹⁴⁾こと、この二點は會員の共通認識であつた。しかし、現在の中國で、いかに共產主義革命をおしすすめるべきかという問題になると、議論は複雑にならざるをえなかつた。

共產主義研究會の指導的人物であつた尹寛と、李慰農という會員との間でたたかわされた論争は、その複雑さをよく傳えている。李慰農の考えでは、中國でただちに共產主義革命を實行することは不可能である。なぜなら、第一に中國のプロレタリアートは、大都市にいる少數が訓練されているだけで、實力がきわめて薄弱であり、第二にもし無理やり共產主義革命の情勢をつくりだせば、中國のブルジョアジーを帝國主義の側においやり、プロレタリアートは孤立して「ただ革命の情勢を保ちたいばかりでなく、中國を純粹な奴隸の地位にかえてしまう」からである。したがつて、共產主義革命の前にやはり「民主革命を扶助する必要がある」。しかし、民主革命は基本的には「第三階級のものであつて、第四階級とは關係ない」⁽⁹⁵⁾。なるほど、

民主革命の前には、第三階級と第四階級の利害は一致しているが、革命後にはまったく對立するに至る。共產主義者は、この關係をはつきり認識して、民主革命の段階においても、ブルジョアジーの裏切りに對して十分準備をつんでおくべきである。

その準備として、李慰農は、勞働者、農民、兵匪、學生の四大範疇を設定して遂行されるべき任務を述べているが、その中でも特に農民に最重要點をおいている。「中國は農業國家であり、畢竟農民が最大多數を占めている」。ところが、中國の過去の革命はいずれも、決して農民の生活基盤まで動搖させるに至らなかつた。同志の中にも、「中國の共產革命では、農民は問題にならない。かれらを不動のままに——中立を守らせておけば十分だ」というものが多い。しかし、大農、中農、小農、貧農、佃戸、農工等に階級分化している中國農民の中、三つの下級階級を團結させ、その他の階級に抵抗させることは、きわめて重要な課題である。これらの農民を組織するには、農會と農民教育の二つの方法が出發點となる。「農會は無産農民の保護機關、團結の基礎であり、それによって政治闘争を行ない、地主の搾取と官廳の壓迫に抵抗することができる」。農會には農民の信用をうるために、消費合作社、貸借合作社も付設する。一方で、共產主義者は、一縣あたり一、二人の同志を、農村の高級學校に教職員として派遣し、それを核にして講演團を組織して、農民教育をすすめる。「われわれの最後の目的は、勞働組合と

農會を一つに聯合させようとするとところにある。かくしてこそ、革命の基礎が強固にうちかためられ、革命後の各地方ソビエトが一舉に組織できるのである⁽⁹⁶⁾。

このような李慰農の主張に對し、尹寬は二點について反論した。第一に、民主革命は第四階級とは無關係であるとのきめつけに對し、「中國のプロレタリアートが現在民主革命を行なうのは、むざむざ第三階級のために加勢するのではなく、自からの解放の直接的な利益のためである。というのも、中國プロレタリアートの現在の解放の要求は、プロレタリア獨裁ではなく、獨立した民主共和國だからである⁽⁹⁷⁾。第二に、農民問題については、都市近郊の農民はプロレタリアートと連帶させ革命に動員することができるが、それ以外の地方の無産農民は、政治的に非常に遅れており、組織することが不可能である。したがって、李慰農のいう農會と農民教育は空想論にすぎないと批判した。

兩者の間の議論は、一九四九年に至る中國革命の基本的な問題を、ほぼ網羅している。しかし、残念ながら、農民問題については、周恩來でさえ、「第五派の革命勢力は、目下萌芽期にある。すなわち、膨大な農民階級がこれである。農民の勢力が果して形成されるかいは、一に、その形成に努める人の多少によって決まる⁽⁹⁸⁾」と、その革命の潜在力には注目しているものの、實踐課題の日程にはあげていなかった。フランスにおける共產主義者は、農民問題をあまり重視せず、李慰農の提起した問題は、結局十分に發展させられることがないままに終った⁽⁹⁹⁾。フランスでの議論の焦點は、第一點の民主革命におけるプロレタリアートの役割にしばられた感がある。

李慰農の主張にしたがえば、民主革命は成功した曉には、必ずプロレタリアートに敵對する存在に轉化するものであるから、その成功以前から、プロレタリアート自身の階級的利益をうちかためておかなければならぬ。そこから出てくるのは、戦術としてブルジョアジーと合作することはありえても、プロレタリアートの黨、共產黨の獨自性を決して損うものであつてはならないという結論である。一方、尹寬の議論では、帝國主義段階における「獨立した民主共和國」は、決して歐米型の舊いブルジョア民主主義國家と範疇を同じくするものではないと主張する。歐米型のブルジョア民主主義國家は、たしかに封建貴族

の支配を打倒してブルジョアジーの獨裁を樹立するための國家であつたが、中國ではすでに、プロレタリアーが「第三階級の下」ではなく、拮抗するかたちで存在しているのであるから、民主革命成功の曉に「政權がすべて第三階級の手におち、第三階級が一切を掌握するとは考えられない」。むしろ、そこで得られる言論、集會、出版等の自由と勞働者の地位の改善は、プロレタリアート自身の直接的な利益であり、プロレタリアート解放の第一歩である。「プロレタリアートは、この民主革命の闘争を經過して、必ずやきわめて大きな勢力を獲得し、ただちに進んでプロレタリア獨裁を要求するであらう」⁽¹⁰⁰⁾。

民主革命がプロレタリアートにとつても積極的な意義をもつと考える尹寬に對して、李慰農はそこに消極的な意義しか見出しえなかつた。李慰農の議論は、ブルジョアジーの反革命性を見ぬき、プロレタリアートの階級的利益を重視する點で、原則論的には正しいであろうが、プロレタリアートの力量が十分でなく、しかも帝國主義と封建主義という二つの強大な敵に直面している段階で、それを過度に強調することは、左翼閉鎖主義に走る危険をはらんでいた。一方、尹寬の議論は、帝國主義段階における民主革命が、歐米型のブルジョア民主主義革命とはまったく異なるものであることを指摘している點で、毛澤東の『新民主主義論』につながる觀點をすでに用意していたともいえる。しかし、かれが農民問題を輕視し、しかも民主革命におけるプロレタリアートのヘゲモニー確立の問題をゆるがせにしていることは、これが新民主主義論と自ずから相當の隔りをもつことを示している。その危険性は、當然プロレタリアート獨自の利益を、民主革命の中に解消させてしまう可能性にあつた。事實、フランスにおける共產主義者の中には、任卓宣の如く、プロレタリアート及び農民の力量を過度に低く評價し、「全國の被抑壓民衆は、國民黨の旗のもとに集中しなければならぬ。すなわち、どのような黨派であらうとも、とりわけ革命的な黨派は、すべて國民黨の旗のもとに集中しなければならぬ」⁽¹⁰¹⁾と、共產黨の獨自性をふりすてて、全面的に國民黨に投降することを主張するものもあらわれたのである。

かくして、兩者ともに、半封建半植民地における民主革命の複雑性と困難性を十分に解明していたとはいいがたいが、この論争によって、民主革命における問題點は、くまなくリストアップされた。そして、この認識は、國共合作に臨む共產主義者

の基本的姿勢を規定することになった。一九二二年の二全大會で、民主聯合戦線の方針をうちだした中國共產黨は、一九二三年六月の三全大會で、共產黨員の國民黨への個人加入という形式で反帝反軍閥の革命統一戦線を實現する決定を下した。この決定はフランスにも伝えられたが、フランスにおける國共合作の動きは、實際はこれに先立って始まっていたのである。

一九二二年八月五日、國民黨は、王京岐なる人物をリヨン中佛大學に派遣し、國民黨ヨーロッパ總支部設立の準備にあたらせた。⁽¹⁰²⁾王京岐はもともとフランス勤工儉學學生で、リヨン進軍により強制送還された百四人の中の一人であつた。リヨンで、王京岐はまず國民黨リヨン通訊處を設立し、全ヨーロッパ的な組織を作りあげる準備にのりだした。その際、すでに旅歐中國共產主義青年團を組織して、近い將來三百人もの團員を結集しようとしていた共產主義派を、もし吸収することができれば、大いに助力となるであろうと、勤工儉學運動の内情を知っていた王京岐が考えたのも無理からぬところであつた。一九二三年四月二十五日、王京岐が國民黨本部へ送つた書簡では、「旅歐共產主義青年團共に八十餘名、月來、その組織を探るに頗る完善なりと稱し、しかもその行動もまた、わが黨と相差すること遠からず。この二故により、かつて與に多次接頭し、前月十日特に代表を派して巴黎に赴き、かれらの常年大會に參與させたるに、かれら大部分の意見は、本黨に加盟あるいは本黨と携手合作することを欲せり⁽¹⁰³⁾」と報告した。「前月十日の常年大會」が、一九二三年二月の旅歐中國共產主義青年團への改稱を決定した大會と、同一の大會であるかどうかは詳らかにしないが、ともかく、その前後にすでに、何らかの形で國民黨との合作を志向していたわけである。旅歐共青團が、このような方針をとつたのは、黨中央が二全大會諸決議の精神を傳えてきたことによるとともに、一九二二年十一月コミンテルン四回大會の「東方問題についてのテーゼ」にもられた反帝國主義民族統一戦線のよびかけにこたえるためであつた。このテーゼでは、十分慎重に、半植民地における労働運動が、反帝國主義戦線における「獨立した一個の革命的要因という地位」を確立したのちに、はじめて「ブルジョア民主主義との一時的な和解が許され、また必要なのである」と警告しているが、フランスの中國共產主義者は、この警告を尊重して國民黨との合作に臨んだ。

六月十六日、共青團の代表三人、周恩來（浙江）、尹寬（安徽）、林蔚（湖南）は、リヨンに王京岐を訪問し、國民黨への個

人加入を協議した⁽¹⁰⁴⁾。周恩來が王京歧によせた書簡では、ヨーロッパにおける國共合作の當面の課題として、「民主革命の、現在の中國における必要性和その運動の方略を宣傳すること」、「國民黨のために、留歐中國人中の革命精神をそなえた分子を吸收すること」、「國民黨のために、組織、訓練の工作をするよう努力すること」の三つを挙げ、民主革命を促進するかぎりには、國民黨に協力することを約束した⁽¹⁰⁵⁾。これに對して國民黨本部總務部長、彭素民からは、原則的に旅歐共青團の加入を承認する返答がよせられ、ここにヨーロッパにおける反帝民族統一戦線の中核が始動しはじめたのである。

一九二三年十一月二十五日、國民黨ヨーロッパ支部は、リヨンのプラスドトリアン (Place de Trian) の喫茶店で、成立大會を開いた。國內の國民黨一大會に先立つこと一月餘りである。國內においては、共產黨員は、國民黨内で壓倒的な少數派であつたが、ここフランスにおいては、共產主義者は決して少數派ではなかつた。國民黨ヨーロッパ支部は、評議部と執行部を設け、各委員を選出した。結果は、執行部長には王京歧が當選したもの、執行部總務科主任に周恩來、執行部宣傳科主任に李富春、政治委員會會長に熊銳、パリ通訊處處長に聶榮臻、評議部評議員に任卓宣と、五人の共產團員が重要なポストを占めたのである。

しかも、總務科主任周恩來は、成立大會で演壇にたち、國民黨員の規律弛緩をきびしく批判した。「黨籍に登録しながら責任を負わない者、この類の人間が實にわが黨の最大多數を占めている。普通の黨員がおおむねこの弊をもつだけでなく、在歐の蔡子民、王亮疇といった黨中の知名人士でも、そうでないものはない。黨を利用するときは、老同志と自稱しながら、用いないときは、もっぱら黨議に反する。甚しきは人に従い落井下石の舉に出る。まことに悲しみうらむべきことである。本黨内部に伏莽する患と認めざるをえない⁽¹⁰⁶⁾」。蔡元培、王寵惠を名指して批判した背景がなにかは知りえないが、杜撰な國民黨の體質に對する正面からの批判であると同時に、國民黨を眞の革命政黨に改ためるための貴重な苦言であつたといわなければならない。

『赤光』誌上でも、國民革命を有利に展開するために、國民黨に對する忠告がくりかえされた。その要點は、S・Yなる人

物が指摘しているほゞ三點に集約される。第一に國民黨は今後政治活動において、いかなる軍閥、いかなる帝國主義とも永遠に合作すべきでないこと。第二に、軍事一點ばりを改め、民衆に對する政治宣傳に全力を傾けること。第三に、國際的には、弱小民族の連帶に注意し、勞農ソビエトにさらに接近することであつた。⁽¹⁰⁷⁾中國共產黨三全大會の宣言にもらわれている國民黨批判よりも、より具體的で廣範な指摘であるといえる。さらに周恩來は、軍閥との癒着をくりかえしてきた國民黨の體質に對し、「われわれがもつとも切望し、かつくりかえし述べてはばからないことは、國民黨は今後、國民運動において依據すべき革命勢力五派の、發展、團結と指導に注意すべきであり、新舊軍閥四派の勢力の調和によつて、あの欺瞞的な平和統一を達成できるなどという誤解を決してくりかえしてはならない、ということである」⁽¹⁰⁸⁾と忠告したのである。

成立大會以來、一貫して國民黨の古い體質を批判しつづけた旅歐共青團團員は、同時に左派の組織擴大を極力援助しつづけた。一九二四年一月、國民黨ヨーロッパ支部は、パリ通訊處を設立した。國民黨パリ通訊處準備員の名義で周恩來が國民黨總務部部长にあつた書簡では、同處に黨員三十六名がいてと報告している。⁽¹⁰⁹⁾一月十七日には第一回通訊處大會が開催され、李富春が臨時主任、聶榮臻が通訊處處長と、いずれも共產主義者が責任者に選出された。別の報告によると、パリ通訊處は設立間もなく、百八十名の黨員を數えるに至り、大半が勞働者もしくは見習工であり、その他いくらかの學生が含まれていた⁽¹¹⁰⁾という。勞働者と勤工儉學生を主體とするパリ通訊處では、共產主義派が當然主流であつた。この他、フランスではマルセイユに支部が設けられ、ブリュッセルにベルギー支部、ベルリンにドイツ支部、リバプールにイギリス支部、そしてロシア支部と、全ヨーロッパ的な組織が着々と結成されていった。ドイツ支部では、五人の執行委員の中、二人、三人の監察委員の中、一人はあきらかに共產主義者であつた。すなわち、組織主任の朱德と宣傳主任の熊銳そして監察委員の高語罕である。⁽¹¹¹⁾これ以外でも、論者の無知によつて、共產主義者か否か判斷しえない人物も當然含まれているであらう。

一九二四年六月六日、廣東から歸つた王京岐は、パリ地理學協會の大講堂にパリの國民黨員を召集して會議を開き、全ヨーロッパの組織を整備する仕事にとりかかった。その結果、イギリス支部とロシア支部は別個の組織として廣東と直接連絡をと

り、パリ、リヨン、マルセイユを統轄するフランス支部、ドイツ支部およびベルギー支部は、連合してパリに總支部を設けることになった。ここに正式に、國民黨ヨーロッパ總支部が設立され、ヨーロッパにおける反帝反軍閥の國民革命を指導する機關が確立したのである。⁽¹¹²⁾七月二十日、すべての支部の代表を召集して、代表會議が開催され、國民黨ヨーロッパ總支部は、全ヨーロッパの中國人に對し、「ヨーロッパ大陸における公式の中國革命派の機關」であることを、自から高らかに宣言したのである。

中國革命黨は三十年來存在してきた。ヨーロッパでは、黨は今年はじめて結成された。それはまずフランスで成立し、そこからベルギー、オランダ、ドイツ、ロシアへと擴大していった。そのメンバーは大變多數になった。それ故に、規律ある組織が絶對に必要となった。

まずもって、われわれは中國の國民黨（革命的）であるということを、常に思いおこさねばならない。それが、現在われわれがあるところのものであり、それが、將來われわれがありつづけなければならないところのものである。色あせさせてはならない。……

新しい革命組織の士官に對するいくつかの指示を最後に挙げよう。一、われわれの間の「觀念論者」の幻想を打破せよ。二、民主革命の純粹な精神を宣傳、維持せよ。三、この精神を他の民族、特に弱小被抑壓民族の間に廣めることに努力せよ。四、嚴格で訓練された共和派の性格を自ら養ない、他にも傳えよ。五、ヨーロッパにおいて宣傳精神と戰鬥的情熱を學び、祖國に戻ったとき、革命の大義に有役に奉仕する準備をせよ。なぜなら、その使命は重大であるから。かれら士官は、いつの日か、わが國における自立のための最後の戦いで、前衛を形成しなければならない。⁽¹¹³⁾

あくまで、中國國內における國民革命が本隊であつて、フランスにおけるそれは支隊であり、同時に本隊へ優秀な戰士をお

くりこむ訓練部隊であるとの認識のもとに、國民黨ヨーロッパ支部は、宣傳と訓練を開始したのである。しかし、かかる革命的精神の高揚は、國民黨右派の連中とは無縁であつた。むしろかれらは、共產主義青年團の獻身的努力によって、ヨーロッパにおける國民黨の組織が、擴大し左傾化していくことに階級的危機感を覺えた。かれらの階級的同盟者たる中國青年黨は、その機關誌『先聲週報』のほとんど全誌面を國共合作に對する攻撃にあてていた。かれらの批判のための批判に用いられた論理は、きわめて幼稚であつた。「共產主義の主張は明らかに「階級革命」であり、明らかに「私有制度の打破」であり、明らかに「プロレタリア獨裁」である。どうして周（恩來）君は共產主義者でありながら、「國民革命」を主張するの⁽¹⁴⁾か」。かれらの論理では、「國民革命」は超階級的な革命運動であるから、「全民革命」を提唱している青年黨こそが主役となるべきであるのに、實際は「階級闘争」によって「プロレタリア獨裁」をめざしている共產主義者が、その株をとってしまったことに我慢できないというわけである。すでにわれわれは、中國青年黨の「全民革命」が、プロレタリア、農民の臺頭に恐怖した買辦ブルジョア、大地主の反革命理論にすぎないことを知っているが、國民革命を利用して自らの階級的利害を守ろうとしていたかれらにとって、共產主義者が前面に登場し、國民革命運動をプロレタリアートと農民を主體とする眞の國民革命に高めようとする動きは、もつとも警戒するに値した。そこでかれらは、支離滅裂な理くつを考案しては、共產主義者を攻撃したのである。これに對して、共產主義者は、公明正大に自らの國民革命における立場を鮮明にし、青年黨の論點をことごとく論破した。

たしかに、われわれ共產主義者は、「階級革命」を主張するものであり、國民革命の後にはやはり、プロレタリアートのブルジョアジーに對する「階級革命」という事實が存在することを認める。

しかし、われわれが現在行なう國民革命は、むしろ三民主義革命であり、プロレタリアートがブルジョアジーと合作して、權力をにぎっている封建階級を打倒する「階級革命」である。なにを根據にして、「國民革命」は「階級的妥協」であるなどというのか。しかも、かくしなければ、共產主義革命は生みだしえず、「私有制度の打破」「プロレタリア獨裁」

も當然生みだしえないのである。第一步をふみださずして、どうして第二步をふめよう。もっとも第一步をふみだしたとはいっても、プロレタリアートはまだほんとうの活路をえたわけでないが⁽¹⁵⁾。

論理において完膚なきまでに破れた青年黨は、もちろんそのまま引退しているはずがなかった。かれらのより隱微な反革命活動がつづいた。その最たる事件は、「共產黨祕密文書」暴露であつた。當事者側の李璜の回憶によれば、もっともこの部分の種本は沈雲龍『中國共產黨之來源』であるが、青年黨員の鄔剛如なる人物が、同室の中共分子のベッドから、ガリ版刷のパンフレットを發見したところ、「共產黨加入國民黨之祕密決議案」と題する「陰謀文獻」であつたという。そこには、共產黨員が、國民黨に加入した後も、共產黨の組織を維持し、國民黨左派の革命分子を吸収して、強大な共產黨の基礎をうちたてるようにとの指令がなされていた。曾琦、李璜らは、「共產黨の陰謀」を暴露する絶好の證據として、これを國民黨右派の謝持におくりつけた。一九二四年六月、國民黨中央監察委員、鄧澤如、張繼、謝持が連名で孫文に提出した共產黨彈劾案は、實に青年黨が發見した「陰謀文獻」を材料にしているといふのである。⁽¹⁶⁾

「共產黨の陰謀」を暴露した功績を誇りたいあまりに、李璜ははからずも、すでにフランスにおいて、後の西山派と國家主義派の野合が萌芽していたことを自白している。しかも、「陰謀文獻」を證據に暴露されたという事柄は、共產主義者が國民革命に参加するに際して、當然表明すべき革命的戰略であつた。周恩來も、當の青年黨に對して、國共合作はプロレタリアートの階級的利益を放棄するものではないことを、くりかえし公然と表明していた。したがって、青年黨の暴露は、共產黨にも國民黨左派にも何らの痛痒を與えず、逆に國民黨右派の醜い反共活動を白日のもとにさらすだけの結果におわたつたのである。

青年黨と結んで反共宣傳に狂奔した國民黨右派は、一連の陰謀を通じてかえって孤立状態におちいった。王京岐は、『國民』半月刊の卷頭論文で、「最近わたしは時として、一部の同志が共產主義團體が加入しないようにするものこそ、眞正の國民黨人あるいは純粹の國民黨人である、というのを耳にすることがある。わたしはこのような言い方は、非常に誤まっていると思

う」⁽¹¹⁷⁾と明言した。なおやまない右派の反共策動に對し、共產主義者は、「孫中山の叛從」として右派の習文德、張星舟らを黨籍剝奪處分においこみ、さらに名指しで余中楫、劉宗華等に對しても、四つの罪狀を擧げて處分を要求した。⁽¹¹⁸⁾このような主犯たちに對する斷固たる處分が決行されたことは、國民黨内において共產主義者がなみなみならぬ實力をたくわえていた事實を物語っている。かくして、國民黨右派と青年黨の妨害を排除しつつ、共產主義者は、左派との密接な連帶を維持してフランスにおける反帝反軍閥闘争を指導していたのである。

フランスにおける共產主義者の機關誌『赤光』は、一九二四年二月一日に創刊され、現在までのところ、一九二五年六月七日出版の第三十三期「反對帝國主義屠殺上海市民特刊」まで確認されている。原則としては半月刊であつたが、必ずしも嚴密に維持されたわけではなく、第三十三期のように五三十事件直後に臨時に出版されることもあつた。發行者はコロンブの華僑協社(39 Rue de la Pointe La Garenne-Colombes Seine)内の「赤光社」と奥付には記されている。實際は、旅歐中國共產主義青年團と中國國民黨旅歐總支部の共同機關誌と考えておくべきであらう。先の『少年』はマルクス・レーニン主義受容期の同人雜誌的性格のつよいものであつたが、『赤光』は、フランスにおける國共合作が始動しはじめた時期の雜誌であるだけに、反帝反軍閥闘争の實踐を最も重視した誌面をくんだ。創刊號の「赤光的宣言」では、中國時事における亂源の所在と國際情勢における萬惡の源を指摘して救國の途を輝しだすという、編集方針を明らかにした後、次のように述べる。

さらにわれわれは、ヨーロッパ在留の國人が大體、十分な救國の熱誠を具えていることも知っている。ただ、救國の方法が多く一致に向わず、かつ常に一隅の見にとらわれているので、斷固拒絶して國民聯合に反對するにすぎない。われわれはいま誠實かつ忠實に、救國の唯一の途とその他のぐねぐねと曲りくねって通れない徑路とを諸君に指示したいと願っている。

要するに、われわれの認定する唯一の目標は次のことである。

軍閥政府に反對する國民聯合

帝國主義に反對する國際聯合

しかし、われわれのこのような鼓吹は、決して武斷的な主張ではない。われわれは、科學的方法で、各種の事實を總合し筋立てて、われわれの主張が誤まっていらないことを證明しようとするものである。本よりこれがわれわれが理論の『少年』を實際の『赤光』に改める始意であり、同時に『赤光』の新使命でもある。⁽¹¹⁹⁾

まさしく、理論の『少年』にかわつて登場した實際の『赤光』は、國民革命の正しい方向を指し示すことを使命としていた。したがつて、その誌面は、帝國主義の動向、封建軍閥の情況をあげたことに主眼をおくとともに、植民地、半植民地における被抑壓民族の解放闘争、資本主義國における階級闘争そしてそれらを指導するソビエトとコミンテルンの實情も詳しく報道した。『赤光』誌上で、もつとも花々しい論陣をはつたのは、周恩來であるが、かれは「恩來」「伍豪」「飛飛」「翔」「翔宇」という五つのペンネームを用いて、上記のあらゆる分野にわたる論説を、毎號四編から八編にもものぼる勢いで寄稿した。軍閥政治の實態に關する論説は、おおむね『嚮導』などの國內の共產主義雜誌を參考にして執筆されたものが多く、とりたてて目新しい事實なり觀點なりを見出すことはできない。例えば、第一期（一九二四年二月一日）の伍豪「軍閥統治下の中國」には、『嚮導』第四十期（一九二三年九月十六日）の章龍「山東民衆的革命潮流」と第四十三期（一九二三年十月十七日）の章龍「歡迎山東革命的民衆」が引用され、第三期（一九二四年三月一日）の飛飛「兩個不惹人注意的問題」では、『嚮導』第二十期（一九二三年五月二日）の巨緣「樂志華案是一幅中國的縮影」と第五十期（一九二三年十二月二十九日）の和森「又是一個樂志華案」が參考にされている。

『赤光』の最大の特徴は、やはり比較的情報の早い地の利を活かして帝國主義諸國の動向を精力的に分析しているところにある。帝國主義に對する認識は、基本的にはレーニンの『帝國主義論』をよりどころにしていることはいうまでもない。しか

し、そこにわれわれは一つの明確な受容の態度を認めておかなければならない。樸生(おそらくは蕭三)の「帝國主義底解剖」は、『帝國主義論』の第一章から第三章までを「帝國主義の由來」、第四章から第六章までを「帝國主義の特性」という項目にくくり、各章を「獨占の發生」、「財政資本の形成」、「資本輸出」、「世界分割」に整理して概観した後、「帝國主義はまことに一匹の虎ではないか。弱小民族を侵略しない帝國主義がないのは、まさに人を喰わない虎がないのと同じことだ」⁽¹²⁰⁾と結んでいる。ここまでほぼ章を追って解説してきた樸生は、次に「帝國主義の末路」という項目を設けて「代議制の破産とプロレタリア革命」、「帝國主義戦争」、「民族獨立運動」の三點にわたり、帝國主義本國におけるプロレタリアートの覺醒が、議會制度に對する幻想を拂拭し「直接行動武裝革命」を採用させるに至ること、帝國主義相互間の戦争は避けがたく、それがプロレタリアートの闘争をさらに激化させること、そして帝國主義の植民地・半植民地支配が、そこにおけるプロレタリアートと「民族的自覺」をもつ知識階級の形成を促し、民族獨立運動が必然的結果として勃興してきて、帝國主義國のプロレタリアートと連帶すること、を明らかにしている。これら三點はいずれも「帝國主義の致命傷」となり、かくして「帝國主義はまことに資本主義の最後の一幕となる」と主張しているのである。

この「帝國主義の末路」、とりわけ「民族獨立運動」では、明らかに『帝國主義論』だけを参考にしていない。しかも『帝國主義論』の重要な一部分であるところの、カウツキーの帝國主義論に對する批判と帝國主義國における勞働運動分裂の歴史的解明とに、まったく注意をはらっていない。この二つの事實から考えると、樸生は基本的に、半植民地中國の立場にたつて、『帝國主義論』を受容したことが了解できる。「帝國主義は、東方とりわけ中國をその生存の基礎としている。帝國主義が一日存在すれば、われわれは一日解放をえられない」⁽¹²¹⁾。この認識は、樸生だけでなく、フランスにおける中國人共產主義者すべてに、いまや共通するものであった。

一九二三年一月、フランス帝國主義は、賠償金の不拂を口實に、ルール地方の武力占領という暴舉を斷行した。かつて、パリ講和會議において山東權益を日本帝國主義に略奪された記憶が、まだ生々しく腦裏にやきついていた中國共產主義者にとつ

て、この暴舉は、レーニンの『帝國主義論』の正しさを、眼前の事實を以て教える事件となった。第一次世界大戰を民主主義と專制主義との戦いとみなす觀點は、すでに李大釗によって否定されていたが、「民主主義の母國」フランスが、膨大な賠償金の略奪からさらに進んで領土の略奪にまで及んだ事實は、第一次世界大戰が帝國主義戦争にほかならなかったことをさらに深く認識させた。フランスブルジョアジーの本質は同時に各國ブルジョアジーの本質でもあった。「各國のブルジョアジーは、聯合して世界のプロレタリアートを略奪するものである。ところが、略奪品を平等に分配できないので、強盜にたぐいする角逐がおこる。換言すれば、かれらは共同で略奪するが、共同で享受しない」⁽¹²²⁾。

旅歐中國共產主義青年團は、「ドイツプロレタリアートを救済する事の爲に旅歐華人に告ぐ」という宣言を發し、ルール占領とマルクの下落によつて窮地にたたされたドイツプロレタリアートを救済するために、すべてのヨーロッパ在住の中國人にカンパを訴えた。⁽¹²³⁾それはいかにささやかな試みとはいえ、帝國主義國のプロレタリアートと植民地、半植民地の民衆こそが帝國主義の墓掘人であることを自覺し、その連帶をめざした活動であつた。ルール占領はこの意味で、中國共產主義者の帝國主義認識をきわめて深化させたわけである。『赤光』に掲載される論説は、中國をめぐる帝國主義諸國の相互關係に細心の注意をはらい、五四前後の個別日本帝國主義に向けられていた中國人の眼を、帝國主義國全般の狂暴性に見開かせるよう意圖した。その中でも、とりわけ注意をはらつたのは、ワシントン會議によつて、中國分割の主役にのしあがつたアメリカ帝國主義の動向であつた。周恩來は、中國をめぐるアメリカの帝國主義活動を分析し、『赤光』に數編の論説を發表した。「アメリカ帝國主義者の對華政策」と題する論説の冒頭で、「アメリカ政府が、ワシントン會議の成功で、列強の中國における共同行動の保證をとりつけて以來、對華政策は、陽に親善を示す面貌を一變し、英日兩帝國主義政府が中國で侵略を實行した故道を、大手をふつて歩んでいる。二年餘りの經驗で、われわれは、アメリカ帝國主義の中國におけるすべての措置が、ことごとく金の臭いと血なまぐささの混じつた味をそなえていることを、いやというほど味わつた」⁽¹²⁴⁾と、ワシントン會議以後のアメリカの野心を、寸分のくるいもなく見ぬいていた。それは從來、文化侵略によつて、中國に親米派を扶植してきたアメリカが、かれらを

手先としてあらゆる種類の侵略活動を大びらにおしすすめている事態を、徹底的に糾弾するものであった。

同時に、中國國民の間にひろがっていたアメリカ帝國主義に對する幻想を、根底から一掃することも、周恩來の意圖したところであつた。日本帝國主義の一貫した狂暴性は、五四運動をたたかった中國人民が、骨の髄まで經驗していたことであつたが、ワシントン會議以後のアメリカの「對華政策」については、共和黨政權の反動的政策に原因をもとめ、來るべき大統領選舉において民主黨の勝利に期待をかける風潮があつた。これに對して、周恩來は、「これは、外面的には緩急の違いがあるが、實際はまったく同じことで帝國主義が中にたつてわざわいをなすのである」⁽¹²⁵⁾と斷言し、「甜言蜜語」をつかいわけける變装した帝國主義に警戒心を高めなければならないといふしめた。

かかるアメリカ帝國主義の動向と、野蠻な日本帝國主義の一貫した姿勢を考慮にいれるならば、「太平洋上の帝國主義戰爭」は必至である。もちろん、「まだ時機が熟していない」段階では、ワシントン會議のような取引が繼續しておこなわれ、國際外交における縱横のかけひきが精力的に續けられるであらう。だが、帝國主義間の矛盾は、最終的には帝國主義戰爭によつてしか解決できない。その時、帝國主義戰爭を、被抑壓民族の解放戰爭に轉化することが、中國人民の使命である。

日米の戰爭が早からうが遅からうが、要するに太平洋上の風雲はすでに滿ち滿ちている。かれらが準備しているのは帝國主義戰爭である。われわれ、帝國主義に反抗して中國の獨立をはかる戦士は、この風雲が起つた後に怒濤の如く起ちあがる。歐州大戰の時と同じように、巷中に逃避して難をのがれることを希つては決してならず、必ず適切に準備しなければならぬ。機に乗じて太平洋上に革命の潮をまきおこし、各國の被抑壓民衆と聯合し、手を携えて波頭にぶつかり、先を争つて波をかきたてる準備をしよう。

起て！ 起て！ 起て！ 勇敢な國民革命の戦士よ。今日から準備しておこう。⁽¹²⁶⁾

「太平洋上の新風雲」と題する文章の末尾を、周恩來は右のことばで結んでいる。レーニンの『帝國主義論』を手がかりとして、中國共產主義者は、中國をとりまく國際環境を的確に把握する視座を獲得し、二十年後に實際におこる帝國主義戰爭において、中國人民がとるべき途までも、視野の中にいれていたのである。以上のように『赤光』誌上で展開された帝國主義相互の關係とその中國政治への反映についての正確な認識は、當然フランスにおける反帝反軍閥闘争という實踐の中から生まれ、またその指針となるものであった。

フランスにおける共產主義者の反帝反封建闘争は、國家主義者の妨害を排除しつつ進められた。一九二三年五月五日、津浦鐵道の臨城驛で匪賊が西洋人を含む列車の乗客を人質にした事件を口實に、列強は中國の鐵道を共同管理下におき、鐵道警備隊を設置する策謀にでた。フランスでは、これに反對して、二十數團體からなる「旅佛各團體聯合會」が發足した。七月三日に華僑協社で開催された各團體代表會議には、旅佛共青團から周恩來、徐特立、袁子貞らが出席し、「旅佛華人反對國際共管鐵路全體大會」の開催が決定され、そこで決議されるべき「告國內父老書」の起草に、周恩來と徐特立が指名された。七月十五日には、社會博物館に四百人の多數を結集してこの大會が開かれたが、全世界のプロレタリアート、被抑壓民族と連帶して帝國主義と闘かおうという共產主義者の正しい主張は、口先きだけでテロ、暗殺といった勇ましいことばをもてあそび、反ソ・反共宣傳に終始する國家主義者の妨害をうけ、大會決議すら可決できないままに、不發におわった。⁽¹²⁷⁾

この教訓をえた共產主義者は、國共合作の左派的提携を強化するとともに、旅佛各團體救國聯合會における國家主義者の影響を除去し、反帝反封建の統一戦線を強固にすることに努力をかたむけた。一九二四年一月二十日に開かれた聯合會の改選會では、「少なくとも革命を醸成する機關となす」ことで、國家主義の妨害に一定程度齒止をかけることに成功したが、なお國家主義派を一掃することはできなかった。その後、前年末に中國青年黨を結成した國家主義派は、反ソ、反共宣傳を擴大する一途をたどり、聯合會は完全に分裂状態におちいった。この年五月三十一日、「鋤奸團」を名のる留獨學生の一團が、折からドイツを訪ずれていた交通系の領袖梁士詒を國賊として、「國民的天討」を加える事件がおこった。⁽¹²⁸⁾この國民的英雄たちをド

イツ官憲の手から守るため、旅佛各團體聯合會は活動を再開した。

七月二十日に開かれた各團體代表大會では、三十八團體の出席のもとに、聯合會の章程を革命的に修正する討議がすすめられたが、「内除國賊、外抗強權」という曖昧なスローガンを固持しつづける國家主義派は、共產主義派の「打倒軍閥、推翻國際帝國主義」という革命的スローガンに徹頭徹尾反對し、意見は對立したまま、賛否同數で再び暗礁にのりあげてしまった。⁽¹³⁰⁾

これ以後、革命派と反革命派は、在佛中國人の支持を獲得するために、激しい抗争を展開した。共產主義派は、國家主義派の反革命性を暴露しつづけるとともに、強力な反帝反封建の國際連帶を實現して、中國革命をにないうる唯一の勢力であることを内外に印象づけていった。一九二四年九月の江浙戰爭で、帝國主義の中國における代理戰爭がいよいよ熾烈になると、共產主義者は、中國を帝國主義の支配から解放する革命的統一戰線の結成に全力をかけた。⁽¹³¹⁾

一九二四年九月二十一日午後三時、土砂降りの雨をついて地理學協會の講堂に結集した二百餘名の革命分子は、軍閥の打倒、國際植民地主義の轉覆、民主革命の深化及び中國革命の領袖孫文への援助と擁護の四大スローガンを滿場一致で可決したうえ、被抑壓民族の解放者、中國の眞撃で獻身的な友人、ソビエトロシアに對する限りない喝采と、植民地主義とたたかい共產主義を宣傳するフランスの新聞ユマニテに對する熱烈な感謝をこれまた滿場一致で表明した。さらに、中國人民に以下の通電を發して、フランスにおける共產主義派の健闘を傳えた。

上海の勞働者、農民、學生、教師諸團體鈞鑒。……列強の戰艦が（江浙戰爭を口實に）上海へ到着したことは、列強のわが國の主權に對する新しい企てである。わが民族は日に日に衰亡している。われわれフランスに滞在する中國人は、列強のこの行動を力強く非難する。中國全土は、廣東の國民革命軍に援助を求め、軍閥曹（錕）、吳（佩孚）及び齊（燮元）、並びに帝國主義諸國イギリス、アメリカ、日本、フランスを打倒するよう求めよう。

我らフランス滞在中國人大集會⁽¹³²⁾

コミンテルンも、中國人共產主義者の反帝闘争に最大限の援助をおしなかった。コミンテルンは、イギリス、ドイツ、フランスの各共產黨に通知して、ロンドン、ベルリン、パリの各地で、九月二十八日の第一インター六十周年を期して「帝國主義の中國への干涉に反對する大集會」を開催するよう指導した。⁽¹³³⁾フランス共產黨もこの指示にしたがい、フランスプロレタリアートと被抑壓民族を一堂に會して、反帝大集會を舉行する決定を下した。當日二時、パリ防衛隊の兵舎近くの廣場には、フランス在住のアラブ人、スペイン人、ハンガリー人、チェコスロバキア人、モロッコ人とフランスプロレタリアート數萬人が、赤旗をかかげて續々結集した。中國人共產主義者は、「ソビエト及びコミンテルンとの連帶」「孫文の民主革命萬歲」と大書した二本の赤旗を先頭に、百餘名の隊列をととのえて會場に入つていった。すると、群衆からは期せずして「中國萬歲」「中國共產主義萬歲」の歡呼がうしおの如くまきおこつた。これにこたえて、中國共產主義者は「フランスプロレタリアート萬歲」を連呼して、大會は最高潮に達した。この後、デモに移り、數萬の隊列が、國境をこえた反帝の叫びをパリの町にとどろかせた。⁽¹³⁴⁾

この國際連帶の示威行動を以て、共產主義者の主張は、決して机上の空論でないことが、在佛中國人に認められるに至つた。こうして、共產主義派の聯合會は、國家主義者に對して壓倒的優位を占めることができるようになった。一九二四年十一月に終つた第二次奉直戰爭の結果、執政にかえりざいた段祺瑞の特使徐樹錚が借款の命をうけて來佛したときに、その力關係は明白になった。『赤光』は、「爲徐樹錚來法告旅歐華人」という旅歐共青團の宣言を掲載し、公然と共產主義の赤旗のもとに結集して闘かうよう呼びかけた。十二月三十一日に開かれた旅佛各國體代表大會で、留佛勤工儉學學生總會、新工人社、華工總會など二十五の革命的團體は、フランス帝國主義と安徽派軍閥の野合を糾弾する決議文を採擇した。一方、中國青年黨は、先聲週報社、救國雜誌社、中華學藝社のわずか三團體を代表しただけで、まったくなすすべなくその決議文に同意せざるをえなかった。⁽¹³⁵⁾そして、最終的には、三十三にのぼる在佛中國人團體が革命派に與するに至り、國家主義派の凋落は決定的となった。

五三〇事件の報がフランスに傳わると、中國共產黨旅歐支部、中國共產主義青年團旅歐區、中國國民黨駐佛總支部の三團體

は、連名で旅佛中國人に一齊にたちあがるよう呼びかけた。六月七日、パリ十三區ブランキ街で開かれた旅佛中國人大會には、フランス共產黨代表ドリオ (Doriot)、共產黨國會議員マーティ (Marty)、ベトナム共產黨留佛組代表阮世傳などが招かれ、演壇にたった。大會では、國內の反帝闘争を全面的に支援する決議が満場一致で採擇され、さらに同夜二十八の革命的團體の代表大會で、「旅佛華人援助上海反帝國主義運動委員會」の設立と、六月十四日の街頭デモを決定した。⁽¹³⁶⁾

しかし、中國人共產主義者の指導による反帝闘争の高揚に恐怖したフランス帝國主義政府は、デモ申請を不許可にしたばかりでなく、集會も禁止し、徹底的な彈壓を開始した。その彈壓をあざ笑うかのように、六月十四日午後一時には、會場に豫定されたグルネル街 (Rue de Grenelle) に八百人以上の中國人がおしよせ、會場を包圍して入場を阻止した警察大隊と二時間近くにらみあいを續けた後、會場をブランキ街に移して第二回旅佛中國人大會を斷固として開催した。この日、ビラまぎその他で、九人の中國人が逮捕された。同夜、行動委員會は、フランス帝國主義の彈壓をはねのけ、二十一日に中國公使館を襲撃する計畫を討議した。⁽¹³⁷⁾

襲撃前日の二十日には、パリばかりでなく郊外のコロンブ、ビヤンクールなどにも密使が派遣され、口頭でこの作戰への参加をよびかけた。當日一時、ブランキ街に結集した二百餘人の決死隊は、陳籙に對する五項目要求を確認した後、二、三十臺の自動車に分乗して公使館に直行した。三時、公使館に突入した一隊は、電話線を切斷して外部との連絡を遮斷したうえで、公使に五項目要求に署名するよう迫った。陳籙は決死隊の氣迫に驚駭し、命じられるままに署名し、内外に通電する費用までさしだした。一時間餘りたって、かけつけた六、七十人の警官隊が、逃げおくれた一人を逮捕し、この襲撃は幕をとじた。⁽¹³⁸⁾しかし、裏をかかれたフランス帝國主義は、加擔者をすべて逮捕することで、面目をとりもどそうと焦った。凋落していた國家主義者は、共產主義派の勢力を根こそぎにし、フランス帝國主義の覺えをめでたくする一舉兩得の機會とばかりに、共產主義者の住所をフランス政府に密告した。六月二十二、三日、右派系のマタン (Matin)、アントランジジャン (Intransigent) 等の新聞が、この住所を掲載して中國人の赤狩に協力した。その結果、任卓宣、林蔚、盧政綱など二十人の共產主義者が、二十

四日に至りフランス警察に逮捕されてしまった。⁽¹³⁹⁾ かくて、帝國主義封建軍閥と國家主義派のくされ縁はできあがり、四・一二クーデター前後のより大規模な反共同盟の豫行演習は終った。

フランスにおける反帝反封建闘争の高揚は、これを最後に退潮にむかった。しかしそれは、反共同盟の彈壓が效を奏した結果では決してなく、共產主義者が自から選んだ終局であった。五三〇運動を突破口として國內に燃えあがった國民革命の炎は、かねてから國內にこそ反帝反封建闘争の主戦場があると認識してきた共產主義者を、矢も楯もたまらず眞の戦場にかりたてた。國民黨左派の王京歧にしても、その情念は同じであった。

われわれ國民黨人の責任はなにか。諸君は一人のこらず聲をあわせて、「革命」、軍閥打倒、國際帝國主義打倒の國民革命であると、答えるものと思う。しかし、このような責任は、必ず中國においてこそ履行できる。なぜなら、われわれが打倒しようとする軍閥は、中國を支配している軍閥であり、われわれが推翻しようとする國際帝國主義は、中國を壓迫している國際帝國主義であるからだ。ところが、現在はどうか。われわれはみな、中國ではなく西歐にいる。當然、われわれは早急に歸國して、革命戦線で活躍しなければならぬ。⁽¹⁴⁰⁾

カンパニア闘争と訓練の地、フランスに別れを告げるべき時がきた。

注

(1) 何長工 前掲書 一三六頁。

なお、拙譯『フランス勤工儉學の回想』（河田梯一氏と共譯）の副題に、「中國共產黨の一流流」と付したことについて、蔭山雅博氏より批判（『中國研究月報』一九七六年八月號所收 二四二―二五頁）がでている。蔭山氏の意見では、何長工がこの書を執筆した意

圖は、大躍進期の「勤工儉學」にたずさわった青年たちに「勤工儉學」の精神を學ばせること」にあったのであり、決して「留佛勤工儉學運動と中國共產黨の一流流を見いだそうとしたものではない」。したがってこの副題は、何長工の意圖に反しているといふのである。

何長工の執筆動機については、すでに「譯者あとがき」（同書

二二頁)に、「著者のねらいは『著者まえがき』にあるように、勤工儉學を社會主義教育のよき傳統として發揚する」ことにあったと明言しているのであるから、いまさら氏の御説に耳を傾ける必要はない。問題はわれわれが「著者の意圖、すなわち『生活』の『回想』と相反した」副題をつけたか否かにある。

氏の意見によれば、フランス勤工儉學運動に、共產主義受容への發展、ひいては「中國共產黨の『一源流』」を見いだすことは、何長工の意圖に反するということになるのであるが、私はそうは思わない。何長工が「著者まえがき」で、「勤工儉學の生活のなかで、生産闘争の實踐を経験し、労働者階級としての思想、感情をやしないはじめ、帝國主義に反對し、封建勢力に反對する確固たる革命の意志と闘争の決意をやしないはじめた」と述べているのは、まさしく五四時期の勤工儉學運動が、フランスでの實踐を通じて、青年たちにプロレタリア的革命思想をうえつけ、「中國共產主義の『一源流』」を生みだしたプロセスを明らかにする用意からでたものである。何長工の意圖は、このプロセスを明らかにすることによって、「革命的な先達の刻苦奮闘の精神と、確固たる革命の意志」を、大躍進期の青年たちに伝える點にこそあった。

この意圖を汲んで、「中國共產黨の『一源流』」と副題をつけたことに何の不都合があろう。もし、氏が、それだけでは何長工の執筆意圖をすべて傳えたことにならないという親切心から批判されたのであるとすれば、例えば「大躍進期の『勤工儉學』」を鼓舞するために、五四時期の勤工儉學生活を回想し、中國共產黨の『一源流』たる先達たちの刻苦奮闘の精神を學ぶ一助を提供する記録」とでも副題をつければ、満足していただけたのであろうか。また、副題という形式の問題ではなく、勤工儉學運動の辯證法的发展(ブルジョア的労働觀の克服をはじめとする)が、フランスにおける中國共產主義の『一源流』を生みだしたという認識自體に、氏が反對されるのであれば、拙論全體をご高覧のうえ全面的な批判を展開していただきた

い。

(2) 「報刊紀述輯録之三」 七〇頁。

(3) 以上 同前 七八頁。

(4) 顧兆熊「馬克思學說」——『新青年』第六卷第五號(民國八年五月)所收に、「このような(修正主義の)批判をへて、マルクス學說の眞意義は、もとより明白となり、その缺點も明確となった」と述べる。

(5) 「報刊紀述輯録之三」 七八頁。

(6) 以上、同前 八〇頁。

(7) 同前 八〇頁。

(8) ホーチミン「私をレーニン主義に導いた道」——ベルナル・B・ファル編 内山敏譯『ホー・チミン語録』河出書房 一九六八年刊所收など参照。

(9) 松元幸子「初期コミンテルンにおける民族解放理論の形成——コミンテルン第二回大會におけるレーニン・ロイ論争を中心に——」——『歴史學研究』第三五五號(一九六九年十二月十五日)所收を參照。蔡和森「馬克思學說與中國無產階級」——『新青年』第九卷第四號(一九二一年八月一日)所收 汲古書院復刻版 五五八頁。

(11) 「報刊紀述輯録之三」 八一頁。

(12) ノースが明らかにしているところによると、一九二二年八月西湖での中共中央擴大委員會で、中共黨員の國民黨加入を勸告したマリーに對し、蔡和森は「國民黨内部に力を凝集させることは階級的差異をばかし、それによってわれわれの獨立政策をはばむという理由」で反對した中央委員の一人であった(ロバート・C・ノース著 現代史研究會譯『モスクワと中國共產黨』恒文社 一九七四年刊)。

(13) 『共產黨月刊』は、無政府主義批判を主要な任務としていたので、勢いプロレタリア獨裁のみを強調し、中國の現實問題、とりわけ農民問題の分析にはあまり意を用いていない。

(14) 丁守和・殷叙彝著『從五四啓蒙運動到馬克思主義的傳播』北京 三

- 聯書店 一九六三年刊 二六六～二六七頁。
- (15) シャオ・ユー著 高橋正譯『毛澤東の青春』サイマル出版會 一九七六年刊 一九六～二〇一頁。
- (16) 以上、『報刊紀述輯錄之三』 八二頁。
- (17) ニム・ウエールズ著 高田爾郎譯『中國革命の内部』三一書房 一九七六年刊 二二〇頁。
- (18) 以上、『報刊紀述輯錄之三』 八三頁。
- (19) シャオ・ユー 前掲書 一九三頁。
- (20) 盛成『海外工讀十年紀實』五四～五五頁。「資本家關上廠門貼出『歇業』兩字就完了。他已發了橫財，再去另開工廠。這裏有手藝與無手藝的工人，同是一樣的餓肚子。」
- (21) 以上、同前 五五～五六頁。「資本家不能銷售集中的產物、經濟不能輸還、資本制度之末日、可要到了」。
- (22) 張松年『英法共產黨——中國改造』——『新青年』第九卷第三號（民國十年七月一日）所收 汲古書院復刻版 四二三頁。
- (23) 蕭三『關於王若飛同志』——司馬璐編『中共黨史暨文獻選粹』（香港自聯出版社 一九七四年刊）第二部所收 一〇二～一〇三頁。「一九二一年在法國蒙達時地方一個公學的教室裏，桌椅擺成四方形。這裏集合了幾十個留法勤工儉學生，在教室裏的櫃子上、牆壁上貼着蔡和森同志翻譯的『共產黨宣言』等等長長的紙上，寫着和森的粗大的密密的字，一張連着一張。走入會場時，大家就圍攏着看。一會，大家入座，開會了。蔡和森、向警予、羅邁（即李維漢）、羅學瓚、張昆弟、李富春、袁子貞……都發了言，以和森同志說的最長，次數也最多。幾天之後組織成了一個『工學互助社』。
- なお、司馬璐はこの文章の原載を明らかにしていないが、中共代表團『四八』被難烈士紀念冊』重慶 一九四六年刊の一編ではないだろうか。
- (24) 何長工 前掲書 一二二頁。
- (25) 郭春濤『哀憶若飛老友』——『解放日報』民國三十五年四月二十三日

- 所載。「工學社開成立大會的時候、有的主張採用無政府主義來改造中國、有的主張馬克思主義來改造中國。當時主張走後一路綫的就是若飛與和森。若飛以滔滔雄辯、舌戰群雄、和森則以洋洋數萬言『論馬克斯主義與中國』之文字、貼着全場壁上作宣傳。主張前一路綫者亦不少有力份子。當時兩條路綫的爭論、互不相下、幾至停會、中間、由和森夫人向警予出來調停、兩種主張暫不作決定、保留待下次大會討論解決、始得圓滿成會」。
- (26) 何長工 前掲書 一一三頁。
- (27) ニム・ウエールズ 前掲書 二二〇～二二二頁。
- (28) 郭春濤 前掲文。「勤工儉學是『主義』可以終身行之、既可行之於法國、亦可行於中國以至全世界」。
- (29) 同前。「勤工儉學是『手段』、不過是貧苦學生暫時藉此學習法國革命思想與謀生技能、準備回國革命之臨時辦法。在資本主義制度之下『勤工』、即無異幫助資本家增加剩餘價值、在資本主義制度殘酷剝削之下、普遍推行『儉學』、更屬不可能」。
- (30) 李書華『十年留法』 四三頁。
- (31) 純雲「一個留法工學生的信」——『晨報副刊』民國十二年十一月二十六日所載。「無政府黨、人數倒有幾十個、但多數是過小有產階級特待生的生活、很少革命的要求、關門說話、完全不做事、謹不過以口談主義為無聊中的慰藉罷了」。
- (32) 列悲「國家與革命」——『工餘』第十三號（一九三三年一月三十一日）、第十四號（一九三三年二月）所收。引用は『五四時期期刊介紹』第三集 二六五頁より轉用。
- (33) 包朴「莫斯科通信」——『工餘』第十四號（一九三三年二月）所收。「同志凌霜的一封信」——『工餘』第十六號（一九三三年四月）所收。包朴は、『晨報副刊』にも「赤俄遊記」——民國十三年八月二十三～三十一日、九月二～八日所載を投稿している。
- (34) 『五四時期期刊介紹』第三集 二六六頁。
- (35) Y・K「一個無政府黨人和一個共產黨人的談話」——『少年』第七號

- (19) 一九三三年三月一日) 所收。『五四時期期刊介紹』第二集 四六頁より轉用。
- (36) Y・K「一個無政府黨人和一個共產黨人的談話(續)」——『少年』第八號(一九三三年四月一日) 所收 一九二四頁。
- (37) 張允侯「列寧著作中譯文年表」——『歷史研究』一九六〇年第四期所收を參照。
- (38) 伍豪「共產主義與中國」——『少年』第二號(一九三三年九月一日) 所收。『五四時期期刊介紹』第二集 四四頁より轉用。
- (39) T・S「甚麼是無政府黨人底道德?」——『少年』第十一號(一九三三年八月十五日)、第十二號(一九三三年十月二十日) 所收。
- (40) 『五四時期期刊介紹』第二集 四四頁。
- (41) 例え、一九三三年六月三日付の李慰農から尹寬への書簡——『共產主義研究會通信集』第三號所收 四六頁では、「吳釋輝、華林以及最負聲望の區聲白都漸漸滾入一途了、弄得一個無政府黨成了煙消雲散的現象」と述べている。
- (42) 「思想問題に關係ある中國の定期刊行物」——『近代中國センター彙報』第八號(一九六六年九月) 所收 一五頁を參照。
- (43) 「啓事 一」——『工餘』第三年第二號(一九二四年九月三十一日) 所收。「在法作工同志近亦多離工入學者、因其既未生利而反在分利亦難續出巨資」。なお、『工餘』は馮克毅、李卓、列悲らが編輯した。曾琦「旅歐日記」——『曾慕韓先生遺著』臺北 民國四十三年刊所收 四六三頁。
- (44) 以上、TS「健社綱領草案批評」——『少年』第十一號(一九三三年八月十五日) 所收 四一〜四二頁。「民國以來的政權、都是軍閥在操縱……中國底社會黑暗如此、社會的危亡在所不免、個人底生存豈能有幸」。「我們的主張、不欲使無產階級爲將來有特權的新貴族、但其廢除資本階級和各種有特權的階級」。
- (46) 同前 三九〜四〇頁。「多數人怎樣團結呢? 蓋人類各有良知、口由良知發表的己見、必可得多數人的同意。團體的成立、即本於各個人
- 的良知」。
- なお、櫻井洪三「支那の社會民主黨と取消派」——『東亞』第六卷第七號(一九三三年七月一日) 所收によれば、一九二五年以前に留佛學生孫偉章、徐特立らが、パリで「中國社會民主黨」を組織し、五三〇以後孫は歸國して上海、四川でその活動を續けたというが、健社との關係などは詳らかにしない。
- (47) 「報刊紀述輯錄之三」八一頁。
- (48) その混亂ぶりは、何長工 前掲書 二〇六〜二〇七頁の「在佛中國社會主義青年團」譯注をみよ。
- (49) 何長工 前掲書 一三八〜一三九頁。
- (50) 胡華「青少年時期的周恩來同志」 九五〜九六頁。
- (51) 同前 九六頁 及び胡華「周恩來總理旅歐時期的革命活動」——『北京師範大學學報』一九七八年第一期(二月二十一日) 所收一八頁。
- (52) 司馬璐編『中共黨史暨文獻選粹』第二部 一〇七〜一〇八頁。
- (53) 「巴黎中國共產黨之活動情形」——『天津益世報』一九二二年十月二十七日所載。「聞趙等(勤工儉學生之一)已正式受廣州之任命、總理歐洲會務。且時得廣州之接濟、所以近來彼等並不作工、而經濟非常活動。且時有外國人出入伊之寓所。在法以前之各種黨派、如工讀社、覺悟社、無產階級共產黨、華工會、現已合而爲一、名曰(留歐中國共產黨青年團)。這幾部分、本有總數四五百人。後有許多人以意見不合、退出者有半數、但今確確實實的已有黨員二三三了。若輩每星期必有聚會、人人受趙等之指揮。趙又受國內之指揮、每月報告一次。黨綱非常嚴酷、以服從二字爲信條」。
- なお、本資料は、P. Léon Wiger *Chine moderne Tome IV, Sten-hsen, 1934 p. 451* から引用した。河間府獻縣の宣教師であったレオン・ヴィゲールは、一九二〇年から三〇年代のはじめにかけ、中國の新聞、雜誌から興味深い記事を收集し、フランス語譯して、『現代中國』全十巻という膨大な資料集をのこした。この資料集には、引用した『天津益世報』をはじめ、『民國日報』『婦女週

報』『覺悟』『星期評論』『時事新報』等等、現在の日本では見られない多くの新聞、雑誌の記事が網羅されている。これらの記事は、一部の巻では發表の年月日順に、また一部の巻では、「社會主義、共產主義、アナキズム」「労働運動」「婦人問題」などの項目別に配列されている。今後、一九二〇年から三〇年代にかけての中國を研究する場合、是非とも参照すべき資料集であるといえる。ドミエヴィル氏も、「それよりもずっと有益なものは、彼が『現代中國』に關する生まの資料を集めた全十巻の著作でありまして、テキストと譯（といっても意譯しすぎたものですが）」と註がついており、第一次中國革命の年代記的な資料集になっております」（ポール・ドミエヴィル、大橋保夫・川勝義雄共譯『フランスにおけるシナ學研究の歴史的展望（下）』—『東方學』第三十四輯所收 一一八頁）と、その重要性を指摘している。

〔旅歐中國共產主義青年團報告（第一號）〕—中國歷史博物館編『紀念周恩來總理文物選編』北京文物出版社 一九七七年刊 一三頁の寫眞よりおこす。「我們旅歐共產主義少年團體、在去年十一月二十日、曾以「旅歐中國少年共產黨」名義、與同志們去過一封公信、誠懇地聲明我們願附屬於國內青年團爲其旅歐之部、同時並向團中建議三事、此信由同志李維漢（羅邁）携帶回國、並委任爲旅歐少共的代表、向團中正式接洽、計時應已達到」。

文中の「建議三事」は、『先驅』第二十四期（一九二三年八月一日）所收の「旅歐中國共產主義青年團提向國內大會的三個建議案」と同一のものかもしれない。

同前。「其後代表團、由□□同志復我們一信、希望我們「旅歐少年共產黨」改名爲「中國共產主義青年團旅歐之部」、在此名稱組織之下、向稱爲「中央執行委員會」應改爲「執行委員會」、同時並指示、我們對於團中綱領的誤解和在歐行動的方略」。

(56) 廖永武「周恩來同志旅歐期間的革命活動」—『天津師院學報』一九七八年第一期（一月三十日）所收 二二頁。

フランス勤工儉學運動小史（下）

(57) 胡華は、この改名を一九二三年のこととしており（前掲書 九六頁）、廖永武も一九二二年十月のこととしている（前掲文 一二頁）が、注（54）、（55）の「報告（第一號）」の文面と、その直後に續く「我們在今年一月得着這封信（コミンテルン中國代表團からの書簡）後」という記述から考えると「一九二三年二月、國內團中央の指示にもとづき、少年共產黨は臨時代表大會を開き、少年共產黨を統一して旅歐中國共產主義青年團にする決定をした」（前掲『紀念周恩來總理文物選編』一一頁）という指摘の方が妥當であらう。

旅歐中國共產主義青年團章程

（中國社會主義青年團旅歐之部）

（一九二三年二月代表大會通過）

第一章 團 員

第一條 凡旅歐中國青年願加入本團爲團員者必須

A、對於共產主義已有信仰

B、承認本團綱領及章程□□□□本團

C、絕對不信奉宗教不屬於任何宗教性質之團體

D、得團員二人之介紹與擔保及本團執行委員會之通過

第二條 國內團員在其旅歐期內得入爲本團團員

第三條 團員加入時請在本團書記處登記呈報中央並由本團執行委員會蓋章□□□□證

第四條 團員加入者按月須交金二方

第二章 組 織

第五條 本團集合旅歐全體團員組成之

第六條 本團代表大會選出執行委員會委員五人任期一年並選出候補委員三人

第七條 本團執行委員會互選書記一人總理本團事務

第八條 本團於執行委員會之下設書記部掌理團中組織財政提案報告發給通告等事

第九條 本團於執行委員會之下設共產主義研究會凡團員均須加入研究

第十條 本團增強旅歐特殊任務於執行委員會之下組織三種委員會
(一)學生運動委員會(二)華工運動委員會(三)出版委員會凡團員必須加入一種以上之委員會服務

第十一條 旅歐各地有團員三人或合相鄰之地得團員三人即組織一地方會

第十二條 地方會書記一人有地方會全體團員公舉之

第十三條 地方會及各委員會辦事細則由口口口定但須經執行委員會之認可

第三章 紀 律

第十四條 中國社會主義青年團中央執行委員會爲本團上級機關

第十五條 本團代表大會爲本團最高機關

(59) “Manifestations des Communistes chinois” : Chine moderne

Tome VI p. 87 ヴィゲールの解題によれば、本資料は一九二四年十一月二十七日ベルリンで發せられた文書である。以下、フランス語からの翻譯は濱田正美氏の全面的援助をえた。

(60) 喚醒「旅法華人之近狀」——『時報』民國十二年十二月三十日所載。

(61) 同前。

(62) 華工のバリ講和條約反對闘争については、李宗侗「巴黎中國留學生及工人反對德和約簽字的經過」——『傳記文學』第六卷第六期(民國五十四年六月一日)所收及び何德鶴「旅法華工的前瞻與後顧」——『國民公論』第二期(一九三七年四月十日)所收を参照のこと。

(63) 何德鶴「旅法華工的前瞻與後顧」——一〇二—一頁。

(64) 何德鶴 前掲文では潘正東であるが、「巴黎華人大會開會記」——『時

報』民國九年六月二十七日所載では、潘振東となっている。

(65) 以上、何德鶴 前掲文 一一頁、前掲「巴黎華人大會開會記」及び「巴黎華工會」——『新青年』第七卷第六號(一九二〇年五月一日)所收を参照。

(66) 伍豪「告工友」——『少年』第二號(一九二二年九月一日)所收。胡華 前掲書 九八頁より轉用。

(67) 何德鶴 前掲文 一一頁、及び「旅法十分會工餘學校的成績」——『時報』民國十二年九月六日所載。

(68) 「歡迎新工人重行出版」——『赤光』第十七期(一九二四年十月十五日)所收 一〇頁。「中國了淪爲半殖民地、即是十九世紀國家主義之賜。解脫方法、唯有聯合世界無產階級與被壓迫民族、打破一切掠奪本國無產階級與被壓迫民族的帝國主義國家」。

(69) 「旅法勞動組合書記部」の名稱が最初に現われるのは、「旅法最近兩個重要會議」——『赤光』第十八期(一九二四年十一月一日)所收 一一頁である。

(70) ニム・ウエールズ 前掲書 一二二頁。

(71) 家康「旅法的「二七」」——『國民』第十二期(民國十四年二月二十五日)所收 一二頁。

(72) ニム・ウエールズ 前掲書 一二二頁。

(73) 「旅法最近兩個重要會議」——『赤光』第十八期所收 一一頁。

(74) 胡華 前掲書 九九頁。

(75) 「任卓宣致碩夫同志書」——『共產主義研究會通信集』第二號所收 二七頁。「我們同志來歐留學的目的、從前雖有種種、然到現時、其重心所在、要不外把自己養成爲一個實行共產主義革命和創造共產主義社會的人」。

(76) 「寬致口口書」——『共產主義研究會通信集』第二號所收 三〇頁。「他(季達)說、他原預備學電科、加入團體後又須學共產主義。於是想顧全兩方、一面學電科、同時又兼學共產主義。結果電科和共產主義都學不好、因每日工餘的時間、精力實應付不暇」。

- (77) 同前 二九頁。
- (78) 以上、「任卓宣致碩夫同志書」二七、二八頁。「我們的事業第一步在革命。革命時期所用的、不是工業農業等等、乃是一種革命行動的工具。」「所以我們只有直接學習革命時期所用的工具。」
- (79) 「卓宣致碩夫同志書」——「共產主義研究會通信集」第三集所收 四二、四四頁。ここでは『少年』の文藝欄をめぐる、十六人の出版委員の討論内容が紹介されている。
- (80) 鈍雲「一個留法工學生的信」。「九月間將由這邊赴俄的、約有二十至二十五之多」。
- (81) 廖永武「周恩來同志旅歐期間的革命活動」二三頁。モスクワが在佛中國共產主義者の憧憬の的であったことは、「我們已知道在赤都的同志、能以團體的眞訓練。我們要看同志子璋那封信、那樣的懇切、實覺得我們西歐的同志太缺團體的訓練了」(巴小白組共產主義討論會報告的節略)——『共產主義研究會通信集』第三號所收 四二頁) という言葉からもうかがえる。
- (82) 何長工 前掲書 一四〇頁。
- (83) 胡華「周恩來總理旅歐時期的革命活動」一八頁。しかし、『紀念周恩來總理文物選編』一二頁及び松濤「理愈明、信愈眞」——介紹周恩來同志在旅歐期間的幾件文物——『革命文物』一九七八年第二期(三月) 所收 一七頁では、いずれも中國共產黨旅歐總支部の成立を、一九三三年二月のこととしている。
- (84) W・K「旅德的明星」——『國民』第十二期(民國十四年二月二十五日) 所收 一二頁。
- (85) 何長工 前掲書 一四五頁。
- (86) 曾琦「旅歐日記」——『曾慕韓先生遺著』所收 四四〇、四四一頁。國家主義派の形成については、蔭山雅博「國民革命期の國家主義派及び『中國青年黨』の動向について」——『學習院史學』第十三號(一九七七年一月十日) 所收という專論がある。また、その反革命活動を詳細に論證したものは、李義彬「國家主義派の形成及其在第一

- 次國內革命戰爭時期的反動活動」——『歷史研究』一九六五年第五期(十月十五日) 所收がある。併せ参照のこと。
- (87) 郭正昭「王光祈與少年中國學會(一九一八—一九三〇)」——『中央研究院近代史研究所集刊』第二期(民國六十年六月三十日) 所收 一七頁參照。
- (88) 陳啓天「新國家主義與中國前途」——『少年中國』第四卷第九期所收。引用は、李義彬 前掲論文 三六頁より轉用。なお、陳啓天の全文翻譯は、『勃興せる支那の國家主義思想』北京滿鐵月報特刊第五(一九二六年六月二十日) に收録されている。
- (89) 舒新城「近代中國教育思想史」上海中華書局 民國十八年刊 三三八頁。
- (90) 曾琦「中國青年黨建黨宣言」——『曾慕韓先生遺著』所收 七頁。
- (91) 以上、任卓宣「再評宣傳東方文化」——『赤光』第十八期(一九二四年十一月一日) 所收 四、五頁。「國際帝國主義之侵略中國、是牠們資本主義發展到最高度所不得不然、絕不是牠們不了解東方文化所致」。
- (92) 恩來「航空學會的害群之馬」——『赤光』第八期(一九二四年五月十五日) 所收 一〇頁、輝暉「青年黨之與教徒軍閥和帝國主義」——『赤光』第十七期(一九二四年十月十五日) 所收 一〇、一一頁及び愚甫「青年黨綫是陳炯明在法所設立底反革命部分啊!」——『赤光』第十八期(一九二四年十一月一日) 所收 一四頁。
- (93) 肇儒「你們就是『反革命』和『軍閥的走狗!』」——『赤光』第二十三期(一九二五年一月十五日) 所收 一二頁。「有些人說你們的『內除國賊外抗強權』是『內聯國賊外結強權』的面具、此語可謂洞見肺腑」。
- (94) 以上、「李愷農致碩夫書」——『共產主義研究會通信集』第三號所收 三三、三三頁。「中國共產革命對向、一大部份是外國資本家(中國資本家是附屬品)與本國作惡的軍閥」。「按照實際情形去說、中國革命正軌也只有共產主義一條路」。
- (95) 以上、同前 三四頁。「不特革命局勢難保、中國將變成純粹奴隸地

位、一聽國際有產階級的宰割。所以共產革命之先、還有扶助民主革命的必要」。「但是這種革命、畢竟是第三階級的、與第四階級不相干」。

- (96) 以上、同前三四〇三五頁。「中國是農業國家、畢竟農人佔大多數」。「同志之中有許多人說、中國共產革命、農民是不成問題的、只要保持他們不動——守中立——就夠了」。「農會是无產農民的保護機關與團結的基礎、可以用他作政治的爭鬭、可以用他來抵抗地主的剝削與官廳的壓迫」。「我們最後目的是要做到工會農會聯成一氣、如此則革命根基方建築得穩固、而革命後的各地方蘇維埃、一舉手間就可以組成」。

- (97) 「寬致慰農書」——『共產主義研究會通信集』第三號所收 三六〇三七頁。「中國底無產階級現在做民主革命、不是白白地爲第三階級帮忙、是爲自身解放底直接的利益。因中國無產階級現在的解放底要求、不是無產階級專政、是獨立的民主共和國」。

- (98) 伍豪「革命救國論」——『赤光』第二期（一九二四年二月十五日）所收 四頁。「第五派革命勢力、現在方在醞釀期中、這便是龐大的農民階級。農民的勢力果成與否、全視努力之人多寡爲斷」。

- (99) 軍事問題についても、フランスの中國人共產主義者は、ほとんど意を用いなかった。たまにあったとすれば、「まず、中露國境で三萬の土人兵を訓練し、次に二、三萬の馬賊と聯合し、そして民族的感情を利用して張作霖の兵を張作霖に反對させる」（張増益致各同志書）——『共產主義研究會通信集』第二號所收 一四頁」という荒唐無稽な張作霖打倒計畫であつた。

- (100) 以上、「寬致慰農書」——『共產主義研究會通信集』第三號所收 三七頁。「但不得預料在這時、政權就全落在第三階級之手、由他把持一切」。「無產階級經過這次民主革命底爭鬭、一定取得很大的勢力、即進而要求無產階級專政」。

- (101) 任卓宣「國民革命底必然和可能」——『赤光』第三期（一九二四年三月一日）所收 四頁。「全國被壓迫民衆、應集中於國民黨旗幟之下、

就是說無論何種派別、尤其是革命的、都必須集於國民黨旗幟之下」。

(102) 王章陵「中國共產主義青年團史論」臺北 民國六十二年刊 八二頁。

(103) 「王京歧致孫鏡鄧達佛函」——李雲漢「從容共到清黨」臺北 民國五十五年刊 一六一頁より轉用。

- (104) 王章陵 前掲書 八三頁。

- (105) 「王京歧寫給總理總務部長黨務部長在法一年工作情形的報告書」——王章陵 前掲書 八四頁による。

- (106) 以上、「旅歐中國國民黨支部第一次大會報告書」——李雲漢 前掲書 一六二〜一六三頁より轉用。

- (107) S・Y「領袖國民革命的中國國民黨」——『赤光』第一期（一九二四年二月一日）所收 五頁。「（一）今後國民黨在政治活動上、應該永遠不和任何軍閥、任何帝國主義者合作。（二）國民黨從前集金力於軍事行動、是很失計於國民運動的。今後宜努力向民衆作政治宣傳、特別是不宜忽略了一支可靠的勞動勢力。（三）國民黨在國際間活動、宜時時注意於弱小民族間的聯絡、而勞農國的蘇聯更宜特與接近」。

- (108) 伍豪「革命救國論」四頁。「我們所最切望而且不憚重覆申說的、便是國民黨今後當注意於國民運動中五派可靠的革命勢力之發展團結和引導、千萬再不要誤認新舊軍閥的四派勢力之調和可以得到那騙人的和平統一」。

- (109) 李天民「周恩來評傳」 一九頁。

- (110) 「Activité chinoise révolutionnaire à Paris」: Chine moderne Tome V, p. 42.

- (111) 京歧「黨務（一月份）」『國民』第十二期（民國十四年二月二十五日）所收 一五頁。

- (112) 「Activité chinoise révolutionnaire à Paris」: Chine moderne Tome V, p. 43.

- (113) ibid. pp. 43~44

- (114) 恩來「再論中國共產主義者之加入國民黨問題」『赤光』第九期（一九二四年六月一日）所收 一六頁の引用。「共產主義的主張、明明

是『階級革命』，明明是『打破私有制度』，明明是『無產階級專政』。怎麼周君是共產主義者，也主張『國民革命』呢？」

(115)

同前 一六〇—一七一頁。「不錯我們共產主義者，是主張『階級革命』的，是認定國民革命後，還有無產階級向有產階級的『階級革命』的事實存在。但我們現在做的國民革命，却是三民主義革命，是無產階級和有產階級合作，以推倒當權的封建階級的『階級革命』。這何從而說到『國民革命』是『階級妥協』？且非如此，共產主義革命不能發生，『打破私有制度』、『無產階級專政』自也不能發生。不走到第一步，何能走到第二步。雖說走到第一步，無產階級尚未得到真正生路。」

(116)

李璜『學鈍室回憶錄』 九八—一〇〇頁。

(117)

京歧「我們要怎樣纔能當一個國民黨人？」——『國民』第十二期（民國十四年二月二十五日）所收 二頁。「近來我時或聽着有些同志說，要非由共產主義團體加入的，纔是真正的國民黨人或純粹的國民黨人。我認為這種說法是狠錯的。」

(118)

紅燄「國民黨駐法總支部果真在森嚴紀律肅清內部麼？」——『赤光』第二十五期（一九二五年二月十五日）所收 一〇頁及紅燄「斥反革命的國民黨右派份子對於孫中山之背叛行為」——『赤光』第二十八期（一九二五年四月一日）所收 一七頁。

(119)

「赤光的宣言」——『赤光』第一期（一九二四年二月一日）所收 一二頁。「再則我們又知道旅居在歐洲的國人大都具有充分的救國熱誠，祇以救國之方多未能趨於一致，且常有因囿於一隅之見而深拒固絕的反對國民聯合。我們現願誠懇而忠實的給大家指示出救國的唯一道路和其他轉灣拐角迂拘而不可可能的途徑。總此，我們所認定的唯一目標便是，反軍閥政府的國民聯合，反帝國主義的國際聯合。但我們這種鼓吹，也決不是武斷的主張。我們是以科學的方法，總合而條理出各種事實來，證明我們的主張無誤。本此，便是我們改理論的少年為實際的赤光的始意，同時也就是赤光的新使命了。」

(120)

橫生「帝國主義底解剖」——『赤光』第二十五期（一九二五年二月十

五日）所收 三頁。「牠真是一隻老虎呵！沒有不侵略弱小民族的帝國主義，正如沒有不吃人的老虎！」

(121)

同前 四頁。「帝國主義以東方尤其是中國為牠的生存基礎。帝國主義一天存在，我們是一天不得解放的。」

(122)

卓宣「法比佔據魯兒的面面觀」——『少年』第八號（一九二三年四月一日）所收 三一頁。「國別的有產階級，是聯合起來剝奪國際的無產階級的。不過不能平均分配擄掠品，有似強盜一般的角逐，換一句話就是他們共同剝奪而不共同享受。」

(123)

「旅歐中國共產主義青年團為救濟德國無產階級事告旅歐華人」——『赤光』第一期（一九二四年二月一日）所收 一一頁。

(124)

恩來「美國帝國主義者之對華政策」——『赤光』第十期（一九二四年六月十五日）所收 五頁。「美政府自華府會議成功，得了列強在中國共同行動的保證後，對華政策即一變其向來陽示親善的面孔，大踏步地趕上英日帝國主義政府在中國實行侵略的故道。兩年多的經歷，已使我們飽嘗美國帝國主義者在華一切設施，殆無不備有錢臭和血腥的混合滋味。」

(125)

同前 六頁。「這個在外表雖有緩急之分，實則同一樣子有帝國主義從中作祟。」

(126)

恩來「太平洋上的新風雲」——『赤光』第十期（一九二四年六月十五日）所收 九頁。「不管日美的戰爭急不急，總之太平洋上的風雲已密布了。他們預備的是帝國主義戰爭。我們反抗帝國主義謀中國獨立的戰士，當茲風雲起後，波濤湧起，切不要如歐洲大戰時一般地逃避港中希圖倖免，要切实地預備，預備乘機掀起太平洋上革命之潮，聯合起各國被壓迫的民衆，携手衝上潮頭，爭先志做弄潮兒！起！起！起！勇敢的國民革命之戰士，請從今日預備起！」

(127)

曾琦「旅歐日記」 四一八—四二〇頁。

(128)

翔「醞釀革命的各國體聯合會」——『赤光』第一期（一九二四年二月一日）所收 七頁。

(129)

「留德學生痛毆梁士詒」——『時報』民國十三年六月二十六日所載。

- (130) 曾琦『旅歐日記』四六六頁。
- (131) “Manifestations des Communistes chinois”: Chine moderne Tome VI p. 84.
- (132) *ibid.* p. 85.
- (133) 李富春「反帝國主義的國際聯合之新發展」——『赤光』第十七期（一九二四年十月十五日）所收 七頁及び「旅法革命黨人第一次示威運動」——同前 九頁。
- (134) “Manifestations des Communistes chinois” p. 85. 「旅法革命黨人第一次示威運動」九頁。
- (135) 「旅法各團體的反軍閥運動」——『赤光』第二十三期（一九二五年一月十五日）所收 一〇～一一頁。
- (136) 任卓宣「旅法華人反帝國主義運動與留法青年黨的告密」——『嚮導』第一三三期（一九二五年十月十二日）所收 大安復刻版通頁 一一九～一二〇頁。
- (137) 同前 一二二〇頁。
- (138) 任卓宣「旅法華人反帝國主義運動與留法青年黨的告密（續）」——『嚮導』第一三四期（一九二五年十月三十日）所收 一二二七頁。
- (139) 同前 一二二七～一二二八頁及び「請看國家主義者怎樣外抗強權」——『中國青年』第八十八期（一九二五年八月八日）所收 六四二頁。なお、この事件については、任卓宣「巴黎獄中寫來的一封信」——『嚮導』第一三〇～一三三期（一九二五年九月十八日～十月五日）所收も参照のこと。
- (140) 京岐「我們的責任」——『國民』第十三期（一九二五年三月十日）所收 一頁。「我們國民黨人的責任是甚麼？我想人人都能回答一聲是『革命』，是打倒軍閥推國際帝國主義的國民革命。但是這種責任必須要在中國才能履行，因為我們所要打倒的軍閥是統治中國的軍閥，我們所要推翻的國際帝國主義是壓迫中國的國際帝國主義。可是現在呢？我們却又不在中國而在西歐。固然我們是該從早歸國奔上革命戰綫的。」

むすび

フランス勤工儉學運動の歴史を繙くに先立ち、われわれはアプリオリにそれを「五四の產物」と規定した。それが見當違いでなかったことは、いまや十分な證據と確信を以て斷言できる。

五四時期の理想主義的雰囲気は、一方で渾沌たる思想の未分化狀況をはらみながら、しかしその中に、中國の新しい未來をきりひらく思想の萌芽を確實に用意していた。勤工儉學の形成される過程においても、われわれは實に複雑な要素がからみあっていたことをすでに知っている。ブルジョア觀念論的な勞働一般に對する賛美、新興ブルジョアジの實利主義的な職業教

育觀、アナキストのユートピア的世界觀などが、その形成に與かつた。しかし、その主旋律を求めるとすれば、ためらいなく、ロシア革命の砲聲に耳を傾けなければならない。五四時期の青年たちは、祖國の解放とロシア革命を理論的に結びつける術はまだまだなかったが、少なくとも新しい時代が勞働者の世界であることは、直感的に感じとつていた。勞働者との結合こそが祖國解放の要であると確信した青年たちは、勤工儉學の理念にその具體的な一つの方途を求め、さらに進んで肉體勞働と頭腦勞働の止揚という崇高な理想をも一舉に實現する意氣込みで、フランスの地をめざした。勤工儉學運動は、高い理想主義にもえた青年たちの救國精神に支えられてはじめて實踐に移されたのである。

しかし、フランスでの勤工儉學生活は、その理想主義の實現が、決して平坦な道でないことを痛感させた。實踐が、青年たちの未分化で曖昧な思想をたえず深化させた。生産現場は、資本主義制度における勞働の意味と資本主義社會の構造を教える最上の教室であつた。たえざる反動勢力との闘争は、眞の敵がだれであるかをこのうえなく鮮明にした。帝國主義世界のメカニズムと祖國の慘狀とが、青年たちの頭の中で、一本の論理の糸で結ばれたとき、かれらはすでに一個の初步的なマルクス・レーニン主義者たる資格をそなえた。

勤工儉學の理念にこめられた肉體勞働と頭腦勞働との止揚という理想は、マルクス・レーニン主義の思想體系から再検討され、より明確な位置づけが可能となつた。その理想は、現代の資本主義社會では決して實現できるものではなく、來るべき社會主義社會に課せられた歴史課題でこそあつた。ここに至つて、青年たちは、現在における勤工儉學の意義を、勞働者階級としての自覺を高め、社會主義社會をつくりだす革命家に生まれかわる訓練におきなおした。その實踐の中で、青年たちは、祖國解放の唯一の途が、帝國主義と封建軍閥打倒の非妥協的な戦いにしかないことも、明敏に洞察するに至つた。

フランスで成長した中國人共產主義者は、マルクス・レーニン主義の原理を學習するうえでは、比較的めぐまれた環境にあつた。しかし、その革命理論を闘争實踐と結びつけて、より深化させることは容易ではなかつた。マルクス・レーニン主義を、中國革命の豊かな現實の中で發展させる作業をいかれたかれらの思想は、往々にして教條主義的傾向をまのがれなかつた。そこ

で、かれらはフランスにおける特殊任務を、理論學習と團體訓練に限定し、來るべき國民革命に、理論を身につけた活動家を大量におくりこむことをめざした。五三〇運動を突破口として、中國全土に國民革命の嵐がまきおこったとき、かれらは躊躇なく革命の戦場に赴いた。かくして、五四時期の勤工儉學運動は、反帝反封建の革命戦士を生みだしたことを以て、その歴史的使命を終えた。

勤工儉學の理念が、再び中國で思いおこされるのは、一九五七年である。五四時期の勤工儉學運動で、反帝反封建の革命戦士に生まれかわった青年たちは、第一―三次の國內革命戦争と抗日戦争を戦いぬく中で、フランスでえた革命理論を發展させ、ついに祖國を帝國主義、封建主義、官僚資本主義の軛からとききはなつことに成功した。一九五七年二月、毛澤東は『人民内部の矛盾を正しく處理する問題について』を發表した。その中で、かれは知識青年を「社會主義的自覺をもつ、教養をそなえた勤勞者にそだてあげる」⁽¹⁾教育方針を指示した。このよびかけにこたえ、中國各地の學校で、一九五七年後半から勤工儉學の運動が熱心に展開された。中華人民共和國の指導者たちが若き日に追求した理想の實現は、社會主義中國の建設をになう次代の青年たちにバトンタッチされた。しかし、そこには何長工が感慨をこめて指摘しているように、「ふたつのこととなった社會制度のもとで勤工儉學をおこなうさいの、本質的なちがひ」⁽²⁾が存在した。

一九五七年の勤工儉學運動が根據とした理論は、「教學を生産と結合させ、理論を實際と結合させ、頭腦勞働を肉體勞働と結合させ、知識分子を勞農と結合させる等のマルクス主義教育の原理であり、社會主義の多く、早く、りっぱに、むだなくの總路線」であつた。そして、その基本目的は「社會主義的自覺をもつ、教養をそなえた勤勞者をそだてあげ、文教事業の質と量の兩面における大躍進を實現すること」⁽³⁾におかれた。

勤工儉學の理念は、かくして社會主義教育の實踐理念として再生した。もちろん、社會主義段階における勤工儉學も、なお存在する階級闘争の中で、たえざる變化、發展をとげるべき未完の運動である。その検討は、すでに本論の領域をこえているが、少なくとも、將來における中國の社會主義建設、共產主義建設の闘いの中で、勤工儉學の理念が、共產主義教育の「すぐ

れた傳統」としてたえず反芻されつづけることだけは、たしかであろう。

注

- (1) 『毛澤東選集』第五卷 北京外文出版社 一九七七年刊 五九六～五九七頁。
- (2) 何長工 前掲書 IX頁。
- (3) 潘懋元「高等學校勤工儉學的原則與問題」——『學術論壇』一九五八年第二期(五月) 所收 五頁。

訂正

- (1) (上)二〇五頁、二行目の「八月二十二日」を「八月二十日」と訂正する。
- (2) (上)二四七頁、注(26)で、毛澤東の北京到着を七月十九日としたスカラビーノの説を退け、九月とした李銳の説を採用したが、胡華「周恩來總理旅歐時期的革命活動」(『北京師範大學學報』一九七八年第一期所收) 一三頁で、七月十九日説が、『留法勤工儉學會湖南會員紀事録』という資料の記載にもとづくことが判明した。

附錄一 フランス勤工儉學運動關係日誌

凡 例

一、年月日順が原則であるが、月のみ判明している事項は、その月の末尾に置いた。月も不明な事項（季節だけの含め）は、前後の關係から適當と思われる個所に配置した。

二、時期について異説の多い事項は、原則として採録しない。ただし、考證により正しい時期を判斷できた事項はこの限りでない。

三、資料來源の省略は、次の三つのグループに分かれる。

A、新聞…略號のあとに發行年月日（ただし、例えば一九一九年は一九と省略）を示す。略號は以下の通り。

時——『時報』

晨——『晨報副刊』

北——『北京日報』

立——『民立報』

B、雜誌…略號…卷號…頁數の順。卷はローマ數字、號は算用數字で示す。頁數は、『教育雜誌』『新青年』『嚮導』『中國青年』二〇年代版の四種にかぎり、それぞれ臺灣復刻版、汲古書院復刻版、大安復刻版、史泉書房復刻版の通頁を採用する。

共——『共產主義研究會通信集』

教——『教育雜誌』

嚮——『嚮導』

湖——『湖南歷史資料』

公——『教育公報』

國——『國民』半月刊（フランス發行）

師——『北京師範大學學報』

集——『中央研究院近代史研究所集刊』

新——『新青年』

C、單行本（またはそれに準ずるもの）…略號の次に頁數（二部、中間にローマ數字で卷數）を示す。

人——『人文月刊』

青——『中國青年』二〇年代版

赤——『赤光』

太——『太平洋』

中——『中國青年』解放後版

天——『天津師範學報』

傳——『傳記文學』

東——『東方雜誌』

論——『國民公論』

王——王章陵『中國共產主義青年團史論』

何——何長工『フランス勤工儉學の回想』

海——盛成『海外工讀十年紀實』

學——李璜『學鈍室回憶錄』

近——舒新城『近代中國留學史』

胡——胡華『青少年時期的周恩來同志』

言——蔡元培『蔡子民先生言行錄』

五——『五四時期期刊介紹』第一、二三集

吳——陳浚海『吳稚暉先生年譜簡編』

蔡——陶英惠『蔡元培年譜』上

三——岑學呂『三水梁燕孫先生年譜』上・下

史——舒新城『近代中國教育史料』第一、四冊

周——中國歷史博物館『紀念周恩來總理文物選編』

全——『蔡元培先生全集』

誕——『周恩來總理八十誕辰紀念詩文選』

狄―『狄君武先生遺稿』
 日―『民國大事日誌』第一冊
 毛―李銳『毛澤東同志的初期革命活動』
 李―李雲漢『從容共到清黨』
 留―卞孝萱『留法勤工儉學資料』―『近代史資料』一九五五―二

所收
 旅―曾琦『旅歐日記』―『曾慕韓先生遺著』所收
 林―林子勛『中國留學教育史』
 C―Léon Wiger Chine moderne Tome I-X
 F―Annie Kriegel Communismes au miroir français

月日	事 項 (資料來源)	月日	事 項 (資料來源)
2・8・10	一九二二 蔡元培、「對於新教育之意見」を發表(立―一二・二・八―一〇) 李煜瀾、蔡元培ら「進德會」を組織(立―一二・二・二六) 李煜瀾、蔡元培、吳敬恆ら「留佛儉學會」を發起(傳―I・三―三六) 蔡元培の斡旋により、留佛預備學校が北京方家衚衕の順天高等學堂趾に設立されることになる(傳―I・三―三六) 「留法儉學會」が『北京日報』に掲載(北―一二・五・八) 「留法儉學會特別廣告」(北―一二・五・一五) 留佛儉學會預備學校開校(同前) 留佛儉學會緣起及會約」が『民立報』に掲載(立―一二・五・二九―三〇) 四川より十數人の學生が預備學校に編入(傳―III・四―三九) 「留法儉學會預備學校招生廣告」(北―一二・一〇・三二―三二)	6・7・9・10	一九二三 留佛儉學生第二班、北京出發(教―V・四―五二七―一) 「留東儉學會意趣書」、『民立報』に掲載(立―一三七・一三三) 蔡元培、上海から歐洲へ亡命(蔡―四三九) 第二革命敗北 吳敬恆、亡命してロンドンに至る(蔡―四三九)
2・2・		22 12 5	一九一四 モンタルジで儉學生講演會。蔡元培講演(蔡―四四三) 第一次世界大戰勃發 儉學生の多くはツールーズに疎開(傳―III・四―四一) 蔡元培ら、「旅法學界西南維持會」を組織、儉學生の救済にあたる(蔡―四四八)
2・		28	蔡元培、吳敬恆らディエブ人絹工場を訪れ、華工に「以工兼學制度」を説く(論―二一九)
5・			一九一五 駐華日本公使日置益、「二十一ヶ條要求」を提出 フランス新聞、二十一ヶ條要求を報道 蔡元培、李煜瀾ら「禦侮會」を組織(蔡―四五三) 李廣安、張秀波、齊雲卿ら、「勤工儉學會」を發起(言―三八
5・			
5・			
5・			
8・			
10・22・31			
11・			
12・			
12・			
?			

月日	事項 (資料來源)	月日	事項 (資料來源)
9 12	五、近一八八 『青年雜誌』(のち『新青年』) 創刊 雲南獨立、第三革命はじまる	6 6	パリ索布尼大廳で中佛演說會(時一七・八・二六)
2	一九一六 フランス陸軍將校トリュプティル來華、梁士詒と參戰華工の交渉にはいる(人一八・一一一五)	8 9	「北京留法儉學會預備學校」(「北京留法儉學會簡章」と同一内容)『東方雜誌』に掲載(東一四・六一一九三)
3 4	中佛教育會、パリ自由教育會で發起會(言一三七二)	15	北京留法儉學會講演會、預備學校の開校を祝う(全一七三四)
4 4	華工學校入學試験(林一三四九)	20	「留法儉學會講演會之演說」、『東方雜誌』に掲載(東一四・九一七七)
4 4	華工學校、パリ東方語言學校で開校式(同前)	7	保定各鄉村勤工儉學會初級預備學校、開校(公一四・一三一四)
5	李廣安、齊連登、フランス政府の委託で歸國、雲南、廣西で華工を募集(論一三一九)	15	「留法勤工儉學會一覽」、『教育公報』に掲載(公一四・一三一〇)
6 7	トリュプティルと惠民公司の間で、「招工合同」の調印(三一三〇〇)	18	ロシア十月革命おこる
8 8	中佛教育會、パリ自由教育會で成立大會(林一三四七)	19	一九一八 「華法教育會演說辭」、『東方雜誌』に掲載(東一五・一一二七五)
11 11	惠民公司の華工第一陣一七〇〇人、塘沽から出發(人一八・一一二二)	20	新民學會、蔡和森の家で成立大會(毛一七二)
15 20	『旅歐雜誌』創刊(五一三一一九三)	下旬	新民學會へ、楊昌濟の留法儉學會を知らせる手紙がとどき、蔡和森、調査のため赴京(毛一八四)
19 8	華工第一陣、マルセイユ上陸(論一三二九)	1	李大釗「法俄革命之比較觀」(言治三期)發表
19 8	蔡元培、北京大學校長就任のため、上海に歸着(蔡一四六九)	1	毛澤東、羅學瓚ら二十數名と北京に赴く(師一九七八・一一三)
19 8	旅佛學界、パリ中國學會で黃興追悼會(五一三一一六五)	11	中佛協進公會、北京の江西會館で開會式。到る者千餘人(時一八・一〇・二四)
10	一九一七 『華工雜誌』創刊(五一三一一九七)	11	第一次世界大戰終る
10	中佛教育會の華林、歸國、留佛儉學會の再興をはかる(新一三・二二一九)	13	李大釗「Roussseau 的勝利」(新一五・五四九三)
15 1	「北京留法儉學會簡章」、『新青年』に掲載(同前)	13	一九一九 パリ講和會議はじまる
15 1	「留法儉學會緣起及會約」、『東方雜誌』に掲載(東一四・四一九三)	2	コミンテルン創立大會

3	3	3	4	3	5	5	5	7	7	7	7	7	7	7	8	8	9	9	11	12	12	12	15
17	31	9	VI・六 一四二	五四運動おこる	留佛勤工儉學生第一陣、マルセイユ到着(教一六・六一六九八四)	留佛勤工儉學生第二陣、マルセイユ到着(同前)	華工儲蓄會大會、李煜瀛周太玄ら演説(時一九・一〇・六)	モンタルジで勤工生、華工、フランス革命記念集會(同前)	湖南留佛機械科預備班、修了(湖一九五九・四一五九)	留佛勤工儉學生會通過章程大會(東一六・一一一九六)	留佛勤工儉學生會、職員選舉(同前)	四川勤工儉學生、日本船乗船を拒否(時一九・七・一一)	留佛勤工儉學生會、成立大會(東一六・一一一九六)	華僑協社、成立大會(時一九・一一・一五)	中佛教育會湖南分會成立(湖一九五九・四一五六)	上海工業預備クラス入試(時一九・九・二〇)	『旅歐周刊』創刊(五一・三二〇四)	リヨン大學評議會、中佛大學の誘致を決定(時二〇・六・一一二)	向警予、蔡暢ら湖南女子留佛勤工儉學會六人、上海出航(時一九・一一・二六)	湖南女子留佛勤工儉學會、成立大會(時一九・一二・一二)	一九二〇	華工會評議部議長潘正東、佛總理クレマンソーに面會、待遇改善を要求(新一七・六一五三五)	
2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	5	5	5	6	6	7	7
2	8	10	11	25	26	2	5	19	20	21	21	21	24	5	6	23	1	20	22	上旬	22	6	15
蔡和森、向警予らパリ到着(湖一九五九・四一六九)	李煜瀛、歸國。一日の歡迎集會で勤工儉學大成功の演説(時二〇・二・二八)	吳敬恆・上海で李煜瀛と中佛大學の相談(吳一四九)	華僑協社、第一次講演會(留一七八)	中華民國預備赴法學生聯合會成立大會(時二〇・二・一二)	吳敬恆、岑春煊に面會、中佛大學への援助依頼(吳一四九)	「西南大學組織大綱」成り、吳敬恆、委員に選出(太一六・一六)	岑春煊、中佛大學に一五萬元援助(吳一四九)	張繼、フォンテンスブロー、ムラン公學を視察(留一七七)	中佛教育會の演説會がパリで開催(時二〇・六・五)	リヨン大學、砲臺の使用許可を中佛教育會に打電(時二〇・六・一三)	褚民誼と張繼、リヨンに赴き砲臺を中佛大學に改築する決定(同前)	フォンテンスブロー中學で中佛親善遊藝會(時二〇・六・三)	中佛教育會第一次學生代表談話會開催(時二〇・六・七)	國際和平促進會、勤工儉學生歡迎大會開催。徐特立、許德珩ら演説(時二〇・五・二七)	パリ中國人大會、華工の待遇改善を要求(時二〇・六・二七)	吳敬恆、中佛大學修築狀況視察のため上海出航(吳一五〇)	メーデー、中佛教育會は勤工儉學生に参加するよう指示(中一九六一・一六一三)	蔡和森、九月までに三通の書簡を毛澤東に寄せ、共產主義を論ずる(湖一九五九・四一七七)	第二次中佛協進公會、北京江西會館で開催(時二〇・六・二四)	パウルヴェ使節團、北京到着(時二〇・六・二五)	新民學會フランス分會、モンタルジで七日間の會議(湖一九五九・四一六八)		

月	日	事	項	（資料來源）	月	日	事	項	（資料來源）
7	19	コメンテルン第二回大會「民族・植民地問題に關するテーゼ」	蔡元培の特使高魯來佛（留一八四）	2	17	教育部、在佛公使館へ「勤工儉學生遣送回國」の打電（史一	一三三四）		
10	2	中佛教育會 人事異動（留一八五）		2	27	工學五助社、パリで留佛勤工儉學生大會開催（何一二一四）			
11	初旬	周恩來ら覺悟社メンバー、ポルトス號で上海出航（胡一七七）		2	28	二八運動、四〇〇餘の學生が公使館包圍（教一七八五			
11	24	蔡元培、劉清揚ら學生と上海出航（時一〇・一一・一九）		3	25	勤工儉學生二人、公使館の勸告により歸國（史一三三〇）			
12	15	留佛勤工儉學生第十七陣（最終）上海出航（時一〇・一二・二五）		3		少年中國學會パリ分會設立（集一〇・一一七）			
12	27	蔡元培、マルセイユ着（傳一三・四一四三）		3		徐世昌の特使朱啓鈴來佛（海一六三）			
12	30	フランス社會黨ツール大會で社共分裂		4	21	モスクワ東方勤勞者共産主義大學開校			
冬		リヨン中佛大學協會設立（傳一三・四一四五）		4		吳鼎昌、中佛實業銀行改組を名目に來佛（史一三三三）			
この頃		凶死者五、病死者六一、入院八〇餘にのぼる（學一七〇）		5	14	中佛合同委員會成立、一日六フランの援助（傳一四一			
		一九二一		5		七）			
1	2	蔡元培、パリ入（傳一三・四一四三）		6	6	吳敬恆、廣東政府教育部で中佛大學設立準備（吳一五〇）			
1	8	教育部、「停送勤工儉學生公告」を發す（教一三・二一七九		6		王若飛ら二二五人、リヨン中佛大學を工學院に改める要求大會			
1	12	言（史一三三四）		7	30	趙世炎ら、パリ哲人廳で拒款大會（誕一六八）			
1	16	蔡元培、「通告一」で中佛教育會と留佛勤工儉學會の分離を宣		7	1	中國共產黨創立			
1		言（史一三三八）		7	25	中佛借款契約草案調印（誕一六八）			
1	18	廖世功、蔡元培、教育部へ勤工儉學生派遣停止の打電（林一三		8	29	中佛秘密大借款反對大會（同前）			
1	21	六三）		8	21	パリで再度借款反對大會（胡一八八）			
1	26	教育部、「再阻勤工生赴法」の通電（同前）		8	13	吳敬恆、中佛大學生一〇〇餘人を率い上海出航（狄一六			
1	28	各地區代表、華僑協社で討論ののち中佛教育會職員に抗議（留		9	28	クルーゾ工場の勤工儉學生、中佛大學奪回運動の決議（留一			
1		一八六）		9		〇一）			
2	4	各地區代表、領事館で討論、月四〇〇フラン補助の要求（留一		9	3	駐華フランス公使、フランス政府への打電（F一八五）			
2	11	一九〇）		9	5	佛政府、中佛合同委員會の解消宣言（史一三三三）			
2		パリ滯留代表、全勤工儉學生へ闘争支援の要請文（留一八七）		9	10	クルーゾ工場の勤工儉學生、中佛大學奪回宣言（留一〇四）			
		蔡和森、「馬克思學說與中國無產階級」を『新青年』へ寄せる		9	17	王若飛ら開會、中佛大學奪回宣言（史一三三三）			
		（新IX・四一五五五）				パリで留佛勤工儉學生各地代表大會開催・リヨン進軍を決議			
						（胡一九一）			

9	10	10	10	10	10	11	年末	1	3	6	8	8	2	1	17	20						
21	2	3	3	10	10	10	23	15	15	13	10	10	10	10	10	10						
リオン進軍で、一三〇餘名逮捕さる(史一三三三)	吳敬恆らマルセイユ到着(狄一六)	公使館、逮捕學生の強制送還を本國へ打電(史一三三四)	吳敬恆、パリへ。章士釗、鄭毓秀らと解決辦法を討論(史一三三三)	雙十節を期し、中佛大學開校式(時一三・一一・二)	逮捕學生一〇四人、リオンからマルセイユへ(史一三三三)	ポールカ號で一〇四人強制送還(F一八七)	中佛合同委員會の補助金停止(史一三三三)	一〇四人上海到着(東一三・二四一二五)	周恩來、趙世炎、王若飛ら旅歐中國少年共產黨を發起組織(胡九六)	無政府主義派、『工餘』を創刊(五一三一二六五)	周恩來、初めてドイツへ行く(周一九)	旅歐中國少年共產黨成立大會(C一六一八七)	『少年』創刊(五一二二三九)	國民黨、旅歐支部設立のため王京岐を中佛大學へ派遣(王一八二)	西湖中共中央委員會、黨内合作決定	林祖烈、任卓宣が李光漢の横領を詰問(時一三・七・一六)	李光漢、留佛勤工儉學學生總會事務所を襲撃さす(同前)	コミンテルン第四大會「東方問題に關するテーゼ」	旅歐中國少年共產黨、團中央へ加入申請の書簡(周一三三)	『先聲週報』創刊(學一九〇)	コミンテルン中國代表團より旅歐少年共產黨へ指示(周一二三)	旅歐少共、臨時大會で旅歐中國共產主義青年團への改名と章程を決議(天一九七八・一一二二)
3	4	5	5	5	6	7	7	7	7	9	10	11	12	12	2	2	2	2	2	2	2	2
13	25	5	15	15	16	17	3	15	19	29	28	25	2	17	1	1	20	20	16	24	20	31
「旅歐中國共產主義青年團報告(第一號)」(周一二三)	王京岐、國民黨中央へ旅歐共青團との合作について問合せの打電(李一一六一)	臨城事件	共產主義研究會パリ組常會で主義と専門の討論(共一二三〇)	旅歐共青團の周恩來ら、リオンで王京岐と協議(王一八三)	王京岐、共青團の合作希望を黨中央へ打電(李一一六一)	旅佛各團體聯合會。列強の中國鐵道共同管理に反對(旅一四一八)	社會博物館で、旅佛華人反對國際共管鐵路大會(旅一四二〇)	王京岐、旅歐共青團との合作批准を申請(日一二四〇)	國民黨總務部長より合作批准の打電(李一一六一)	旅歐共青團員二〇二五人、クイトヴェへ(晨一三・一一・二六)	工業勵進會で、第二次旅佛華人反對國際共管鐵路大會(旅一四三六)	國民黨旅歐支部、リオンで成立大會。周恩來の演説(李一一六二)	中國青年黨、フォントネヨ・ロイズで成立大會(旅一四四〇)	國民黨パリ通信處第一回大會(C一四二二)	國民黨一大大會	旅佛各團體聯合會改選會(赤一一七)	『赤光』創刊(赤一一二)	旅歐共青團「爲救濟德國無產階級事告旅歐華人」(赤一一二)	邵元冲、ビヤンクールで大講演會(C一四二二)	國民黨パリ通信處、邵元冲歡迎集會(同前)	中國青年黨、哲人廳で第一次全體大會(旅一四五五)	留德學生、梁士詒を毆打(時一二四・六・二六)

月日	事 項 (資料來源)	月日	事 項 (資料來源)
6 .	旅佛各團體聯合會職員會議、留德學生の支援を討議 (旅一四六三)	11 .	旅歐共青團「爲徐樹錚來法告旅歐華人」(赤一二・二二一〇)
6 .	國民黨中央監察委員、張繼ら「共產黨効文」を提出	31	旅佛各團體聯合會、徐樹錚來佛反對集會 (赤一三三・一〇〇)
7 .	國民黨旅歐支部、地理學協會で黨員大會 (C-V-四三三)		一九二五
7 .	旅佛各團體聯合會代表大會、章程改正を討議 (旅一四六六)	3 .	國民黨旅歐支部、ヨーロッパ代表大會 (國一二二・一四)
8 .	周恩來、モスクワ經由で歸國 (胡一〇七)	18	國民黨旅歐支部、旅佛各團體三三を召集して國民黨議に關する討論 (國一二二・一四)
9 .	青年黨、「宣傳東方文化」の宣言を發表 (赤一八・一四)	7	ブランキ街で、旅佛勞働組合書記部主催の二七慘案記念集會 (赤一二五・一七)
9 .	革命派、地理學協會で江浙戰爭反對の反帝集會 (C-VI-八四)		留佛勤工儉學學生總會、改選 (國一二三・九)
9 .	第一インター六〇周年を期し、佛共と協同で、「反對帝國主義干涉中國」大集會開催 (赤一七・九)	15 1	旅佛各團體聯合會中山追悼集會開催。佛共・青年團のほか、ベトナム、朝鮮の代表も出席 (赤一二八・一五)
9 .	共產主義研究會、一一月まで九回の社會科學討論會 (共一〇一・一六)	3 .	ブランキ街で、旅佛東方民族追悼孫中山大會 (赤一二八・一二)
10 .	國民黨主催の雙十節記念集會。青年黨は分裂集會 (赤一七・九)	12	五・三〇事件
10 .	華工總會、赤光社、旅佛勞働組合書記部等一八團體、參戰華工善後委員會開催 (赤一八・一一)	30 4	中共旅歐支部、旅歐共青團、國民黨旅歐支部、聯合で五・三〇運動支援のアピール (綱一二三・一二・九)
11 .	赤光社、「我們對於北京政變態度并告旅歐華人」 (赤一八・一七)	7	ブランキ街で旅佛華人反帝大會。旅佛華人援助上海反帝國主義運動行動委員會成立 (同前)
11 .	旅歐共青團「爲俄國革命七周年紀念告旅歐華人」 (赤一九・一〇)	7	『赤光』反對帝國主義屠殺上海市民特刊 (五・二二・五〇)
11 .	ブランキ街で、赤光社、華工總會主催のロシア革命七周年記念集會 (赤一八・一六)	14	反帝集會をめぐる佛警察隊と對峙 (綱一二三・一二・二〇)
11 .	ピヤンクールで、旅佛勞働組合書記部主催の參戰華工死亡追悼集會 (赤一八・一六)	22	行動委員會二〇〇人、公使館襲撃 (綱一二四・一二・二七)
		24	中國青年黨、襲撃者の住所を密告 (青一八八・一六四・二)
			任卓宜ら二〇名の共產主義者被捕 (綱一二四・一二・二七)

附錄二 フランス勤工儉學運動關係新聞雜誌記事目錄

凡 例

- 一、本目錄は、フランス勤工儉學運動に相當關係する記事に限定し、華工問題及び他のヨーロッパ諸國の中國人留學生については、一部を除き割愛した。また、『旅歐雜誌』『華工雜誌』『旅歐周刊』などの記事は『五四時期期刊介紹』第三集を参照されたい。
- 二、本目錄中、『時報』記事がほぼ半ばを占めるが、京都大學所藏の『時報』は、一九二一年一月〜二三年六月の二年半分を缺いている。
- 三、配列は原則的に發行年月日順にしたがう。ただし、發行年月しかわからないものはその月の末尾、發行年だけのものはその年の末尾に配列する。また連載の場合は第一回の發行年月日にしたがう。
- 四、冒頭に*印がついているのは、主に『五四時期期刊介紹』全三冊によりその存在を確認し、筆者未見を示す。備考欄に胡華とあるもののみ、胡華『青少年時期的周恩來同志』によつてゐる。
- 五、タイトルを「」でくくつてあるのは、Chine Moderne 所收分を適當に中國語に重譯したことを示す。
- 六、所載紙誌の欄は、次の原則にしたがう。
a、新聞については紙名のみのみ。

b、雜誌については誌名と卷號を示すが、發行年月がそのまま卷號の代用となつてゐるものはこの限りでない。

c、紙誌名の省略は、字數の多い次の五種に限る。

NCH—North China Herald

寧波—寧波工廠周刊

浙江—浙江省立第一師範學校校友會十日刊

安徽—安徽教育月刊

留法—留法勤工儉學學生週刊

七、發行月日を「」でくくつてあるのは、前後の卷號の發行年月日から推計したことを示す。

八、備考欄には、筆者がその掲載紙誌でみる事ができず、轉載文獻によつたものについて、その文獻名を示す。その省略は次の通り。

CM—Wieger Chine Moderne Tome I~X

湖南—『湖南歷史資料』一九五九年第四期

近代—舒新城『近代中國教育史料』第一冊

中國—林子勳『中國留學教育史』

著 者	題	名	所載誌卷號	發行月日	備考
一九二二年					
留法儉學會		北京日報	5	8	
留法儉學會特別廣告		北京日報	5	15	
願入留法儉學會者鑒		北京日報	5	17	
留法儉學會緣起及會約		民立報	5	29	
留法儉學會預備學校招生廣告		北京日報	10	22	
			31	30	
吳敬恆	答友人問留法儉學會書	民立報	11	25	
汪精衛	汪精衛論學書—留法儉學會之	民立報	12	10	
大發達			28		
一九一三年					
吳敬恆	答友人問留法儉學會書	中華教育界	3	15	
	貧兒赴巴黎求學	教育雜誌V	7	10	
	貧兒赴巴黎之壯遊	中華教育界	7	15	

著者	題名	所載誌卷號	發行月日	備考	著者	題名	所載誌卷號	發行月日	備考
一九一七年	北京留法儉學會簡章	新青年 III—2	4.1		*黃炎培	與李石曾君談職業教育	教育與職業 12	3.15	
	留法儉學會緣起及會約	東方雜誌 XIV—4	4.15			學生會歡迎留法學生	學燈 3	3.15	
	北京留法儉學會預備學校	東方雜誌 XIV—6	6.15			上海留法儉學會意趣書	時報 3	3.16	
吳稚暉	歐戰前後兩游法國記	東方雜誌 XIV—6	6.15		平心	開會歡迎留法學生誌盛	時報 3	3.16	
	旅歐華法教育會一覽	太平 I—4	6.15			留法勤工儉學會學生首途	時報 3	3.18	
	與全國各縣籌派公費留法商權書	教育公報 IV—9	7.20		*	留法勤工儉學會學生赴法	學燈 3	3.19	
華林	留學生集滬出發	新青年 III—6	8.1		*	歡送赴法留學生	時報 3	3.29	
	中法聯絡之表示	時報 8	8.21			歡送第二次赴法國留學生	學燈 3	3.29	
	留法儉學會講演會之演說	時報 8	8.26			第二批留法學生出發	時報 3	3.30	
	留法學生出發	東方雜誌 XIV—9	9.15		蕭子昇	西游雜記	國民 I—4	4.1	
	青年會與留學生之關係	時報 9	9.19		子	學生會送別留法學生	時報 4	4.14	
	留法勤工儉學會一覽	青年進步 9	9.20		子	留法勤工儉學預備學校之近況	學燈 4	4.19	
一九一八年		教育公報 IV—13	10.20		子	高等法文專修館開校	學燈 4	4.19	
李書華	敬告留學生與教育當局	東方雜誌 XV—1	1.15		*	留法勤工儉學會學生赴法	教育雜誌 XI—4	4.20	
	華法教育會演說辭	東方雜誌 XV—1	1.15			赴法留學生姓名	教育潮 1	4.20	
吳敬恆	論旅歐儉學之情形及移家就學之生活	新青年 IV—2	2.15			華工日報—銷二三千份	時報 5	5.19	
	在法留學生之苦況	時報 6	6.4			巴黎人民最近之大激動	新湖南 I—1	6.15	
	在法德留學生生活之比較	時報 6	6.9			某國人在巴黎報紙上之造謠	新湖南 I—1	6.15	
*	留法之勤工儉學會	時報 6	6.9			在法韓國代表最近之活動	新湖南 I—1	6.15	
	中法協進會之盛會	勞働 5	7.20			留法華人對於和平會議之運動	新湖南 I—1	6.15	
	中法協進會之性質談	時報 7	7.21			巴黎通信社工人的巴黎	覺悟 6	6.16	
	中法協進會大會誌盛	時報 10	10.24		即	留法學生之送別會	時報 7	7.6	
一九一九年		時報 10	10.22			赴法學生會之觀	時報 7	7.7	
蕭子昇	游歐瑣談	國民 I—3	3.1			歡送赴法學生紀事	時報 7	7.7	
						愛國工人赴法求學	時報 7	7.9	
						上海學生會歡送留法儉學會學生赴法之攝影	時報 7	7.9	
						留法學生明晨出發	時報 7	7.12	

著者	題名	所載誌卷號	發行月日	備考	著者	題名	所載誌卷號	發行月日	備考
巴黎通信社	歐洲生活騰貴之研究 要人歸國之一片談話——汪精衛之談話	時報 時報	11.16 11.17		李璜	旅歐隨感錄	學燈 星期日24	12.21 12.21	
新濤	赴法留學的比較觀	星期日21	11.30		吳敬恆	爲提倡留法儉學會者痛哭 海外中國大學末議	時報	12.23 12.23	1.6
	女子留法勤工儉學會成立	湖南大公報	12.3	湖南		旅滬湘省學生之歡送會	時報	12.24	
	學生赴法之踴躍	時報	12.4			關於留法學生之紀載	時報	12.26	
	考送留法學生之新章	時報	12.5		薛世綸	留法儉學生之首途	時報	12.29	
	浙江留法同學會成立	時報	12.7			留法勤工儉學問題的討論	學燈	12.30	
	法文專修館中之女生（男女同學之先聲）	時報	12.8			留法校友消息	浙江9		
	浙江留法同學會歡送職員記	時報	12.8						
	留法儉學生明日放洋	時報	12.9						
	華法教育會之歡送會	時報	12.9						
	浙江留法同學會之職員攝影	時報	12.10		汪精衛	汪精衛述留法儉學	時報	1.3	4
	留法儉學生出發記	時報	12.11		吳玉章	吳玉章君在四川留法預備學校的演說	覺悟	1.7	
	華法教育會慎選學生	時報	12.11			留法勤工儉學的近況	覺悟	1.8	
	湖南近事紀聞——女子留法之發軔	時報	12.12			留法儉學生電止選送	時報	1.11	
	中國留法學生人數	時報	12.12			留法勤工儉學雜述	時報	1.12	
	儉學會職員舞弊結果	時報	12.14		汪精衛	停止遣送留法學生	時報	1.13	
	江浙留法同學會簡章	時報	12.14		汪精衛	汪精衛先生演說預誌	時報	1.15	
	湘省女子留法儉學會成立	時報	12.15		汪精衛	汪精衛演說留法情形	時報	1.19	
	留法儉學生出發記	時報	12.15		汪精衛	留學法國之近狀（在寰球學生會）	覺悟	1.19	
巴黎通信社	留法勤工儉學詳記	東方雜誌 XVI—12	12.15		巴黎通信社	Chinese Students in France The Thrift System	NCH	1.24	
	赴法勤工學生之困境	時報	12.16			留法勤工儉學雜述	時報	1.31	
	中國留法學生觀	時報	12.17			赴法學生之聯合大會	時報	2.4	
	赴法儉學與勤工儉學者鑒	時報	12.17			汪精衛最近之演講	時報	2.7	
	最近赴法湘學生調查	湖南大公報	12.18	湖南		赴法學生聯合會將成立	時報	2.9	
	留法學生的一封信	學燈	12.19		*	赴法學生開會紀事	時報	2.12	
志淵	關於湖南留法勤工儉學學生人數及巴黎華法教育會的介紹	湖南大公報	12.19	湖南	李石曾	法國通信 王良翰致栢盒	工讀5	2.16	
儀齋	Chinese in France—Students Numbered by Thousands	NCH	12.20	湖南	熊志南	李石曾之勤工儉學談 【旅歐中國學生航海記】	學生雜誌	2.28	29
						法總商會優待儉學生	時報	2.30	

著者	題名	所載誌卷號	發行月日	備考	著者	題名	所載誌卷號	發行月日	備考
*李璜	法蘭西工黨組織	少年世界 I—11	11.1		無名	令阻赴法勤工儉學生 無名從法國寄來的信	湖南大公報	1.25	湖南
*蔡和森	赴法學生有被拒消息 一般在法華工、學生、商人的 組織和建設	少年世界 I—11	11.1		無名	勤工儉學生不能繼續接濟 教育部布告暫行停送赴法學生	湖南大公報	1.26	湖南
包振宇	赴法學生之調查	湖南大公報	11.13	湖南	里昂之中國大學校舍 兼公	教育部雜誌	2.20	2.20	湖南
*戴啓東	赴法紀略	晨報副刊	11.19		湘政府急宜設法救濟留法學生	教育雜誌	2.20	2.20	湖南
	北大同學歡迎蔡子民	時報	11.21		法國的工業實習學校	湖南大公報	2.28	2.28	湖南
	中法實業學校之組織	時報	11.24		教育部再阻勤工赴法	太平洋 II—10	3.5	3.5	湖南
	歡迎劉清揚君赴法攝影	時報	11.24		介紹巴黎中國書報社	教育雜誌	3.20	3.20	湖南
	歡迎蔡子民出洋記	時報	11.25		巴黎無產階級女子的生活概況	教育雜誌	3.20	3.20	湖南
王光祈	電阻勤工儉學生赴法	時報	11.25		教育界再阻勤工赴法	晨報副刊	3.25	3.25	湖南
立富春	赴法女生攝影	少年中國 II—8	11.26		留法學生游藝會攝影紀念	覺悟	4.6	4.6	湖南
	旅歐雜感	少年中國 II—8	11.26		留法學生之星期談話會紀事	教育雜誌	4.20	4.20	湖南
	蔡子民歐遊記略(一)	時報	11.27		巴黎會員之星期談話會紀事	少年中國 II—10	4.20	4.20	湖南
	法國哈佛柳史雷德工廠的華工	工商之友	12.3		留法勤工儉學之大波瀾	天津益世報	5.9	5.9	湖南
	華法教育會消息彙誌	時報	12.5		爲湖南留法勤工儉學生告急	湖南大公報	5.25	5.25	湖南
	華法教育會之餘聞	時報	12.10		留德生學中德文化研究會	學燈	6.11	6.11	湖南
	留法儉學生放洋紀	時報	12.11		巴黎分會之成立	少年中國 II—12	6.12	6.12	湖南
立	歡送我國赴歐人士紀盛	時報	12.12		英法共產黨——中國改造	新青年 IX—3	7.1	7.1	湖南
張夢九	中國之 Franco-Chinese Enterprises	NCH	12.16		留法勤工儉學界底俯瞰圖(付	覺悟	7.6	7.6	湖南
李璜	蔡子民歐遊略記(二)	時報	12.18		留法勤工儉學會(章)	教育雜誌	7.20	7.20	湖南
	旅法兩週底感想	少年中國 II—6	12.19		留法勤工儉學生使館請願記	新青年 IX—4	8.1	8.1	湖南
	留學平議	少年中國 II—6	12.25		馬克思學說與中國無產階級	民權 II—42	9.17	9.17	湖南
					勤工儉學感言	晨報副刊	9.18	9.18	湖南
					里昂中國大學海外部消息	新潮 III—1	10.1	10.1	湖南
					赴法途中漫畫	覺悟	10.18	10.18	湖南
					留法勤工儉學生底運命	少年中國	11.7	11.7	湖南
					初秋之巴黎	III—4.9.12	11.12	11.12	湖南
					對於被迫歸國的勤工儉學生應有的援助	覺悟	12.1	12.1	湖南
*陳澤孚	France and China—M. Painlevé on his Mission	NCH	1.1						
*孫福熙	留法勤工儉學生底一封信	晨報副刊	1.11						
	赴法途中漫畫	晨報副刊	1.21						

一九二一年

[illegible]

附録三 革命派機關誌（三種） 内容記事目録

凡 例

一、『フランスにおける革命派の三種の雑誌』『少年』『赤光』『國民』の記事目録である。『少年』の Centre du Documentation sur l'Extrême Orient の所蔵にかかるが、マリアンヌ・バスチド教授の好意により、マイクロフィルムのかたちで入手することができた。

二、『少年』は、在佛中國人の間で最初に發行された共產主義宣傳雑誌である。月刊が原則で第九號までは嚴守されたが、以後は必ずしも守られていない。ガリ版刷、横組の誌面で、版型は『五四時期期刊介紹』第二集によれば、第六號までは一六開本（B5版）、第七號以降は二四開本（A5版）という。每號、三〇〇四〇頁。第六號まで通信處は、少年雜誌社、Boite postale No. 9 Paris XIII^e, 第七號以降、少年雜誌社、華僑協社内 39, Rue de la Pointe La Garene Colombes Seine P^e だった。第五號には、フランス國內、歐洲、アメリカ、中國における價格、郵送料の一覽表が掲載されているが、基本定價は每號二五サンチーム（因みに『嚮導』は中國書報社で每期三〇サンチーム）。第一、三、七、九、十號の目録は『五四時期期刊介紹』で補ったところがある。なお、第六號の發行年月日は、廖永武「覺悟社・『覺悟』・『覺郵』」―「南開大學學報」一九七八年第四・五期合刊（八月二十九日）所收によって知りえた。

三、『赤光』は、名目上は赤光社の發行となっているが、實質上は、旅歐中國共產主義青年團、中國共產黨旅歐支部の共同機關誌といつてもさしつかえない。半月刊が原則であるが、單純計算によれば、第十一・十六期の間で半月の遅れがでる。また、第十九期は十一月十五日發行予定であるが、ロシア革命七周年で七日にくりあげ發行した。ガリ版刷、縦二段組（ただし、重要な宣言などは一段組）の誌面で、版型は『五四時期期刊介紹』第二集によれば、五・三〇事件特刊で、三二開本（B6版）

フランス勤工儉學運動小史（下）

という。每期、一〇頁内外。通信處は赤光社、華僑協社内、39, Rue de la Pointe, La Garene-Colombes Seine P^e だった。定價は每期一〇サンチーム。何期まで發行されたかは未詳。

四、『國民』は、中國國民黨駐法總支部の機關誌である。半月刊が原則であるが、『本報改版底幾句話』（第十二期）によれば、一九二四年前半は不規則ながら半月刊で、後半も不規則ながら週刊で發行し、二四年末から二五年二月十五日の第十二期までは休刊していたという。ガリ版刷、縦二段組（卷頭は除く）の誌面で、版型は明らかにしない。每期、一〇〇一五の頁數である。編輯處及び發行處は、Wang（王京歧）14, Rue Rollin Paris V^e。何期まで發行されたかは未詳。

I 『少年』月刊

第一號（一九三二年八月一日）

缺

第二號（一九三二年九月一日）

祝少年共產國際

中國社會主義青年團

中國共產黨與其目前政策

勤工儉學生的團結

告工友

共產主義與中國

胡適等之政治主張與我們

告少年（續）

列寧 R 伍豪 藥 R W W

今日共產黨之真諦何在？

進化與革命

赤俄最近之經濟狀況

世界勞動運動消息

少年國際紀念日

赤國際工聯（I·S·R）的通告

中國社會主義青年團的第一次全國大會附錄

共產國際執行委員會驅逐法伯宣言

新刊評論

『無所謂宗教』

編輯室雜記

本誌特別啓事

第三號（一九三二年十月一日）

我們的職務

現在中國少年應有的覺悟

告少年（續）

革命的戰略

男女問題不成問題的解決

世界勞動運動消息

現在的責任

莫斯科的判決案

共產國際第四次會議日程

少年國際第三次世界會議

美國勞動同盟

新刊評論

『少年國際』

一個悲壯的報告

通訊

記者致曼君

新刊出版預告

“Clarté Universitaire”

第四號（一九三二年十一月一日）

缺

第五號（一九三二年十二月一日）

——俄羅斯革命五週紀念——

無產階級革命的俄羅斯

十月革命

五年的奮鬥

俄羅斯革命中的不朽

十月革命和共產國際第四次世界會議

俄羅斯革命的教訓

第六號（一九三二年十二月十五日）

缺

第七號（一九三三年三月一日）

反對帝國主義聯合戰綫怎樣在中國應用？

中國勞動運動報告（于第四次國際會議）

甚麼是無產階級專政？

馬克思主義辯證法底幾個規律

壹個無政府黨人和壹個共產黨人的談話

旅法的中國青年應該覺醒了——投機改良與革命

第八號（一九三三年四月一日）

通訊

記者致曼君

新刊出版預告

“Clarté Universitaire”

第四號（一九三二年十一月一日）

缺

第五號（一九三二年十二月一日）

——俄羅斯革命五週紀念——

無產階級革命的俄羅斯

十月革命

五年的奮鬥

R

石人

允常

紅鴻譯

奈因譯

伍豪

汪化

列寧

允常譯

托洛斯基作

共產國際執行委員會

共產國際執行委員會

Wm. Z. Foster 著

允常譯

R

石人摘譯

石夫節譯

Y·K

列父

伍豪

W譯

L譯

飛飛譯

F

伍豪

Victor Serge 著

季諾維埃甫著

托洛斯基著

飛飛譯

F

伍豪

W譯

L譯

飛飛譯

F

革命之火燃了！

民主革命的正軌——革命的政治爭鬭“民權運動”

“三位一體”□軍閥賤房的北京政府毆打請願學生

中國勞動界空前的犧牲——野蠻軍閥槍殺了二百餘人

國際共產黨綱底草案

馬克思主義的道德觀

一個無政府黨人和一個共產黨人的談話（續）

法比佔據魯兒的面面觀

“旅歐同學的共產運動與中國前途”

書報介紹

『共產主義與經濟進化』

『工人生活』

第九號（一九三三年五月一日）

我們的呼聲

馬克思——共產主義創造者

國際共產黨綱底草案（續）

無產教化

片山潛底演說

在中國的共產主義運動

充滿各國底階級爭鬭聲與國際情勢

書報介紹

『無產階級專政』

第十號（一九三三年七月一日）

歷史要走到無產階級專政（摘自法蘭西內戰）

離開政治的性質

最近的國際青年運動

“工人與政治”

フランス勤工儉學運動小史（下）

一個無政府黨人和一個共產黨人的談話（續）

國際帝國主義之爭霸及無產階級革命

勤工同學應當與工友作實際的親善

書報介紹

『共產黨周刊』（法國共產黨機關報）

『新工人』（旅法華工第一、第二兩分會共辦之刊物）

附錄

爲國際共管中國鐵路事告旅歐華人

第十一號（一九三三年八月十五日）

一部缺

中國的地位與改造

一個無政府黨人和一個共產黨人的談話（完）

甚麼是無政府黨人底道德？

健社綱領草案批評

第十二號（一九三三年十月二十日）

一部缺

甚麼是無政府黨人底道德？（續）

國際間有產階級專政與無產階級革命底新情勢

讀者之聲

第十三號（一九三三年十二月十日）

一部缺

權力的原理

蘇維埃聯邦底新憲法（譯自國際通信二十八號）

英法爭霸中的歐洲形勢

Y·K

卓宣

記者

少年雜誌社印布

卓宣

Y·K

T·S

T·S

T·S

T·S

卓宣

昂格斯著 抱兮譯

勻口譯

卓宣

II 『赤光』半月刊

第一期（一九二四年二月一日）

赤光之宣言

軍閥統治下的中國

列強共管中國的步驟

領袖國民革命的中國國民黨

世界資本主義的反動風

醞釀革命的各團體聯合會

可希望的旅法華工大團結

過去一年之德意志

莫斯科通信

旅歐中國共產主義青年團爲救濟德國無產階級事告旅歐華人

第二期（一九二四年二月十五日）

悼列寧

革命救國論

關稅主權與資產階級

華府會議後的美帝國主義者

親美派的中國人聽着！

列寧死後的蘇聯

英國工黨內閣之前途

可注意之侵略主義先鋒者的謬說

過去一年之德意志（續）

讀者論壇

編集室雜記

第三期（一九二四年三月一日）

赤光

國民革命底必然和可能

國際帝國主義乘火打劫的機會又到了

兩個不惹人注意的問題

法國強盜已自行揭破華盛頓會議黑幕了

救國運動與愛國主義

弱小民族的主權收回運動

新蘇聯邦與帝國主義——一九一七至一九二四

羅拜在羅馬教皇腳下的中國學生

旅德的中國人快興起了

讀者論壇

巴黎中國書報社啓事

第四〇六期

缺

第七期（一九二四年五月一日）

旅歐華人須在聯俄反俄底聲浪中靜觀一下

英帝國主義者之侵略西藏

三百多條生命換來這樣三條要求

又是一個樂志華和田仲香的繼死者

將開的國際共產黨第五次大會

批評曾琦君底神聖聯合與統一前敵

實話的反感

讀者論壇——預祝

第八期（一九二四年五月十五日）

米索

任卓宣

伍豪

飛飛

飛飛

伍豪

翔

銳

耻

强

鼎銘

任卓宣

强

翔宇

飛飛

伍豪

林蔚

伍豪

褚鳳華

中山死耗

園丁的話

北洋軍閥的內閣

破壞中俄協定的幾重黑幕

北洋軍閥與外交系

華府會議的又一教訓

無線電臺果將實現共管了

德國革命運動的過去

意大利的選舉

蘇俄對中國底態度究竟怎樣？

可注意的中法友誼會

航空學會的害群之馬

巴黎中國書報社啓事

第九期（一九二四年六月一日）

國民革命與階級爭鬥

國內各界與留法各界

共管中國江河的新形勢

帝國主義報紙宣傳的外蒙獨立後狀況

這纔是一個確實的“進兵”中國！

怕死的中國人須要另尋活路

倒底不愧是社會主義的國家

法國選舉以後

甚麼叫造謠中傷？

一個小結束

答曾琦君書

再論中國共產主義者之加入國民黨問題

鑿道的工作

讀者論壇——小言

フランス勤工儉學運動小史（下）

F・L

伍豪

飛飛

飛飛

恩來

飛飛

伍豪

恩來

卓宣

林蔚

恩來

任卓宣

任卓宣

恩來

恩來

恩來

恩來

林蔚

恩來

卓宣

任卓宣

恩來

劉伯莊

小艸

第一〇期（一九二四年六月十五日）

三個國際的三個世界會議

馬克思主義底民族自決

美國帝國主義者之對華政策

中俄協定的簽字後

愧死中國人的蒙古共和

太平洋上的新風雲

爲周道事答湖南學生會書

華法教育會書信代轉處啓事

巴黎中國書報社啓事

第一一〇一六期

缺

第一七期（一九二四年十月十五日）

《北京反帝國主義大同盟》

中國革命運動之進化

國際帝國主義壓迫國民革命的意義

此次軍閥內亂之客觀的原因

反帝國主義的國際聯合之真發展

國際聯盟第五次會議底新意義

旅法革命黨人第一次示威運動

巴黎的雙十節

歡迎新工人重行出版

青年黨之與教徒軍閥和帝國主義

法國資本家虐待中國女子

好利害的反革命報紙啊！

忠告反共產主義的國民黨人

任卓宣

恩來

恩來

恩來

恩來

恩來

杜洛茨基

卓宣

至剛

□□

李富春

富春

記者

記者

記者

輝璋

郭隆真

少元

卓宣

你們就會學像了曾琦？

讀者之聲

編輯餘談

第一八期（一九二四年十一月一日）

告被壓迫人民

共產黨做國民革命底論據

再評宣傳東方文化

軍閥內亂與國民革命

我們對於北京政變底態度并告旅歐華人

歡迎亞刺伯人底國民運動

英國工黨政府之失敗

德國之政爭

世界工人階級底兩條路

旅法最近兩個重要會議

柏林底雙十節與柏林底『老』學生

請看反革命的青年黨之大肆其捏造

悲乎華法教育會

青年黨纔是陳炯明在法所設立底反革命分部啊！

哈哈！「同床異夢」！

編輯餘談

特別啓事

第一九期（一九二四年十一月七日）

爲俄國革命七週年紀念告旅歐華人

光榮的日子

俄國革命底馬克思主義觀（上）

中國共產黨第三次對於時局宣言

共產黨人歌

旅歐中國共產主義青年團

範嚴

任卓宣

愚甫譯

赤光十八期重大錯處之更正

第二〇期

缺

第二一・二三期（一九二四年十二月十五日・一九二五年一月一日）

爲徐樹錚來法告旅歐華人

蘇俄與被壓迫民族

駁曾琦君底內除國賊外抗強權釋義

中國底政治現狀

請看國際帝國主義之陰謀

國民革命之進展

世界反動潮中底一綫曙光

旅法階級爭鬭中之必然現象與旅法工人

又「一件騙款案」

國民黨底新工作

我們的反對者之蘇俄現狀談

共產黨人底血與有產階級底刀

請看先聲週報之第四批造謠的新聞

「八分真理」底由來

讀者之聲

一個反對宗教之應聲

糞槽狗賣香水

編輯餘談

第二三期（一九二五年一月十五日）

我們底三個死者

蘇俄與中國

中國共產黨對於時局之主張

旅歐中國共產主義青年團

任卓宣

卓宣

伍豪

希賢

卓宣

富春

佈仁

肇橋

富春

愚甫譯

任卓宣

希賢

蔡暢

廣西留法學會

江樂寧

記者

棲生

卓宣

紅燄 樸生 記者 肇橋 赤誠 卓宣 記者 樸生 樸生 覺奴 濟光 樸生 記者 卓宣 至剛 紅燄 褚鳳華 卓宣

特載——中國共產黨第四次大會宣言
旅法東方民族追悼孫中山大會籌備會啓事

第二九〇三二期

缺

第三三期（一九二五年六月七日）

——反對帝國主義屠殺上海市民特刊——

缺

III 『國民』半月刊

第一〇二期

缺

第二二期（民國十四年二月二十五日）

民族主義

本報改版底幾句話

我們要怎樣纔能當一個國民黨人？

評國民會議

段祺瑞之最近政績與各軍閥勢力之消長

風起雲湧的國民會議

反基督教運動

協約國的債務問題

遍布全球底國民運動

旅德的明星

旅法的「二七」

先聲週報之狂吠

（錄自本黨改組大會宣言）

京岐 記者 益生 S·T 益生 季蟠 卓宣 W·K 家康 京岐

隨感錄

(一) 青年黨麼？拆白黨啊！

(二) 「任卓宣自討沒趣」

黨務（一月份）

(一) 總支部

(二) 駐德支部

啓事

特載

第三三期（民國十四年三月十日）

《中國國民黨第一次全國代表大會宣言》

民權主義

我們的責任

評日俄條約

請看目下的中國狀況

國民革命聲中之紀念列寧會

協約國的債務問題（續）

世界被壓迫民族與世界帝國主義之爭鬭

旅法勤工儉學學生總會之新運

隨感錄

(一) 「以子之矛，陷子之盾」

黨務

啓事

卓宣 京岐 本總支部

卓宣 京岐